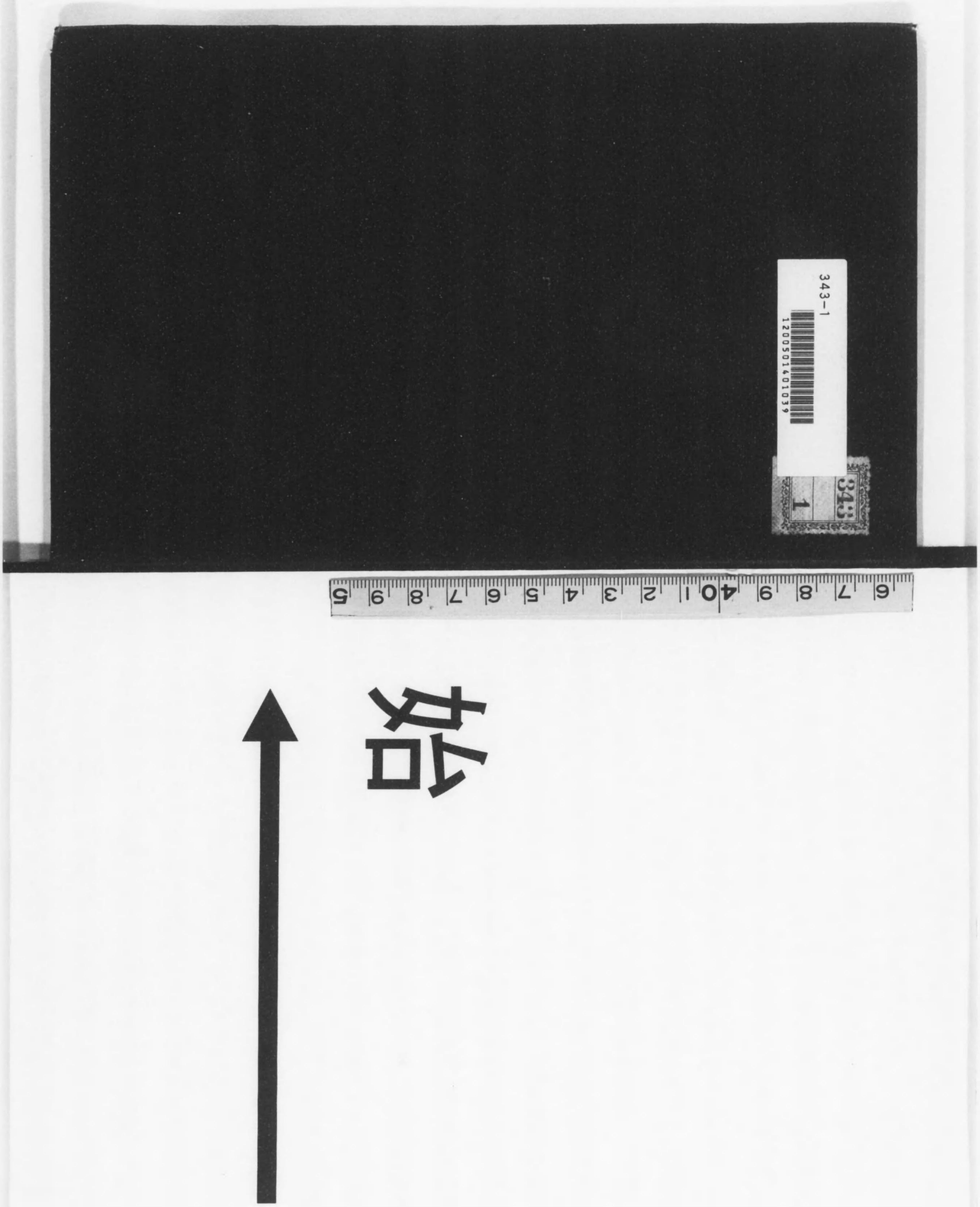

343-1
1200501401039
343
1
背

社團法人 忠勇顯彰會編纂

# 支那事變 忠勇列傳

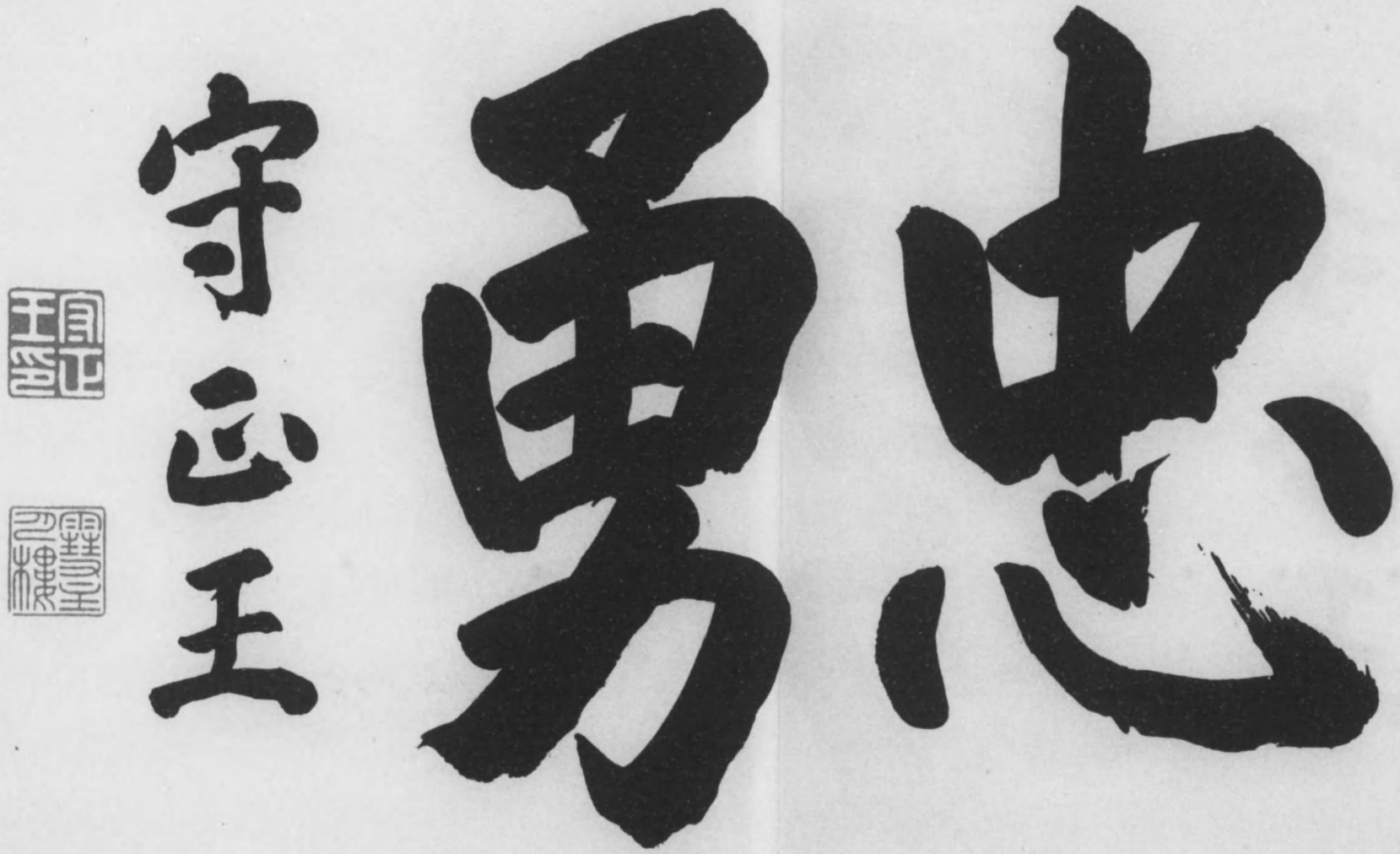
## 陸軍之部 第四卷

昭和十四年 帝國圖書館藏

明治天皇御製

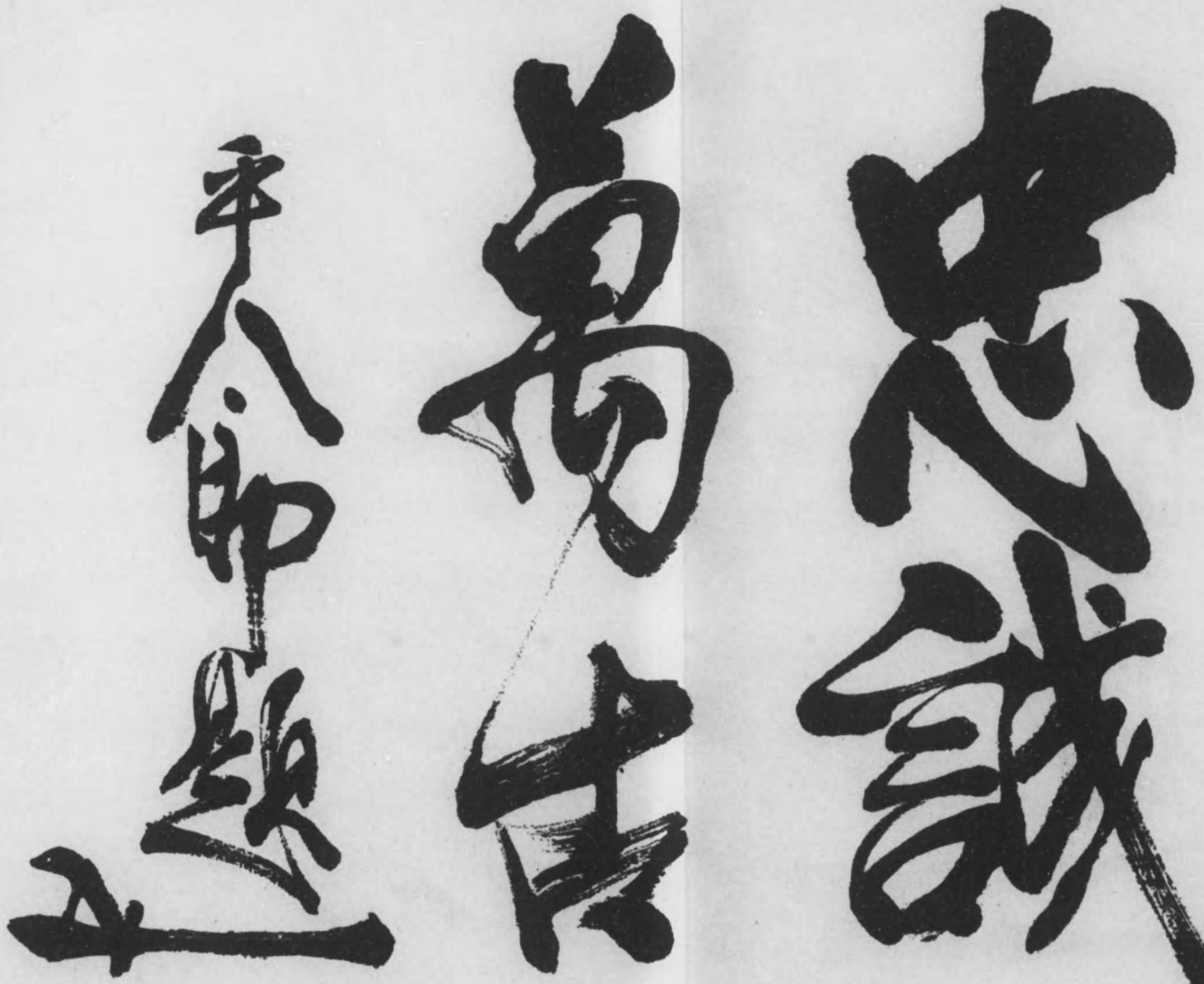
世と共に移りゆくとはいへど国民の為めいかでおもはざらん

侍従伯爵東郷平八郎謹書




本會總裁　梨本宮守正王殿下御筆

元本會研鑽藏　侯爵　東郷平八郎閣下題字



前陸軍大臣　板垣征四郎閣下題字

流芳千古

板垣征四郎尊

前海軍大臣　米内光政閣下題字

忠烈

光政

343
1

# 序

皇德ヲ六合ニ施シ德化ヲ八紘ニ展ベ以テ普ク人類共存共榮ノ慶ヲ俱ニセントスルハ是レ我ガ皇道不磨ノ大精神ニシテ肇國以來不動ノ國是デアリ、我等大和民族ニ課セラレタル尊キ大使命デアル。過グル日清日露ノ兩戰役モ近クハ滿洲事變モ皆是レ此ノ使命ヲ果サンガ爲ノ聖戰ニ外ナラナカツタ。吾等ノ父祖先輩ハ克ク是等ノ國難時艱ヲ打開シテ國運ノ隆昌ヲ圖リ、又東亞諸民族ノ爲其安寧秩序ノ維持ニ大ナル貢献ヲ致シ、漸次東亞黎明ノ曙光ヲ認ムルニ至ツタ。是レ固ヨリ大稜威ノ然ラシムル所、皇國軍民ノ血肉ニ祖先以來繼承セル忠君愛國ノ魂ガ躍動シ又光輝アル國史ニ依リ

刺戟鞭撻セラレシ賜デアツタ。

然ルニ世界ノ視目ハ日露戰爭ノ終末ヲ以テ一轉機ヲ劃シタ。即チ列國ハ我ガ國力ノ眞價ヲ認ムルト共ニ列强中東亞ニ野望ヲ抱ク國々ハ新興日本ノ發展ヲ喜バズ其東洋ノ盟主タルヲ忌避シ、利害ノ相反スル所正義人道ヲ無視シテ事每ニ壓迫的排日ノ行動ニ出デ遂ニ唇齒輔車ノ關係ニアルベキ隣邦支那ヲ使嗾シテ抗日ノ擧ニ出デシメ、又頑迷ナル蔣政權ハ之ヲ奇貨トナシ夷ヲ以テ夷ヲ制スル陋策ヲ擅ニシ、敢テ我ガ帝國ノ既得權益ヲ蹂躪シテ遂ニ挑戰ノ暴擧ニ出デ、加之無辜ノ自國民衆ヲ塗炭ノ苦ミニ陷レ恬然タルガ如キハ神人共ニ赦サザル所、茲ニ我ガ帝國ハ敢然起チテ蔣政權膺懲ノ一大聖戰ヲ起スニ至ツタノデアル。



今ヤ皇國ノ軍民ハ皇猷翼賛ノ一途ニ擧國必勝ノ信念ヲ以テ奮鬪シ着々其成果ヲ收メツツアリ。就中忠勇無雙ノ皇軍ハ陸ニ海ニ空ニ偉大ナル戰果ヲ收メ蔣政權ヲシテ啞然タラシメタルハ勿論克ク武威ヲ中外ニ宣揚スル事ヲ得タ。其間赫々タル武勳ヲ奏シテ敵彈毒刃ニ殪レ聖戰ノ尊キ犧牲トナリシ幾多將兵ノ忠勇義烈トソレ等肉親者ノ烈々タル忠誠ニ至リテハ正ニ鬼神ヲ哭カシムルモノガアリ眞ニ軍民ノ龜鑑ト謂フベキデアル。吾人ハ前途尙遼遠多難ナル時局ニ鑑ミ之等尊キ犧牲者ノ心ヲ以テ心トナシ粉骨碎身飽クマデモ聖戰ノ目的貫徹ニ邁進スルト共ニ其遺勳ヲ千載ニ傳フベキ責務ヲ有スル。

明治天皇ノ御製ニ

世と共に語り傳へよ國のため
命をすてし人のいさをを

ト仰セラレテアル。

我ガ忠勇顯彰會ハ日露戰爭以來累次ノ聖戰ニ殉職セル勇將猛兵ノ忠勇列傳ヲ編纂刊行シ其忠烈ヲ顯彰シテ芳名偉勳ヲ千舌ニ傳ヘ一ハ以テ聖旨ニ副ヒ奉リ一ハ以テ英靈ヲ弔ヒ遺族ヲ慰藉スルト共ニ後昆修養ノ龜鑑タラシメン事ニ努メ來レルモノナルガ、今次事變ノ忠勇列傳タルヤ現代戰ノ特質、進歩セル各兵種ノ性能、而シテ戰歿者ノ偉大ナル精神力ヲ精察シテ實戰ノ眞相ト其功績ノ眞價トヲ傳ヘンガ爲ニハ容易ナラザル努力ヲ要スル。加之戰歿將兵ノ



增加スルニ伴ヒ益々其容易ナラザル大事業タルヲ信ズレドモ幸ニ貴重ナル軍部資料ト戰地ニ於ケル上官戰友ノ信書等ニ基キ百折不撓献身的ノ努力ヲ捧ゲテ所期ノ目的ニ邁進セン事ヲ希フ次第デアル。

幸ニ吾人心血ノ結晶タル本列傳ガ幾萬戰死者ノ靈前ニ記念的家寶トシテ光彩ヲ添ヘ且遺族慰藉ノ一助トナリ、幽明一如雄魂忠靈ガ永久ニ遺族並ニ子孫ノ血肉ニ生キ遺族並ニ子孫モ亦高邁崇高ナル護國ノ英靈ニ生キ以テ皇猷ヲ扶翼シ奉リ又一家ノ前途ニ神靈ノ加護佑助ヲ具現スルニ至ラバ吾人ノ本懷之ニ過グルモノハナイ。

昭和十四年七月聖戰第二週年記念ノ日

社團法人 忠勇顯彰會

會頭 樞密顧問官 清水澄



# 凡例

一、本書發行ノ目的並ニ本會ノ趣意概歴ハ序文及卷末ニ記載シアリ。

二、本卷ニハ昭和十三年四月二十三日第一回ニ行賞ヲ發表セラレタル陸軍戰歿殊勳者中ノ三百四十七名及同年七月二十八日第二回發表者中ノ三名合計三百五十名ヲ掲載シアリ。

三、昭和十二年七月七日以降滿洲國ニ於テ匪賊討伐等ノ爲忠死シタル者ハ支那事變忠死者トシテ取扱ハレアルヲ以テ本書ニ掲載セリ。

四、本書傳記掲載順序ハ階級毎いろは順ニ依レリ。

五、傳記ニ多少精粗繁簡ノ別アルハ資料ノ多少ニ依ルモノニシ

テ資料ノ蒐集ニハ大ニ努力シタル所ナルモ遺憾ナカラ完キヲ得サルモノアルハ洵ニ已ムヲ得サル所ナリ。

但シ本書中戰場ニ於ケル行動武勳ハ當局ノ特別許可ヲ得テ專ラ陸軍ノ調書ニ據リ記述セルモノナリ。

六、肖像掲載ナキモノハ乍遺憾終ニ寫眞ヲ蒐集シ得サリシモノナリ。

七、部隊番號其他港灣出發地、上陸日時、地點等軍ノ機秘密保持ニ關係アル事項ハ之ヲ省略シ又部隊ハ當時ノ部隊長姓ヲ冠シテ表示セリ。

八、本書ハ非賣品ニシテ本書掲載ノ戰歿者全遺族各位ニ寄贈ノモノハ國民ノ熱誠ニ依ル陸海軍恤兵金ヲ以テ支辨セラレタルモノナリ茲ニ特記シ感謝ノ意ヲ表ス。

支那事變 **忠勇列傳** 陸軍之部 **第四卷目次**

明治天皇御製

御題字

本會總裁 大勳位 梨本宮守正王殿下

題字

元本會副總裁 故侯爵 東鄕平八郎閣下

前陸軍大臣 板垣征四郎閣下

前海軍大臣 米内光政閣下


一、序……會頭樞密顧問官 清水澄

一、凡例……一一二

一、索引……一一四

一、將校准士官之部……一一六

一、下士官之部……七〇—三六九
一、兵　之　部……三七〇—八三一
一、忠勇顯彰會趣意概歴……末　尾



支那事變

# 忠勇列傳　陸軍之部　第四巻

## 索引

（本索引ハ姓ノ發音ニ從ヒいろは順ニ排列シ索引ノ便ヲ圖リ「ゐ」ハ「いえ」「ゑ」ハ「をう」ニ「おう」ニ「かう、かふ」ハ「とう」ノ部ニ收メタリ）

### い

歩兵中尉　井關光雄（鳥取縣）　人格崇高温情深き小隊長。死を決して堅壘を突破す……一六
歩兵少尉　猪股英雄（秋田縣）　優秀なる機關銃小隊長陽高城奪取に奪取に勇戰し戰勝の途を拓く……四〇
歩兵准尉　飯田時造（茨城縣）　豪快の勇士興安縣下に寡兵克く皇軍の武威を宣揚して玉碎す……六〇
歩兵曹長　飯島正三（群馬縣）　優秀なる本部書記克く連絡の重任を果し惜しくも拒馬河畔の空爆に散る……七〇
歩兵曹長　稲村秀信（鳥取縣）　優秀なる中隊指揮班長姚官屯の血戰に奮闘し戰勝の基礎を作る……七三
工兵曹長　石地源三（兵庫縣）　忻口鎭の難戰苦闘に偉功を奏し全軍戰勝の端緒を拓く……七四
歩兵曹長　岩林　巌（兵庫縣）　老練にして勇敢なる輕機分隊長張新庄夜襲に奮戰し敵陣内に玉碎す……七七
歩兵軍曹　飯田　實（栃木縣）　職責觀念旺盛の指揮班員克く其の任を果して大冊河畔に玉碎す……八六
歩兵軍曹　井上半之助（兵庫縣）　忠烈孝悌神に通ずる勇士滄州血戰の華と散る（義烈）……八八
歩兵伍長　飯島朝五郎（群馬縣）　勇敢なる觀測手敵前至近に近迫歩兵砲の射擊を有効ならしむ……一二九
歩兵伍長　市山光利（兵庫縣）　決死敵前に鐵條網を破壞して姚官屯驛占領の端を拓く……一四〇
歩兵伍長　伊塚吾良（兵庫縣）　明朗沈勇の輕機關銃分隊長滄州激戰の華と散る……一四三

歩兵伍長　井上秋治（群馬縣）　平漢線各地に勇戰し遂に拒馬河畔空爆に散る……一四六
歩兵伍長　石川慎（栃木縣）　模範的分隊長平漢沿線に勇戰偉功を樹て拒馬河畔に玉碎す……一四八
歩兵伍長　石田長壽（茨城縣）　王谷莊堡石頭村攻撃に分隊全滅する迄奮戰して戰勝の端を拓く……一五〇
砲兵伍長　稲富政吉（福岡縣）　忠孝兩全の勇士南京郊外に奮闘し重要任務を遂行す……一五三
砲兵伍長　井口利一郎（山梨縣）　優秀なる觀測車長にして鄕土の模範青年上海戰線の華と散る……一五四
輜重兵伍長　泉田元（大阪府）　廣陽鎭に於て敵の奇襲に逸走せる重要書類積載駄馬を索めて職に殉ず……一五七
歩兵上等兵　飯田豐吉（茨城縣）　重傷に屈せず奮闘し石家莊攻撃の華と散る……三七〇
歩兵上等兵　荊原喜藏（鹿兒島縣）　精鋭なる後備兵上海戰線に活躍し重要敵情を報告して殪る……三七三
歩兵上等兵　稲見喜三郎（兵庫縣）　積極豪膽の勇士津浦戰線に奮闘し遂に丁莊の激戰に玉碎す……三七四
歩兵上等兵　岩本正好（鳥取縣）　狙撃兵蘆溝橋の攻撃に敵の指揮官を殪し尙負傷を押して奮戰散華す……三七六
歩兵上等兵　岩松定夫（兵庫縣）　勇敢剛膽克く奮戰して王巧子庄に玉碎す……三七九
歩兵上等兵　今村良長（長野縣）　慧眼溫厚の勇士黃河北岸の列車追撃戰に奮闘して玉碎す……三八一
歩兵上等兵　市田重太郎（兵庫縣）　誠實勤勉克く兵の本分を完ふし圍河村攻撃に勇戰奮闘して玉碎す……三八三
歩兵上等兵　石井操（岡山縣）　孝悌の勇士津浦線に活躍し遂に西邊庄の激戰に殪る……三八五
歩兵上等兵　石井吉次郎（鳥取縣）　良民良兵の擲彈筒手毎戰奮闘偉功を樹て遂に南趙扶鎭に散る……三八八
騎兵上等兵　伊ケ谷喜一（千葉縣）　勇敢なる輕機關銃手一文字山に奮闘し寡兵克く守地を確保す……三九〇
工兵上等兵　池田太郎（東京市）　操舟機手江南水路に活躍偶々洛陽湖畔敵襲に奮戰散華す……三九一


## は


歩兵軍曹　春井賤夫（兵庫縣）　苗家の攻撃に彈雨の下決死火砲夜間射撃の標燈を設置して散華す……九一
歩兵軍曹　長谷川喜藏（鳥取縣）　夜間斥候單身剛膽蘆溝橋の敵情を偵察し大隊の黎明攻撃計畫に貢献す……九四
歩兵上等兵　原田彌吉（三重縣）　擲彈筒手挺身奮戰敵機關銃を製壓して滹沱河の華と散る……三九四
歩兵上等兵　原傳一（島根縣）　至誠情熱の勇士重傷を負ひながら鐵條網を破壞し通州城外に散華す……三九六
歩兵上等兵　春田智（愛知縣）　匪襲に際し前哨及斥候として奮闘克く其の任務を完ふし北滿西南汶に散る……四〇〇
歩兵上等兵　林福榮（長野縣）　忠孝兩全の勇士黃村決戰に奮闘し戰勝の端を拓く……四〇三
歩兵上等兵　橋本強（岡山縣）　平時の良兵戰時の勇士、東邊庄の攻撃に奮戰して惜しくも散華す……四〇四
歩兵上等兵　橋本恒吉（栃木縣）　不屈不撓萬難を克服して任務に邁進し遂に院家村の突撃に玉碎す……四〇六
工兵上等兵　鳩具鉦吾（茨城縣）　重傷にに屈せず煙幕を作り友軍の拒馬河渡河戰を容易ならしむ……四〇九
工兵上等兵　原田福市（栃木縣）　江南追撃戰に多數の架橋を完成し遂に南京郊外に護國の華と散る……四一一


## に


歩兵上等兵　西谷辰三（滋賀縣）　模範店員圍河村に奮戰尙も敵を猛追して護國の華と散る……四二三
輜重兵上等兵　西澤與惣吉（滋賀縣）　特務兵敵襲に當り守地を死守し奮戰して江南の華と散る……四二五


## ほ


歩兵少佐　星野義郎（宮城縣）　俊秀勇敢なる機關銃中隊長拒馬河畔に奮戰し職に殉ず……四
歩兵伍長　堀田定藏（北海道）　忠節に透徹せる勇士衆敵を撃攘し遂に南苑に玉碎す……一五九

と

歩兵伍長　田路頼一（兵庫縣）　勇敢なる小銃手東花園に奮闘して戰勝の端を拓く……一六三
衛生兵上等兵　徳光　通（岡山縣）　至誠一貫の衛生兵彈雨下に職分を完ふし從容西邊庄に玉碎す……四一七
砲兵一等兵　豐田正一（愛知縣）　忠誠難局に奮闘し遂に大場鎭序幕戰に玉碎す……七七三

ち

歩兵軍曹　直原勝男（岡山縣）　勇敢なる分隊長馬廠閘門の敵陣地に突擊中敵彈に斃る……九七

ぬ

歩兵上等兵　貫與友二（兵庫縣）　溫厚忠誠の勇士東花園にトーチカを粉碎して竟に玉碎す……四二〇

お

歩兵中尉　岡本善太（福岡縣）　獨斷敵の側防機關を制壓し突擊戰勝の端を拓く……一九
歩兵少尉　大木金治郎（埼玉縣）　長城線の作戰に偉功を奏して玉碎す（模範的機關銃小隊長）……四三
歩兵少尉　岡本春雄（鳥取縣）　優秀なる機關銃小隊長人合庄の激戰に難局を打開して玉碎す……四七
歩兵軍曹　大島傳一（栃木縣）　慧眼克く戰機を觀破して偉勳を奏し遂に大名城に玉碎す……九九
歩兵軍曹　織本清一（栃木縣）　勇敢俊敏なる指揮班員每戰奮闘し竟に大冊河畔の華と散る……一〇一
歩兵軍曹　奥村太郎（岡山縣）　獨斷敵の側防機關銃を撲滅し東邊庄の華と散る……一〇四
歩兵伍長　大久保八百三（長野縣）　滿洲事變の殊勳機關銃手小趙村に奮戰再び殊勳を樹てゝ玉碎す……一六四
歩兵伍長　小田垣敏郎（兵庫縣）　優秀なる傳令屢々武勳を奏し清涼店の激戰に玉碎す……一六六
歩兵伍長　太田　保（兵庫縣）　滄州血戰に突擊路を開き又トーチカを制壓して戰勝の端を拓く……一七〇
歩兵伍長　大木善吾（栃木縣）　堅忍勇敢の小銃兵平漢沿線に奮闘遂に滹沱河畔に散る……一七三
歩兵伍長　大塚利一（群馬縣）　勇敢なる速射砲手致命傷を受くるも自己の任務を連呼しつゝ瞑目す……一七五
歩兵伍長　奥村琢男（廣島縣）　勇敢なる機關銃手萬難を排して自己の……一七七
歩兵上等兵　大谷友次郎（群馬縣）　任務を完遂し遂に靈壽攻擊に玉碎す
歩兵上等兵　大笹久太（栃木縣）　猛火の下進んで命令傳達の重任を完ふし彰德城の華と散る……四二三
歩兵上等兵　大木本　正（和歌山縣）　決死院家村の攻擊に奮戰格闘して手榴彈に玉碎す……四二四
歩兵上等兵　岡崎武雄（茨城縣）　北滿地局子に於て寡兵衆匪と奮戰壯烈なる戰死を遂ぐ……四二六
歩兵上等兵　岡井光次（兵庫縣）　優秀なる傳令京漢沿線に奮闘し竟に衛河々畔の激戰に玉碎す……四二八
歩兵上等兵　岡本輝雄（兵庫縣）　平時の良兵戰場の勇士奮戰力闘して丁莊の夜襲に玉碎す……四三一
歩兵上等兵　小串政吉（愛知縣）　滄州の激戰に決死奮闘遂に戰勝の尊き礎石となる……四三三
歩兵上等兵　押井勝太郎（千葉縣）　重傷を祕して擔架兵の任務を全うし遂に江南戰線の華と散る……四三六
工兵上等兵　小澤富太（長野縣）　敵の掩蔽部を奪取し蘆溝橋城壁上に玉碎す……四三八
工兵上等兵　大平延弘（栃木縣）　京漢線の諸渡河戰に奮闘せる勇士遂に大名城西門の破壞作業に殉ず……四四〇
輜重兵上等兵　大崎　隆（東京市）　至孝の勇士京漢戰線に奮闘し衛河偵察戰の華と散る……四四二
輜重兵一等兵　大島敏夫（愛知縣）　江陰要塞攻擊に巨彈の下勇敢重砲彈藥の補充に奮闘中散華す……四四四
輜重兵一等兵　大古一親（徳島縣）　悲壯の決意を以て參戰せる勇士糧秣補給中楊行鎭激戰の華と散る……七七五
　　北支戰線の後方勤務に活躍し竟に涿州郊外の夜襲に斃る……七七七

輜重兵一等兵　岡本　朗（大阪府）　皇軍輜重の華惜しくも遂に山西廣陽鎮に散る……七七九

わ

歩兵軍曹　渡邊孟男（栃木縣）　分隊長として永定河畔に奮戰し戰機の看破……一〇六
歩兵伍長　湧井憲次郎（栃木縣）　機宜の獨斷は小隊の突擊を容易ならしむ
歩兵上等兵　和氣　溢（栃木縣）　堅忍勇敢の機關銃手院家村攻擊に奮戰斃るゝも尙銃把を離さず……一七九
工兵上等兵　渡邊道政（愛媛縣）　勇敢なる警戒兵敵襲を擊退し更に殘敵を捕獲せんとして新挑河に散る……四四七
萬死を賭して上陸戰の戰果を擴張し寡兵羅店鎭に奮鬪して玉碎す……四四九

か

歩兵中尉　垣尾文夫（兵庫縣）　人合庄攻擊に偉勳を奏し遂に淸涼店の華と散る……二一
歩兵少尉　梶原祐藏（山梨縣）　寡兵克く十倍の匪賊を擊退し遂に北滿の華と散る……五〇
銀工軍曹　片桐祐一（愛知縣）　高射砲隊銀工長日夜奮鬪砲隊の任務達成に貢獻し遂に保定の突爆に散華す……一〇八
歩兵伍長　河合彌七（愛知縣）　乘艇黃浦江上に破壞し上官の危急を救はんとして犧牲となる……一八一
歩兵伍長　川端福三郎（群馬縣）　一死奉公の決意固く可西務に奮戰偉功を奏し惜しくも空爆に散華す…一八四
歩兵伍長　川島政吉（埼玉縣）　一死殉忠の決意固く奮戰克く其の任を完うし張家口城外に散る……一八六
歩兵伍長　川村　潔（鳥取縣）　決死敵前に水濠を偵察し壯烈堅陣の一角を奪取す（**姚官屯血戰の華**）…一八八
歩兵伍長　加藤高松（東京市）　小隊連絡掛として勇敢其の任を完うし遂に張家口城外に散る……一九一
騎兵伍長　河合一夫（愛知縣）　募家橋の苦戰に獨斷要點の敵を擊退し中隊の難局を打開す……一九四
歩兵上等兵　甲斐治三郎（大阪府）　立哨中敵襲を受け神速警報後敵中に突入奮戰して南惣遠に散華す……四五〇
歩兵上等兵　金山武重（島根縣）　擲彈筒手嶮峻の山岳旭に奮戰し小隊突擊の端を拓きて松溝村に散る…四五三
歩兵上等兵　金澤福二郎（栃木縣）　決死第一線に給水の重任を全うし江南戰線に玉碎す……四五五
歩兵上等兵　金子善吉（埼玉縣）　長城線及山西戰線に奮鬪し遂に崞縣城激戰の華と散る……四五七
歩兵上等兵　神林嘉平治（群馬縣）　京漢線守備中敵の奇襲を受け寡兵衆敵と奮戰死守す……四六〇
歩兵上等兵　龜田庄吉（栃木縣）　北白妻攻擊に積極奮戰其の本分を完ふして玉碎す……四六三
歩兵上等兵　龜澤十郎（鹿兒島縣）　壯烈勇敢東北孫の敵陣に突入し惜しくも敵の手榴彈に散る（**兄弟三人出征**）……四六四
歩兵上等兵　茅野隆海（長野縣）　英氣發剌たる輕機關銃手漳河要點の守備を完ふして護國の華と散る…四六六
歩兵上等兵　加藤仲一（鳥取縣）　馬廠附近流河鎭に重機關銃の威力を發揚し戰勝の礎石となる……四六八
歩兵上等兵　川西太平治（兵庫縣）　小銃兵克く其の本分を完ふし潮宗橋の一戰に玉碎す……四七〇
歩兵上等兵　鴨田正男（三重縣）　中隊傳令猛火の下巧に行動して見事重任を果し其の後惜しくも西三教に散華す……四七三
歩兵上等兵　關東松藏（岡山縣）　忠實勇敢の模範的傳令屢々重任を果し惜しくも靜官屯の華と散る……四七五
砲兵上等兵　神尾三朗（愛知縣）　忠孝兩全の高射砲手北支防空に活躍し惜しくも保定空爆に殪る……四七八
輜重兵一等兵　開地義男（石川縣）　上海激戰の後方に尊き責務を果し戰勝の礎石となる……七八一
輜重兵一等兵　神谷　肇（東京市）　重傷を祕して奮鬪し臨終尙職責を顧念して江南の華と散る……七八四

よ

砲兵中尉　吉田精一（福岡縣）　誠忠の敎育家母なき一女を遺して南京攻擊の華と散る……三五
歩兵伍長　吉澤泰藏（茨城縣）　元氏附近戰鬪に歩兵砲小隊敵の急襲を受け決死突入玉碎して砲を守護す……一九六

歩兵　伍長　吉森　豊（岡山縣）　慧眼克く戰機に投合して輕機の威力を發揚し遂に後屯に玉碎す……一九八
騎兵　伍長　余語一正（愛知縣）　孝悌兩全の勇士蔡家橋の苦戰に勇戰奮鬪して散華す……二〇一
歩兵上等兵　頼充義一（兵庫縣）　斥候衆敵の包圍を受け寡兵奮戰敵中に突入し遂に曲六店に散華す……四八〇
歩兵上等兵　米山寅一（山梨縣）　忠勇なる小銃手永定河上流山岳戰の華と散る……四八二
歩兵上等兵　吉田壽雄（兵庫縣）　忠勇なる孝子津浦線に奮鬪し遂に滄州血戰の華と散る……四八五
砲兵上等兵　吉田芳夫（福岡縣）　大軍重圍下に奮鬪南京西側新河鎭に……四八七
輜重兵上等兵　吉河長作（石川縣）　玉碎して所屬分隊に偉動を奏せしむ……四九〇
輜重兵一等兵　余田順治（兵庫縣）　江南戰線の後方勤務に活躍し惜しくも南京城外に玉碎す……四九〇
　　皇軍輜重の華、廣陽鎭の激戰に奮鬪玉碎す……七八六

た

歩兵中尉　鷹尾武二（兵庫縣）　平戰兩時の模範士官馬落坡夜襲に偉動を奏して玉碎す……二七
歩兵少尉　武田忠次（茨城縣）　勇敢機敏の小隊長瀕死の重傷を負ひ業務引繼を爲す……五二
歩兵准尉　田中文三（千葉縣）　瀕死の重傷を受け尙部下を督勵し山西省宋家庄の突擊を成功せしむ……六三
歩兵軍曹　谷川秀吉（兵庫縣）　決死の覺悟固く克く分隊長たる任務に邁進活躍し遂に馬廠戰に散る……一一〇
歩兵軍曹　竹中豐明（兵庫縣）　模範分隊長滄州の激戰に奮鬪し壯烈鬼神を哭かしむ（壯烈）……一一三
歩兵伍長　谷原彪夫（兵庫縣）　沈勇輕敏なる輕機關銃手姚官屯の血戰に奮鬪して玉碎す……二〇四
歩兵伍長　高野伸男（長野縣）　兩大腿部に重傷を負ふも尙任務に邁進し馬頭鎭の華と散る……二〇六
歩兵伍長　田口伊太郎（兵庫縣）　屢々難局に傳令の重任を果して遂に姚官屯に散華す……二〇八

歩兵伍長　田中茂夫（鳥取縣）　沈着勇敢の擲彈筒手屢々偉動を樹て遂に中趙扶に玉碎す……二一一
歩兵伍長　田中俊司（栃木縣）　忠孝一如良兵良民の模範擲彈筒手として奮戰大名城外に散る……二一三
歩兵伍長　竹内英太郎（岡山縣）　身體虛弱の通信手飽迄精神氣魄を以て奮鬪……二一六
砲兵伍長　舘野七郎（栃木縣）　克く其の任を全うして南京城外の華と散る……二一九
歩兵上等兵　田中秀雄（和歌山縣）　勇敢なる輕戰車手石家寨に玉碎す……四九二
歩兵上等兵　田中龜雄（神奈川縣）　北滿地局子に於て寡兵衆匪と奮戰壯烈なる戰死を遂ぐ……四九四
歩兵上等兵　田口草一（埼玉縣）　聖戰の初期に勇戰奮鬪し宛平縣城外の華と散る……四九六
歩兵上等兵　田隅竹志（大阪府）　熾烈なる敵砲彈下彈藥補充に任し大場鎭郊外に玉碎す……四九八
歩兵上等兵　武田繁雄（群馬縣）　圍河村攻擊に奮戰力鬪傷つくも屈せず突擊せんとして散華す……五〇〇
歩兵上等兵　竹本忠市（長野縣）　澤畔店夜襲に負傷するも屈せず尙障……五〇三
歩兵上等兵　竹内國一（愛知縣）　碍物破壞に任じ更に突擊して玉碎す……五〇五
歩兵上等兵　高橋政主（茨城縣）　家運挽回の孝子京漢線光綠鎭驛に奮鬪し護國の華と散る……五〇八
歩兵上等兵　高見市男（兵庫縣）　激戰場裡に傷者の搜索收容を完了し遂に江南戰線の華と散る……五一〇
歩兵上等兵　谷口喜由（兵庫縣）　豪膽眞摯の勇士滹沱河畔陳村に數敵を殪し戰勝の端を開く……五一三
歩兵上等兵　多曾田　豊（岡山縣）　手旗信號中重傷を負ふも屈せず通信を完遂して趙連庄に散る……五一四
騎兵上等兵　谷本好馬（長崎縣）　輕機關銃手克く任務に邁進して滄州の華と散る……五一七
砲兵上等兵　田村武男（岡山縣）　西邊庄攻擊に敵側防機關銃を制壓して中隊の前進を誘起す……五一九
　　愛馬を喪ふも尙他部隊に入りて奮鬪し中支戰場に玉碎す……
　　馬を勞はり、雜路を克服し友軍の危急を救ひ遂に馬腰務に奮戰玉碎す……

輜重兵上等兵　武田行孝（群馬縣）　優秀なる班長京漢線の後方勤務に活躍して元氏郊外に玉碎す……五三一
輜重兵上等兵　竹田信三郎（兵庫縣）　皇軍輜重の華惜しくも遂に山西廣陽鎭に敢る……七八

つ

歩兵伍長　鶴藤豐二（岡山縣）　勇敢機敏の機關銃手東邊庄攻擊に奮戰して職に殉ず……三二
歩兵上等兵　塚越八重茂（北海道）　忠勇なる小銃手駱駝灣の戰鬪に敵の幹部數名を仆し戰勝の途を拓く…五三三
輜重兵一等兵　堤　正一男（兵庫縣）　皇軍輜重の華惜しくも遂に七亘村に散る……七九一

ね

騎兵少尉　根岸理三郎（群馬縣）　機關銃小隊長として勇敢機敏屢々偉勳を樹て遂に大冊河畔に玉碎す……五七

な

歩兵軍曹　中野　稔（鳥取縣）　優秀なる分隊長奮戰克く努め遂に列莊の華と散る……一二六
歩兵伍長　中嶋福一（和歌山縣）　分隊長として匪賊重圍の裡に奮戰職に殉ず……三三三
歩兵伍長　中谷正志（長野縣）　黄村の激戰に右腕を失ふも尙奮戰を續け任務を完ふせる斥候……三三五
歩兵伍長　成田德治（北海道）　忠烈傳令の重任を全うし通州の華と散る……三三八
歩兵上等兵　直井　勇（栃木縣）　輕機關銃手强行渡河の爲第一舟運搬中惜しくも拒馬河畔の華と散る…五三六
歩兵上等兵　中島一雄（鳥取縣）　滄洲の激戰に單身死を以て所屬中隊の突擊路を開設す（**亀鑑兵**）……五三八
歩兵上等兵　中武　薫（宮崎縣）　寡默實踐の勇士上海戰線に活躍し率先難局に當り職に殉ず……五三一
歩兵上等兵　中村　勇（靜岡縣）　眞摯溫厚の勇士山西戰線の要點を守備し任務を全うして職に殪る……五三三
歩兵上等兵　長田滿昌（鳥取縣）　郭庄攻擊に猛火を冒して機關銃彈藥を補充し死するも尙彈藥箱を放さず……五三五
歩兵上等兵　長澤良太郎（兵庫縣）　馬落坡の激戰に重傷を負ふも尙奮鬪して機關銃隊の危急を救ふ……五三七
歩兵上等兵　長澤喜六（東京市）　突擊中重傷を負ひながら尙奮戰格鬪して南苑城外に散る……五四〇
歩兵上等兵　永澤忠男（兵庫縣）　父一人子一人の孝子傷つくも尙奮戰遂に湖宗橋の華と散る……五四三
歩兵上等兵　永富志貴比古（大分縣）　江南戰線に活躍し遂に湯水鎭の激戰に玉碎す……五四五
歩兵上等兵　難波宗一（兵庫縣）　勇敢なる擲彈筒彈藥手姚官屯驛に奮戰して戰勝の端を拓く……五四七
砲兵上等兵　楢崎繁馬（佐賀縣）　大軍重圍下に奮戰南京西側新河鎭に玉碎して所屬分隊に偉功を奏せしむ……五五〇
工兵上等兵　中川幸市（岡山縣）　宛平縣及び居庸關の爆破勇士更に忻口鎭に決死奮鬪して玉碎す……五五二

む

砲兵伍長　村川　清（愛知縣）　優秀豪膽なる觀測手上海戰線に奮鬪して戰勝の途を拓く……三三〇
歩兵上等兵　村山幸吉（茨城縣）　忠勇なる小銃手北支戰場に活躍し拒馬河畔の對空戰に玉碎す……五五五
歩兵上等兵　麥倉作市（栃木縣）　苦戰の間に傳令の重任を果し瀕死尙復命を叫びつゝ保家庄の華と散る……五六八
工兵上等兵　村田篤平（千葉縣）　航行中敵の急襲を受け上陸奮戰して洛陽湖畔の華と散る……五六〇

う

歩兵軍曹　上野辰己（大分縣）　機先を制して敵を擊破し湯水鎭附近の激戰に玉碎す……一一八
歩兵軍曹　牛込隼人（群馬縣）　模範的分隊長澤畔店夜襲に殊勳を樹て彰德城外に散華す……一二〇
歩兵伍長　梅田　茂（群馬縣）　滿洲事變の勇士再び北支に勇戰遂に澤畔店に玉碎す……三三三

歩兵伍長　梅岡茂雄（兵庫縣）　忠誠なる模範兵津浦線警備の華と散る……三三五
砲兵伍長　内田信廣（神奈川縣）　優秀なる後馬駁者江南戰線に活躍して戰勝の端を開く……二三七
砲兵伍長　梅原喜六（神奈川縣）　誠實沈勇の砲手蘇州河畔の激戰に任務を完遂して職に殉ず……二三九
歩兵上等兵　上田清一（大阪府）　敵の大奇襲に奮戰死闘數時間遂に廣陽村の華と散る……五六三
歩兵上等兵　植原孝太郎（群馬縣）　孝子克く奮戰遂に澤畔店夜襲に散華す……五六五
歩兵上等兵　牛澤清茂（長野縣）　黄村血戰の華、單身敵の重機關銃を沈默せしむ（壯烈）……五六七
歩兵上等兵　牛木長吉（群馬縣）　膽勇の小銃手保定會戰に活躍し遂に黄村追擊の華と散る……五七〇
輜重兵一等兵　梅津唯雄（靜岡縣）　熾烈なる敵砲彈下に警戒勤務を完ふし遂に上海戰線の華と散る……七九四

の

歩兵軍曹　野口英一（埼玉縣）　掃蕩班長として決死奮戰陽高城壁上に玉碎す……一三三
歩兵軍曹　野口小太郎（北海道）　精悍なる戰車々長南京城外に奮戰し偉功を奏して殪る……一二六
歩兵伍長　野津本光（鳥取縣）　郭庄に於ける敵の夜襲に特有の射擊劍術……三四一
歩兵上等兵　野田實遠（兵庫縣）　優秀なる機關銃手馬廠附近の戰闘に奮闘し重任を完うして玉碎す……五七三
歩兵上等兵　野口義雄（東京市）　天鎭攻擊に傳令として猛火を冒し前進中惜しくも敵彈に斃る……五七五
工兵上等兵　野口阿久太郎（東京市）　舟首手江南水路に活躍偶々洛陽湖畔の敵襲に奮戰散華す……五七七

く

歩兵少尉　黒澤喜吉（群馬縣）　勇敢機敏の機關銃小隊長死に臨みて尚進擊を號令す……五五





歩兵伍長　黒田勝（岡山縣）　勇敢挺身難局を打開せる輕機關銃手豐臺附近に散華す……二四三
歩兵伍長　倉持留吉（茨城縣）　王谷莊堡石頭村攻擊に分隊全滅する迄奮戰して戰勝の端を拓く……二四六
騎兵伍長　楠忠夫（愛知縣）　蔡家橋の激戰に致命傷を受くるも尚戰はんとせる忠孝兩全の勇士……二四八

や

歩兵准尉　山田英章（鳥取縣）　優秀なる指揮班長東花園の激戰に殊勳を奏して玉碎す（壯烈敵七八人を斬殺す）……六四
歩兵伍長　山崎市作（栃木縣）　拒馬河畔に奮戰重傷を負ふも介抱を拒みて戰友の進擊を促す……三五一
歩兵伍長　山浦秀雄（長野縣）　精練なる機關銃手西保障に奮闘して同地確保の礎石となる……三五三
歩兵上等兵　山口小次郎（京都府）　輕機射手西回村の山岳戰に勇敢挺身敵側防火器を制壓して散華す……五七九
歩兵上等兵　山田芋作（宮崎縣）　忠誠溫良の勇士上海戰の難局に挺身奮闘して玉碎す……五八一
歩兵上等兵　山田龍作（群馬縣）　誠實勇敢なる歩兵砲彈藥手拒馬河畔に奮戰して職に殪る……五八四
歩兵上等兵　山田全一（島根縣）　滅私報國の士、津浦戰線に活躍し遂に燒窰盆の華と散る……五八六
歩兵上等兵　山田市郎（兵庫縣）　家屋に據る敵に對し挺身肉薄手榴彈を投擲して馬庄の華と散る……五八九
歩兵上等兵　山中一平（埼玉縣）　占有地は尺寸も讓らず寡兵克く衆敵と奮戰以て外長城線に散る……五九一
歩兵上等兵　山中喜代一（和歌山縣）　忠烈なる指揮班員中隊長の遺骸を擁しつゝ奮戰して廣陽村の華と散る……五九三
歩兵上等兵　山崎猛郎（岡山縣）　誠實沈勇の勇士津浦戰線に活躍し遂に唐官屯の追擊戰闘に玉碎す……五九六
歩兵上等兵　山倉金治郎（千葉縣）　血路を拓きて傳令の重任を果し加之……五九八
歩兵上等兵　山本武夫（兵庫縣）　直ちに復歸奮戰して北京城外に散る……六〇一
南苑攻擊に傳令瀕死の重傷を負ひつゝ重任を完ふして絶命す……

歩兵上等兵　矢島金太郎（東京市）……六〇三
歩兵上等兵　柳原市太郎（奈良縣）……六〇五
歩兵上等兵　八木改三（大分縣）……六〇七
歩兵上等兵　梁村金次郎（和歌山縣）……六〇九
騎兵上等兵　山中慶三（大阪府）……六一一
工兵上等兵　山口順一郎（福島縣）……六一四
工兵上等兵　山分俊雄（三重縣）……六一六
輜重兵一等兵　山本金吾（愛知縣）……七九八
輜重兵一等兵　山崎誠司（茨城縣）……七九九
輜重兵一等兵　山下卓郎（兵庫縣）……八〇一
輜重兵一等兵　山下大三（愛知縣）……八〇四

**ま**

歩兵中尉　松本三郎（岡山縣）……三〇
歩兵伍長　松島彌一（岡山縣）……三五
歩兵伍長　前田武雄（栃木縣）……三五八
歩兵伍長　黛（マユズミ）祇文（マユミ）（群馬縣）……三六〇
歩兵伍長　松本重眞（群馬縣）……三六二


衆敵の攻撃に狙撃兵沈着毎發必中の射撃を以て之を阻止し遂に陽家庄の華と散る……

敵大部隊の奇襲を受け激戰八時間遂に廣陽村の華と散る……

羅店鎭にて砲火の下平然視界清掃の任務に邁進中迫撃砲彈に斃る……

速射砲彈藥手勇敢機敏彈藥補充の任……

を完ふし惜しくも行宮の華と散る

勇敢なる傳騎所屬隊の爲死闘數時間遂に正太線廣陽村に玉碎す……

敵彈下に作業を敢行中臭淞クリーク畔に玉碎す……

瀕死の重傷を負ひ尚職責を完遂し大場鎭の華と散る……

不言實行の勇士寡兵克く衆敵を支へ遂に保定郊外に玉碎す……

皇軍輜重の華、廣陽鎭の激戰に奮闘玉碎す……

北寧線警備の重任を全うし遂に尊き人柱となる……


歩兵伍長　増田政德（福岡縣）……二六五
歩兵伍長　増原衛一（鳥取縣）……二六七
工兵伍長　正躰房夫（岡山縣）……二六九
歩兵上等兵　松本兼松（東京市）……六一九
歩兵上等兵　松野榮（靜岡縣）……六二一
歩兵上等兵　松田安市（兵庫縣）……六二四
歩兵上等兵　松久純一（兵庫縣）……六二五
歩兵上等兵　松浦秀文（栃木縣）……六二八
歩兵上等兵　松下朝秀（長野縣）……六三〇
歩兵上等兵　前田忠男（和歌山縣）……六三三
砲兵上等兵　丸山慶治（愛媛縣）……六三五
砲兵上等兵　松山廣治（愛知縣）……六三八
輜重兵一等兵　町野一世（岐阜縣）……八〇六

**ふ**

歩兵中尉　福田幸一郎（栃木縣）……三三
歩兵中尉　藤生兵次（群馬縣）……三四
歩兵軍曹　文垣信次郎（兵庫縣）……一二九


敵前上陸に猛火を冒し傷者收容中海中に沒落せし勇敢なる擔架兵……

勇敢なる機關銃分隊長中趙扶の激戰に奮闘して玉碎す……

東花園の攻撃に決死肉彈を以て敵トーチカを

爆破し玉碎して友軍戰勝の端を拓く（**殊勲甲**）……

内蒙揚家庄攻撃に斥候として敵陣近く迫り機を

失せず第一報を呈して再び敵前に引返し玉碎す……

通信兵猛火の下匍匐延線し重傷に屈せ

ず之を繼續して遂に蘇州河畔に散る……

丁莊の夜襲に奮戰力闘惜しくも敵陣内に玉碎す……

勇敢なる輕機彈藥手敵の陣内陣後に奮戰遂に張新庄の華と散る……

忠勇なる輕機關銃手大冊河畔の血戰に奮闘して戰勝の途を拓く……

細心剛膽の勇士優勢なる敵襲の出鼻を挫き西保障に玉碎す……

北滿小推峯山の討匪戰に彈雨の下挺身敵陣

家屋に點火燒却して惜しくも敵彈に斃る……

段列要員敵の來襲に小銃を執つて衆敵と奮戰遂に沙河鎭に玉碎す……

忠烈剛健なる通信手津浦沿線に奮闘し遂に黄河北岸地區に玉碎す……

忠勇なる輜重兵戰闘員として第一線に活躍し遂に江南の華と散る……

勇敢有爲なる將校斥候……

沈着にして勇敢なる小隊長……

大敵を一機關銃に引受けて戰勝の

端を拓き黄河北岸の華と散る（**壯烈**）……

歩兵伍長　藤原　浩（岡山縣）　正確なる射撃を以て東邊庄の難局を打開し戰勝の素因を作る……二七二
歩兵伍長　藤田秀一（兵庫縣）　重傷に屈せず寡兵克く占領地を死守して張新庄に玉碎す……二七五
歩兵上等兵　藤井專三（大阪府）　輕機關銃手勇戰奮鬪克く其の任を完ふして遂に辛庄子に散華す……六四〇
歩兵上等兵　藤井政次郎（和歌山縣）　孝子死生を顧みず寡兵群敵と奮戰して辛庄子に玉碎す……六四二
歩兵上等兵　藤井喜代一（三重縣）　團河村に於て挺身敵輕機の側面に突入せんとして玉碎す……六四五
歩兵上等兵　藤井谷夫（岡山縣）　雜行軍百里を突破し南京城外の激戰に奮鬪遂に敵砲彈に殪る……六四六
歩兵上等兵　古谷三郎（茨城縣）　忠勇なる擲彈筒手北支戰線に活躍し遂に大冊河畔の華と散る……六四九
歩兵上等兵　藤原定夫（兵庫縣）　溫厚大勇の輕機關銃手津浦沿線に活躍し遂に趙連庄に玉碎す……六五一
歩兵上等兵　藤本清市（兵庫縣）　丁莊夜襲に連絡兵として又輕機射手として奮戰克く其の任を完ふし玉碎す……六五四
歩兵上等兵　深澤行雄（長野縣）　勇敢なる機關銃手戰機に投合して偉功を樹て西保障に玉碎す……六五六
歩兵上等兵　房村時義（鹿兒島縣）　上海戰線東北孫の難戰に奮鬪し戰勝の端を拓く……六五八
工兵上等兵　古川　郁（佐賀縣）　雨下する敵銃砲彈を冒して決死鐵橋修理中惜しくも京綏線の華と散る……六六〇
輜重兵一等兵　福地丈夫（兵庫縣）　皇軍輜重の華惜しくも遂に廣陽鎭に散る……八〇八
輜重兵一等兵　藤井安造（三重縣）　特務兵猛火を冒して挺身重傷を受けながら彈藥を第一線に交付して其の儘斃る（開右店）……八一〇
輜重兵一等兵　福田浩夫（兵庫縣）　皇軍輜重の華山西省七亘村に奮鬪し遂に玉碎す……八一二
輜重兵一等兵　福田孝三（愛知縣）　忠誠なる通信隊馭兵京漢線に活躍し遂に正太山岳戰に散華す……八一五

こ

砲兵大尉　古賀一雄（福岡縣）　優秀なる觀測班長難局に奮戰二十里舖の嵐に散る……一三
歩兵曹長　甲田文之助（大阪府）　機を觀る敏にして積極勇敢の分隊長遂に北滿の華と散る……九
歩兵曹長　小林正治（兵庫縣）　勇敢機敏の分隊長巧に行動して其の任を全うし遂に蘆溝橋の華と散る……八二
歩兵伍長　小畑周藏（兵庫縣）　沈勇機敏なる輕機關銃彈藥手姚官屯に奮鬪玉碎す……二七七
歩兵伍長　小林富夫（栃木縣）　勇敢なる輕機關銃手奮戰克く努めて拒馬河畔に散る……二八〇
砲兵伍長　合田綾夫（岡山縣）　觀測手として毎戰克く其の任を果し更に敵襲に際し砲を守護して桑園砲廠に散華す……二八二
歩兵上等兵　小林久一（兵庫縣）　忠誠なる輕機關銃手滄州血戰に奮鬪し戰勝の礎石となる……六六三
歩兵上等兵　古林勝義（長野縣）　忠勇なる喇叭手大冊河黃村の血戰に奮鬪し遂に護國の華と散る……六六五
歩兵上等兵　河野啓堂（愛媛縣）　西岡村の山岳戰に獨斷敵の側面に迫り戰勝の端を拓きて玉碎す……六六八
歩兵上等兵　群　英男（京都府）　責任觀念旺盛なる斥候第一報後再び敵前近く挺身して團河村に散る……六七〇

え

歩兵軍曹　海老原作治（栃木縣）　勇敢有爲の分隊長拒馬河畔に奮戰偉功を樹てゝ玉碎す……一三三
歩兵上等兵　枝廣主税（岡山縣）　機關銃手毎戰奮鬪偉功を樹て馬廠攻擊の華と散る……六七二

て

歩兵伍長　手錢勝郎（島根縣）　進んで難局に當り隣分隊の危急を救ひ西子牙鎭に玉碎す……二八四

あ

歩兵大尉　鮎田寛二（北海道）　忠勇なる連絡掛將校長城戰に活躍して玉碎す……七

歩兵軍曹　青木治雄（埼玉縣）　外長城縣夜襲に偉功を樹て惜しくも集團地雷に玉碎す……一三四
歩兵伍長　荒井利道（栃木縣）　手榴彈を以て敵側防機關銃を破壊し淀家村の華と散る……二八六
歩兵伍長　荒牧美喜雄（群馬縣）　トーチカに肉薄銃眼を破壊し瀕死の重傷を負うも尚其の潰滅を叫ぶ（澤畔店）……二八八
歩兵伍長　秋葉豊彦（栃木縣）　孝子克く奮戰遂に大冊河畔に玉碎す……二九〇
歩兵伍長　足立喜作（兵庫縣）　俊敏豪膽なる重機關銃分隊長滄州に奮闘して戰勝の途を開く……二九三
歩兵伍長　阿久津清二（栃木縣）　勇敢なる輕機射手負傷するも射擊を續け死して尚輕機を離さず……二九六
歩兵伍長　朝水周（大分縣）　決死敵前上陸して敵の側防機關銃に肉薄遂に馬廠血戰の華と散る……二九八
歩兵伍長　朝霧嘉平治（岡山縣）　負傷するも尚突擊前進し遂に迫擊砲彈の爲東邊庄の華と散る……三〇一
歩兵伍長　阿瀬清太郎（兵庫縣）　決死敵前に突擊路を開設し姚官屯血戰の華と散る……三〇三
砲兵伍長　安藤二六（愛知縣）　忠孝兩全の高射砲手北支防空に奮闘し惜しくも保定空爆に殞る……三〇六
歩兵上等兵　安部日出男（鳥取縣）　人格高潔なる勇士滄州會戰姚官屯に奮闘し戰勝の端を拓く……三七五
歩兵上等兵　青江飄一（岡山縣）　勇敢なる歩兵砲手江南各地に勇戰し遂に大場鎭の華と散る……三七八
歩兵上等兵　秋吉甚吾（福岡縣）　機關銃彈藥手嶮峻を攀ぢ集中火を冒し三度彈藥を搬送して舊關鎭に散る……三八〇
歩兵上等兵　秋山高男（愛媛縣）　機關銃裝塡手毎戰奮闘克く其の任を完ふし遂に舊關鎭の戰闘に玉碎す……三八三
歩兵上等兵　荒井正一（長野縣）　黄村攻擊に得意の手榴彈を以て敵機關銃を撲滅し突擊の端を拓く……三八五
歩兵上等兵　阿山源治郎（兵庫縣）　優秀なる擲彈筒手津浦戰線四當口に奮戰し戰勝の端を拓く……三八七
歩兵上等兵　蘆田半次（三重縣）　機關銃手群がる敵を殲ぎ仆し傷つくも屈せず奮戰開庄に玉碎す……三八九
砲兵上等兵　青山五郎一（愛知縣）　沈勇なる觀測手大場鎭の序幕戰に戰闘し遂に職に殉ず……三九二


## さ


砲兵曹長　坂本俊夫（愛知縣）　高射砲觀測班長勇敢克く卓越せる技能を發揮し遂に空爆に散る……八四
歩兵伍長　齋藤熊（群馬縣）　職責觀念旺盛の良射手重傷を負ふも射擊を續け拒馬河畔に散華す……三〇八
歩兵伍長　澤政治（鳥取縣）　率先彈雨を冒して敵陣地に突入し馬廠血戰の華と散る……三一〇
騎兵伍長　齋藤淳（岡山縣）　斥候に歩哨に將た又第一線に大膽勇敢に其の任を完ふし負傷ずるも屈せず奮戰して遂に揚庄の華と散る……三一二
砲兵伍長　齋藤道治（東京市）　蘇州河畔の激戰に沈着射彈觀測中敵砲彈の爲玉碎す……三一五
砲兵伍長　櫻井八十一（愛知縣）　優秀なる高射砲觀測手北支戰線に活躍し遂に保定對空戰に玉碎す……三一七
歩兵上等兵　齋藤唯雄（鳥取縣）　毎戰萬難を排して傳令の重任を果し正莊に於て遂に敵陣内に奮戰玉碎す……六九四
歩兵上等兵　佐藤逸男（岡山縣）　小隊の危急に際し決死出願重圍を脱して傳令に赴き途中獨流鎭の華と散る……六九六
歩兵上等兵　佐藤正四（新潟縣）　鎭邊攻擊に偉功を樹て遂に原平鎭の華と散る……六九八
歩兵上等兵　佐々木三郎（兵庫縣）　敵陣地直前偵察の重任を果し小隊戰勝の素因を作り金家寨に玉碎す……七〇〇
歩兵上等兵　雜賀龜義（大阪府）　大隊砲彈藥手猛火を冒して彈藥補充に活躍し遂に柏水井溝に散る……七〇三
歩兵上等兵　坂本千代治（栃木縣）　沙河縣城攻擊に勇戰奮闘遂に重傷を負ふて從容死に就く……七〇四
歩兵上等兵　崎迫仁藏（鹿兒島縣）　篤農陰德の勇士上海戰線東北孫に奮戰し竟に玉碎す……七〇六
歩兵上等兵　櫻井嘉市郎（鳥取縣）　勇敢なる機關銃手身を忘れて銃を保護し中趙扶の華と散る……七〇九
歩兵上等兵　鷺森類市（岡山縣）　不斷の貯金後顧の憂を斷ち毎戰奮闘して靜官屯に散る……七一一

歩兵上等兵　實藤敏夫（岡山縣）　難行軍百里を突破し南京城外の激戰に奮闘遂に敵砲彈に斃る……七一三
輕重歩上等兵　齋藤要作（新潟縣）　決死身を挺して患者搬送の難局に邁進し遂に江南戰線の華と散る……七一五

き

歩兵伍長　木口清司（群馬縣）　澤畔店攻撃に突撃格闘敵十數人を斃して玉碎す……三一九
歩兵伍長　木下榮藏（鳥取縣）　身に六彈を受け尙架橋を督勵しつゝ人合庄の華と散る（壯烈）……三二三
歩兵伍長　岸初男（岡山縣）　琉璃河畔の戰闘に偉勳を樹て遂に坨頭庄に散華す……三二四
歩兵上等兵　木村清（大阪府）　信念に生くる勇士難局に奮闘し竟に天險娘子關の激戰に玉碎す……七一七
歩兵上等兵　木村正次（北海道）　歩兵砲手重傷を負ふも尙砲側を離れず遂に通州城外の華と散る……七二〇
歩兵上等兵　清川作一（岡山縣）　擲彈筒手奮戰以て中隊戰勝の因を爲し馬廠河畔に散る……七二三
歩兵上等兵　吉瀨芳治（長野縣）　沈勇なる輕機關銃手毎戰任務を完ふし遂に大冊河畔に玉碎す……七二五
騎兵上等兵　岸睦久（青森縣）　匪賊討伐に山砲々手として奮戰し竟に三江省三縣宅に散華す……七二七

み

歩兵伍長　宮浦八郎（兵庫縣）　單身突撃路を開設して戰勝の途を拓き姚家屯の激戰に玉碎す……三二七
歩兵伍長　宮浦今朝吉（群馬縣）　勇敢なる小銃兵克く奮闘して東茨村の華と散る……三三〇
歩兵伍長　宮本辰雄（熊本縣）　本部傳令機宜の獨斷、中隊を適切なる射撃位置に誘導し遂に辛庄子に散る……三三一
歩兵伍長　三森宗壽（鳥取縣）　龍王廟緒戰に十數倍の敵に對し勇戰奮闘して北支の華と散る……三三三
歩兵上等兵　水上竹松（北海道）　忠勇なる機關銃手碑沱河畔に奮闘し遂に元氏郊外の華と散る……七二九
歩兵上等兵　宮澤幸七（長野縣）　沈着勇敢の小銃手彰德攻撃に奮戰して娘々廟に玉碎す……七三三

し

歩兵中佐　下坂正男（高知縣）　忠勇俊敏なる參謀川沙鎭の上陸作戰に活躍し職に殉ず……一
砲兵中尉　柴田信雄（兵庫縣）　勇敢機敏の小隊長馬廠滄縣攻撃に獨斷射撃を開始し偉勳を奏す……三七
歩兵軍曹　柴田一郎（兵庫縣）　勇敢なる分隊長膠着せんとする戰線を常に推進し全家寨の華と散る……一三六
歩兵伍長　鹽入木佐治郎（長野縣）　重傷を負ふも尙部下を激勵奮闘し黃村の激戰に玉碎す……三三六
歩兵伍長　島田惣吉（埼玉縣）　外長城線夜襲に偉功を樹て惜しくも集團地雷に玉碎す……三三九
歩兵伍長　清水龜造（群馬縣）　擲彈筒手毎戰沈着正確なる射撃を以て中隊戰勝の素因を作る……三四一
歩兵伍長　神宮峯治（群馬縣）　出陣に先ち竊かに自家裏山の老杉に墓標を刻む……三四四
歩兵上等兵　芝原國（鹿兒島縣）　居庸關山岳戰に勇戰敵陣に突入奮戰し遂に精勤章山に散る……七三四
歩兵上等兵　柴田隆（岡山縣）　輕機彈藥手猛火を冒して挺身彈藥補充を完遂し馬廠河畔に散る……七三六
歩兵上等兵　下山三次郎（鹿兒島縣）　壯烈勇敢東北孫の敵陣に突入し惜しくも敵の手榴彈に散る……七三八
歩兵上等兵　後崎喜作（栃木縣）　誠實なる小銃手大冊河の激戰に奮闘して玉碎す……七四〇
歩兵上等兵　尻無濱三次郎（鹿兒島縣）　上海戰線東北孫の激戰に傳令勤務を全うして竟に玉碎す……七四三
輕重兵一等兵　重村義文（大阪府）　皇軍輕重の華惜しくも遂に山西省七耳村に散る……八一七

ひ

歩兵伍長　姫谷春藏（兵庫縣）　一死殉忠の決意固く陣内戰に多數の敵を殪して强新庄の夜襲に散る……三四六

歩兵上等兵　平田長次郎（北海道）　忠勇なる蹄鐵工兵京漢線に活躍し竟に障河河畔に殉職す……七四五
歩兵上等兵　平林喜一（埼玉縣）　機關銃彈藥手外長城線に勇戰奮鬪遂に集團地雷に玉碎す……七四七
歩兵上等兵　東田勇（和歌山縣）　寡兵十倍の匪賊と奮戰遂に群がる敵中に突入して孫大李の華と散る…七四九
歩兵上等兵　兵藤芳松（德島縣）　廟行鎭北方地區に勇戰し率先敵陣地に突入して玉碎す……七五一
輜重兵一等兵　氷川博士（兵庫縣）　忠孝兩全の勇士山西省廣陽鎭に奮鬪し皇軍輕重の華と散る……八二〇

も

歩兵伍長　森本光次（兵庫縣）　張新庄激戰に獨斷屋上に輕機を据ゑて奮戰斃るゝも引鐵を離さず……三四八
歩兵伍長　守屋義久（岡山縣）　勇敢なる輕機彈藥手克く奮戰遂に東邊庄の華と散る……三五一
歩兵上等兵　森本敢（鳥取縣）　忠勇なる歩兵砲馭兵流河鎭附近の戰鬪に奮戰し職に殉ず……三五三
歩兵上等兵　諸越一雄（鳥取縣）　敬神の念厚く忠君愛國の精神に燃へ死生を超越して奮戰遂に安仁衞に散る……三五五
輜重兵一等兵　森山卯三郎（大阪府）　皇軍輕重の華惜しくも遂に七亘村に玉碎す……八二三

せ

歩兵准尉　關根定二（埼玉縣）　醇縣攻擊に突擊の好機を看破し友軍の突擊を誘起す……六八

す

歩兵大尉　杉山省司（群馬縣）　剛膽なる機關銃隊長我が難局を打開す……一〇
歩兵伍長　鈴木正義（栃木縣）　北相北義安に奮戰遂に拒馬河畔の夜襲に玉碎す……三五三
歩兵伍長　鈴木亮一（宮崎縣）　中隊傳令迅速に彈藥小隊を誘導して中隊の危急を救ひ後遂に七亘村に散る……三五五
歩兵伍長　鈴木正平（埼玉縣）　輕機彈藥手張家口攻擊に勇戰奮鬪遂に內蒙の華と散る……三五八
歩兵伍長　須田子年壽（群馬縣）　斥候兵勇敢に偵察を遂げ重傷を負ふも歸還報告を了して斃る……二六〇
歩兵伍長　杉山一郎（群馬縣）　可西務攻擊に奮戰大いに努めたるも進擊中惜しくも空爆に散る……三六三
歩兵伍長　角川隆（福井縣）　上海事變の勇士再び北支に勇戰遂に團河村の華と散る……三六四
砲兵伍長　鈴木延平（靜岡縣）　忠誠なる高射砲手北支防空に活躍し惜しくも空爆に玉碎す……三六七
歩兵上等兵　須藤米吉（茨城縣）　農村模範青年京漢戰線に奮鬪し遂に保定城外の華と散る……七五八
歩兵上等兵　鈴木宰吉（埼玉縣）　溫良沈勇の名擲彈筒手醇縣城に奮鬪し笑を含みつゝ玉碎す……七六〇
歩兵上等兵　鈴木清（和歌山縣）　機關銃手北滿地局地に於て寡兵衆敵と奮戰壯烈なる戰死を遂ぐ……七六三
砲兵上等兵　鈴木勇（群馬縣）　寡兵死を以て磁縣に奮鬪し守備の重任を完ふす……七六六
工兵上等兵　杉崎照秀（神奏川縣）　瀕死の重傷を負ひながら尙摸合綱を引き全員を上陸せしめ其の儘洛陽湖畔に絕命す……七六八
輜重兵上等兵　鈴木善一郎（靜岡縣）　江南戰線に補給の重任を完ふし遂に南京近郊の敵襲に玉碎す……七七一
輜重兵一等兵　杉浦輝一（愛知縣）　夜間敵砲彈下に病院警戒中惜しくも空爆に散る（上海北店宅）……八二六
輜重兵一等兵　資延正勝（兵庫縣）　皇軍輜重の華惜しくも遂に山西廣陽鎭に散る……八二八
輜重兵一等兵　鷲見武夫（岐阜縣）　病弱を押し擔架兵の任務を完ふし遂に江南戰場に玉碎す……八三〇

支那事變

# 忠勇列傳　第四卷

陸軍之部

忠勇顯彰會編纂

## 將校准士官之部

### 陸軍歩兵中佐從五位勳四等功四級　下坂正男

**忠勇俊敏なる參謀川沙鎭の上陸作戰に活躍し職に殉す**

氏は高知市水通町の人にして亡父を元一亡母を與志と云ひ明治三十三年一月五日に生れ妻光との間に永子幸雄の二愛子を擧げた。性朴直寡言近摯にして物慾に恬淡であつた。而かも職務を執るや綿密周到往々夜を徹して責務に邁進し又公私の別極めて嚴正にして寸毫も紊ることはなかつた。曾て愛子が病氣革まり生死の境を徨ふて居たに拘はらず公務を重んじ出動し水が愛子は痙攣を起して愈々重態となりし爲家人は急使を出して歸宅を求めたが氏は當時幹部候補生の教育中であつた爲其教育を完全に終つて漸く歸宅した。されど氏は極めて子煩惱で出張先からは必ず愛子へ土産物を送り日曜休日には愛子等の懇請のまゝに登山散歩鞠投げ等の相手となり慈育愛撫至らざるなかつた。氏は又將校家族として日頃其の心得に付家族の教育に深く意を用ゐて居たが曾て陸軍大學校在學中第一次上海戰勃發せる時學校よりの歸宅早々「おい之れか

ら直ぐ戰爭に行くよ」と告ぐれば夫人は「それぢや私達はどうしますか」と尋ねた。氏は「それだから駄目だよ元氣で行つていらつしやいと云へなくてどうする」と嗜めた。氏は高知縣立海南中學校第三學年修了後大正三年九月廣島陸軍地方幼年學校へ入校し同十年七月陸軍士官學校を卒業し同年十月歩兵少尉に任官し歩兵第四十三聯隊附となつた。爾來精勵恪勤優秀なる成績を擧げ又夙に青雲の志を抱き軍務の餘暇を以て深更に至る迄連續軍事學の研鑽に努め遂に陸軍大學校へ入校の榮冠を獲得し昭和八年十一月同校を卒業し其後は中隊長及陸軍運輸部練習員等の要職を經て歩兵少佐に累進し昭和十年師團參謀に補せられた。氏の職務を執るや着眼適切計畫亦周密にして其實行に移るや孜々として倦む事を知らず遂げずんば已まざるの旺盛なる氣慨を以て力行し到る處に其敏腕を發揮して居た。而かも功を誇らず長上を敬ひ部下を慈しみ友情に敦く典型的の武人であつた。

支那事變起るや間もなく山室部隊の參謀として勇躍中支方面への征途に就いた。斯くて八月十日以來敵前上陸に關し陸海軍協定並に後方主任參謀の職を命ぜらるゝや得意の蘊蓄を傾倒して諸計畫を策定し八月二十日以來愈々揚子江畔川沙鎭附近に敵前上陸を決行するに至つたが氏は更に第一線部隊の上陸指導並に情報蒐集の重任を課せられ二十三日午前五時四十分第一回上陸部隊と共に頑强なる敵の抵抗を受けつゝ上陸を敢行した。氏は敵彈雨飛の下に逸早くも要點に進出して第一線部隊の戰鬪を指導中敵機關銃彈の爲左上膊部に貫通銃創を受けたが豪氣な氏は毫も之に屈する事なく逐次上陸する部隊を區處して所命線に進出せしめ鼓に上陸作戰成功の第一歩を確保せしめた。

爾後約二時間に亘り第一線部隊間に在りて情報蒐集に任し且彼我一般の態勢を現地に就き確認する等明敏適切なる對策を練りつゝ兵團長の來著を待ち現地に就き之を詳細報告したる後更に第一線に派遣せられありし一田參謀と電話を以て連絡中午前九時半頃突如敵飛行機は江岸を距る約四百米なる文宅附近氏等の上空に來襲して爆彈を投下した。其爆彈は不幸にして氏の身邊に落下炸裂し其破片を心臟部に受けて其場に昏倒した。其後直に衞生隊に收容され息吹き返へすや兵團長の安否と兵團爾後の戰況に心を配りありしが遂に眠るが如く悲壯の戰死を遂げた。

氏の玲瓏高邁なる精神は克く妻子を薫陶して將校家族の品位を玉成せしめ氏の熱血眞摯なる執務は多數の部下將兵に無限の感化を與へ且實戰本位の軍隊を練成し得た。而して今次聖戰に參加するや多年の蘊蓄と俊敏周到なる畫策とに相俟ち至難なる上陸作戰の成功に至大なる礎石を投じた。而かも彈雨の下一意職責に邁進し遂に重傷を負ひ氣息奄々たる中に尙も上官の身上を案じ爾後の戰況を願念し一言私事に及ぼす從容護國の華と散りし其心境に至りては眞に忠烈鬼神を哭かしむるものがある。あゝ前途有爲の材幹を此一戰に喪ふ痛恨哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや天晴れ中支作戰史上に皎きて後世永く其芳名を謳はるべく英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族殊に愛子等の前途を照覽し尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵中佐に進級し特に從六位より二段昇叙の從五位に叙せられ次で勳四章旭日小綬章並に功四級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵少佐從六位勳五等功五級　星野義郎

## 俊秀勇敢なる機關銃中隊長拒馬河畔に奮戰し職に殉ず

氏は宮城縣仙臺市北五番丁の人にして元宇都宮歩兵聯隊長歩兵大佐胞治氏の一人息子として明治三十九年九月三十日に生れ母をよしと謂ひ妻愛子との間に弘基篤子の二愛子を擧げた。性溫厚沈勇にして孝心深く友情に富み幼者を慈しむ等精神的篤行多く又責任觀念强烈にして事を行ふや忠實熱誠遂げずんば已まざるの氣魄を有し親戚一同の愛敬は勿論一般世人よりも厚き信望を受けて居た。大正八年三月福岡師範學校附屬小學校を卒業後直に福岡縣立中學修猷館に入學したが同十年四月には熊本陸軍幼年學校生徒たるの光榮に浴し爾來陸軍士官學校豫科を經て昭和三年七月同校本科を卒業し同年十月歩兵少尉に任官の上歩兵第五十九聯隊附となつた。滿洲事變起るや昭和七年二月同聯隊第三大隊副官として先づ上海の戰鬪に參加し同年五月更に滿洲に轉進し小隊長及通信班長の職務を歷任して聯隊乙副官を命課され昭和九年五月に凱旋したが其間掖河拜泉克山泰安等黑龍江省地方の各地に轉戰して匪賊を討伐し又同地方の治安警備に任ずる等東奔西走殆んど寧日なく活躍し常に積極機敏に上司を輔佐し赫々たる武勳を奏し功を以て勳六等單光旭日章を賜はつた。

支那事變起るや間もなく坂西部隊に屬し第一機關銃中隊長として勇躍征途に就いた。北支到着後所屬部隊は九月九日北京を出發して楡垈鎭に進出し同地に於て永定河畔渡河戰鬪の爲諸偵察を完了し攻擊前進の機會を待つて居た。當時永定河右岸地域に蜿蜒たる堅壘に據りて蟠居せる敵の大軍は九月十日先づ右翼正面たる馬廠方面の戰鬪に慘敗し中央正面たりし固安附近の頑敵も其影響を受けて逐次京漢線方面に敗退し右翼正面の敵は永定河の障碍と房山西北方の高地帶とに依り歩々の抵抗を試み機を見て後退せんとする一般態勢であつた。其西北正面に向へる所屬部隊は九月十三日愈々時機到來所屬



大隊は所屬部隊の右第一線となり永定河の敵前渡河を開始した。對岸の敵は果然大隊の正面及右側方より一齊に火蓋を切り氣たたましき猛火力を浴びせ來た。氏の中隊は大隊主力の渡河掩護の任務を以て同河北岸に射擊陣地を占領して居たが氏は彼我の情況に卽し的確機敏なる射擊指揮に依り對岸の敵を壓倒震憾して渡河掩護の重任を果たし爾後機を失せず對岸に陣地を推進すべく渡河を開始した。然るに永定河の兩岸は河底泥深く彈藥及馬匹の渡河は極めて困難であつたが氏は部

署を適切にし萬難を排して主力部隊に追及し第一線中隊に密接なる協力を與へ卓越せる戰鬪威力を發揮して遂に敵を潰亂敗走せしむるに至つた。

其後所屬大隊は部隊の前衞を命ぜられ拒馬河畔に向ひ猛追擊に移つた。敵は退路上の森林地帶內の旣設陣地を利用し歩々の抵抗に依り我が追擊を阻止したが氏は獨斷右翼に進出し第一中隊と共に敵を包圍したる爲敵は抵抗を斷念し旣設陣地を放棄して南方に敗走した。十四日午後八時頃我が歩兵中隊が南公由附近に於て夜暗至近の距離より俄然敵の猛射を受くるや氏は部下中隊を提げ獨斷之に赴援し敵の火光を照準射擊せしめて之を制壓し其間所屬大隊をして敵の左翼を包圍せしめた。然るに敵は圍壁を利用して頑强に抵抗せるを以て大隊長は自ら一箇中隊を指揮して敵の退路に迫つたが途中進路を失ひ遂に大隊主力との連絡は杜絕するに至つた。玆に於て氏は敵の彈雨を冒して所屬部隊長の許に至り戰線を整理して明拂曉を期し攻擊を再興すべき意見を具申して採用せられ氏は一時大隊主力及第一線に進出しある第七中隊の一部をも合せ區處して大隊主力の左翼及所屬部隊の

正面を掩護し以て爾後の戰鬪を有利に進展せしむるを得た。

所屬部隊は南公由の敵を擊破したる後續いて敵を追擊し拒馬河北岸地區に進出した。敵は拒馬河の障碍を利用し其南岸地區には極めて堅固なる既設陣地を有し其守兵は所屬部隊正面のみにても約一萬を算し皇軍を陣前に擊滅せんといき卷いて居た。所屬部隊は十五日午後二時を期し第一次渡河部隊を部隊本部及第二大隊とし氏の所屬第一大隊は第二次の渡河部隊と定められた。渡河法は先づ煙幕を展張し漕渡に依る强行渡河法であつたが此日風强くして煙幕の展張意の如くならず對岸の敵は我が企圖を察知して一齊に火蓋を切り我が渡河點目かけて嵐の如き斜射縱射の十字火を浴びせて來た。之が爲我が工兵隊の如きは殆んと全滅し第一次の渡河行動極めて困難となり第二次渡河部隊も河岸附近に於て死傷續出し渡河の遂行は至難となつた。此狀況を見て取りし氏は後方に控置せる部下機關銃中隊より二箇小隊を抽出し自ら之を指揮して河岸に近き高粱畑の南端に進出し沈着冷靜に敵情を精察し當時最も活躍中の敵機關銃を求め有效適切なる穿貫的威力を發揚して忽ち之を制壓した。續いて目覩し得べき敵の自動火器を逐次に制壓して我が渡河部隊に至大なる支援を與へた。次で第二大隊正面より渡河を決行し對岸揚家屯方向に進出するや當時苦戰中の第四中隊に獨斷協力中の部下一小隊を指揮し敵の迫擊砲及機關銃等よりする猛火を浴びつゝ敢然北相南側の要點に進出して我に數倍せる敵の逆襲部隊を猛射し之に殲滅的打擊を與へて擊退し第四中隊の危急を救ふと共に所屬大隊主力の北相への進出を容易ならしめた。然るに此逆襲阻止の激戰に於て氏は敵の猛火の中に毅然として我が射彈の效果を觀察中無念敵の小銃彈は下腹部を貫通して倒れた。重傷の氏は氣息奄々たる裡に奈良部少尉に指揮を委ねんとするものゝ如く幽かにも奈良部奈良部と少尉の名を呼び求めつゝ午後五時頃悲壯の戰死を遂げた。

氏や玲瓏高邁にして部下を慈育愛撫し俊敏にして企圖心旺盛常に優秀なる成績を擧げ中隊の團結鐵石の如く克く實戰的中隊を練成するを得た。果然聖戰に參加するや部下と共に幾多の辛酸勞苦を克服し難局に遭遇するも志氣益々旺盛常に戰機を看破して卓越せる重機關銃の威力を發揚し克く大隊戰鬪の骨幹を成し以て戰勝の途を開拓した。寔に是れ皇軍青年將校の逸材にして又一般軍人の龜鑑たるものであつた。今や氏が風發叱咤の壯容に接すべくもなく痛嘆哀悼の情を禁じ得ずと雖も氏の赫々たる武功は皇軍戰史に輝き芳名永く後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵少佐に進級し從六位に叙し勳五等双光旭日章竝に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵大尉正七位勳五等功五級　鮎田寛二

### 忠勇なる連絡掛將校長城戰に活躍して玉碎す

氏は北海道石狩郡當別村の人にして父を熊耳母をシマヨと云ひ明治四十一年九月二十五日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚沈毅にして孝心厚く知己朋友に對する友情亦濃やかであつた。氏は又責任觀念旺盛にして事に當るや熱誠忠實遂げずんば已まざるの氣慨を有し諸人の愛敬と厚き信賴を受けて居た。大正十四年四月廳立空地農業學校へ入學し昭和三年三月同校を卒業の上新十津川小學校代用教員並に同所青年實業學校教諭心得を命ぜられたが同年十二月幹部候補生として步兵第二十五聯隊へ入營し克く軍務並に學術科の研鑽に精勵し翌四年十一月滿期除隊となり同七年三月步兵少尉に任官し更に翌八年九月には特別志願將校として採用せられ翌九年二月より約一ヶ年の間滿洲派遣部隊附となり熱河省及北滿に匪賊討伐並に各地の警備に任じ功を以て一時賜金を賜はつた。昭和十一年三月步兵第三聯隊へ轉任し再び滿洲に派遣せられ哈爾

實に駐屯し常に積極的に警備の重任を全うし同年九月には歩兵中尉に進級し勳六等に叙せられた。

支那事變起るや間もなく湯淺部隊に屬し第一大隊本部附將校として所屬部隊と共に急遽天津地方に南下し同地方に於ける支那軍の掃蕩並に治安維持の重任を全うした。氏は其際第一大隊連絡掛將校として關係諸機關に對し周到綿密なる連絡を遂げ以て部隊主力の行動を容易ならしめ又彈藥糧秣の補給主任者として輸送機關の杜絶せる當時の狀況下に於て獻身的の奮勵努力に依り所屬部隊の給養に支障なからしめた。其後八月十二日所屬大隊が承德を經て張北方面へ轉進を命ぜらるゝや氏は宿營及人馬材料の搭載卸下掛を命ぜられ殆ど寢食を忘れて業務に精勵し周到綿密なる計畫と相俟ち敏速圓滑に業務を進捗せしめ克く緊急なる軍の要求を充足するを得しめた。

斯くて所屬部隊は八月十九日張北に集結するに至つたが所屬兵團は狀況上全部の兵力の集結を待たず又十分に敵情地形の偵察を實施する暇なく諸般の情勢上八月二十日より長城線の敵陣地を攻撃するに決した。敵は峨々たる長城線に永久的の堅固なる陣地を占領し優勢なる兵力を擁し抗日意識に燃えつゝ傲岸不遜の態度を以て挑戰を試みて居た。翌二十一日所屬大隊は聯隊の左第一線大隊となり午前八時より當面の敵陣地に向ひ攻撃を開始するや敵はトーチカ陣地並に側防掩蓋陣地より熾烈なる火力を以て我が攻撃前進を妨害した。氏は彈雨を冒しつゝ勇敢機敏に第一線中隊との連絡に任じ以て大隊の戰鬪を容易且適切ならしめ午後七時頃長城の主陣地を奪取し更に其南方要點を攻撃し午後九時頃之を占領し赫々たる戰勝を獲得するに至つた。

所屬部隊は敗敵を追撃して萬全平地に進出せんとするや氏は夜暗殊に殘敵所在に潛伏して亂射亂撃の中を豪膽機敏に大隊本部と第一線中隊間の連絡を確保し以て大隊長の指揮掌握を容易ならしめ二十二日午後零時頃水魁附近に到達した。

水魁より萬全に至る間の地形は巍峨たる岩山の連峰連立し其間に一峽谷介在し小川に沿ひ一條の道路が萬全に通じて居る。所屬兵團は速かに平綏線を分斷し且河北山西兩省の連絡を中斷するの任務を以て急行中であつたので所屬部隊は速かに此峽谷を通過するの必要があつた。然るに敵は此峽谷を中心として堅固なる陣地を設け各種兵器を配置して頑强に抵抗し其防備は長城線に勝るとも劣らざるものであつた。氏は此際水魁南方隘路に向へる奇襲部隊たる所屬大隊の本部に位置し午後七時半頃より行動を起し午後八時より攻撃を開始した。敵は豫期の如く熾烈なる十字火を以て必死の抵抗を試みた。友軍の死傷續出刻一刻戰鬪慘烈を極めたが氏は沈着豪膽に敵情地形を觀察して大隊長の戰鬪指導を輔佐すると共に戰機に投合して自ら他部隊との連絡に任じつゝあつた。偶々第一線中隊に連絡の任務を完了して所屬大隊本部へ復歸せんとする一刹那無念！　敵彈の爲左肩胛部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。併かし所屬大隊は氏等の決死的活躍に依り流石に要塞堅固なる隘路をも突破して敵の退路を遮斷し偉功を奏するに至つた。

氏は忠誠沈勇の人奮つて特別志願將校となり一意忠勤を擢んで長上を敬ひ部下を愛撫し一般將兵より厚き信頼を受けて居た。今次聖戰に參加するや兩親に過去の慈育を感謝し一死忠誠を誓ひて出動したが選ばれて大隊本部附將校を命ぜらるゝや積極的に自己の任務に邁進し殊に天險長城線の戰鬪に於ては敵情地形の諸偵察甚だ不十分なる情況下に戰鬪を開始せられたるに拘らず氏は豪膽機敏實地に就き的確なる視察を遂げ俊敏劃切なる判斷に基き能く所屬大隊長の戰鬪指導を輔佐し又關係部隊に對する重要なる連絡を必要とするや假令嶮山幽谷たりとも或は敵彈雨飛の中に身を曝すとも身命を惜まず神速なる連絡を確保して常に大隊戰鬪を有利に進展せしめ以て赫々たる戰勝を獲得せしむるに至つた。所屬大隊將兵一同

は氏の犧牲的精神と其活躍に就き深き感謝感激を捧げて居た。寔に是れ皇軍青年將校の模範たるものであつたが水魁附近一夕の嵐に此有爲の士を喪へるは轉た痛惜に堪えない。さり乍ら氏の赫々たる武勳は長城戰史に輝き其芳名は永く後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵大尉に進級し正七位に叙し次で勳五等双光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵大尉正七位勳五等功五級　杉山省司

### 剛膽なる機關銃隊長我が難局を打開す

氏は群馬縣群馬郡東村の人にして、父を本治郎母をセツと稱し明治四十二年七月二十三日生れで妻秋子との間に忠男及美江子の二愛兒がある。性溫厚沈毅にして孝悌の道に厚く鄕里の東尋常高等小學校卒業後は續いて群馬縣立前橋中學校に入校し昭和四年三月同校を卒業して直に其年十二月幹部候補生として水戸歩兵聯隊に入營し翌五年十二月除隊した。在隊間氏は最も謹直且熱心軍務に精勵し成績優良にして昭和八年四月豫備役歩兵少尉に任ぜられ正八位に叙せられた。除隊後は家にありて農業に從事し餘暇を以て鄕閭の青年を指導する事に努めたが氏は之れを以て自己の重要なる天職と心得營々として努力を續け殊に青年の風紀改善を必要とし夜間彼等を自宅の靈室に集め自ら修養に關する訓話を行ひ又體育を重んじ夏期屢々青年を率ゐて利根川に水練を行ふ等熱心鄕黨青年の指導に努め青年は勿論村内一般より感謝の的となつて居た。

昭和八年九月陸軍士官特別採用の志願をなし許されて高崎歩兵第十五聯隊附となり專ら兵卒の教育訓練に任じ精勵大に勤め又滿洲事變に努力の廉を以て金壹封を下賜せられ昭和十一年九月には歩兵中尉に進み次で從七位に叙せられた。

昭和十二年支那事變起るや氏は森田部隊の機關銃中隊長として八月勇躍北支に出動した。時恰も炎熱灼くが如く又同地は連日未曾有の豪雨に至る所泥濘馬脚を沒し皇軍行動の困苦は言語に絕するものがあつたが氏は克く人馬を愛護し志氣を鼓舞しつゝ万難を排して前進を續け九月十二日永定河畔に達するや所屬森田部隊は同河右岸地區を占據せる敵を攻擊する爲め股家舖に於て諸準備を完了し十三日より攻擊を開始した。此の時氏の隊は森田部隊の左翼隊に屬し主として揚村方面の敵に向ひ攻擊した。敵は永定河の流れを陣地前の障碍とし堅固に陣地を占領し我が攻擊前進と共に猛烈なる銃砲火を浴びせ來り爲に我が死傷續出し前進甚だ困難であつた。氏は巧に機關銃隊を指揮し要點に射彈を集中して我が歩兵の前進を容易にし次いで揚村東方に於て濁流を涉り機敏に機關銃陣地を占領して側方より敵に猛射を浴びせ我が突擊を援助し遂に左翼隊は午後三時三十分頃敵陣地を攻略した。所屬隊は息つく暇もなく續いて敵を追擊し同日夕門村に達し同地に於て夜し急襲的猛射を浴びせ多大の損害を與へた。然かし敵は尙執拗に攻擊し來り將に我陣地前に迫らんとした。氏は此の時とばかり銃隊を指揮して一齊に猛射を浴びせ遂に敵は多數の死體を遺棄して潰走するに至つた。此の時に於ける氏の機關銃隊の功績は洵に拔群と云ふべきであつた。

續いて九月十五日氏の所屬部隊は拒馬河々畔を占領せる敵を攻撃する爲早朝東茨村西南端に進出して敵情地形を偵察したる上攻撃前進に移り午前九時四十分同村西南端道路の兩側に亘り敵前四百米の地點に進み此の時氏の銃隊は第一線兩中隊の中間地區に陣地を占領し主として左中隊正面の敵に猛射を加へた。然るに敵の陣地は頗る堅固にして掩蓋銃座を有し我れに向つて巧に斜射側射を加へ爲めに我が死傷瀕出し前進甚しく困難に陷つた。氏は此時身の彈雨の下にあるを忘れ猛然として決起し戰線を縱横に走せて自ら親しく小隊長分隊長に目標を示し自ら射彈を觀測しては修正せしめ又射手を激勵し其の結果は着々効を收め間もなく正面の敵の重火器を沈默せしむる事を得た。然かし敵の後方及我が右側方面よりの敵の機關銃火は尙猛烈にして我が歩兵の前進は依然として困難であつた。而かも之等敵機關銃の位置は不明にして我射彈を送るに由もなかつた。氏は此時決然として立ち速に此難局を打開せんとし敵の猛火を物ともせず自ら傍の土壁上に登り眼鏡を以て敵機關銃の位置發見に努めたが惜しくも此時飛來した敵の一彈は氏の前頭部を貫通し遂に壯絶なる戰死を遂げた。

歩兵戰鬪に於て機關銃が重要なる役をなす事は萬人の知る所であるが其機關銃をして適時適切なる射撃を行ふ如く指導するは一に其隊長の伎倆に存するのである。氏の如き勇敢にして剛毅而も戰術上の機眼を有し献身報國の至誠に燃る指揮官に依て初めて近代兵器の威力は最高度に發揮し得るのである。氏や眞に模範的機關銃隊長であり殊に難局に處しての行動は鬼神をも恐れしむるものがある。今や聖戰の初期此の如き有爲の隊長を喪へる事は洵に痛惜の極みである。然かし氏の赫々たる武勳は皇軍戰史に牢記せられ其の名は大和櫻と謳はれ英魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も帝國の前途を護り遺族殊に二愛子の上に尊き光と加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵大尉に進級し次で正七位勳五等に叙し双光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍砲兵大尉正七位勳六等功五級　古賀一雄

### 優秀なる觀測班長難局に奮戰二十里舖の嵐に散る

氏は福岡縣三潴郡昭代村の人にして父を卯三郎亡母をトモと云ひ明治四十一年十二月十一日に生れ未だ獨身であつた。資性寡默豪膽にして氣概に富み責任觀念強く又長上を敬ひ孝心特に深く友情濃かにして後輩を慈しむ等豐かなる情操を具へ諸事熱心着實思慮亦周密にして諸人の信望と愛敬を受けて居た。大正十年三月尋常小學校を又昭和二年三月福岡縣中學傳習館を卒業し翌三年四月陸軍士官學校豫科へ入學し同七年七月同校本科卒業久留米獨立山砲兵聯隊附となり同年十月砲兵少尉に任官昭和九年陸軍砲工學校普通科を卒業同年十月中尉に進級した。翌十年五月堅山部隊に屬し支那駐屯軍に派遣せられ爾來天津駐屯砲兵隊附として服務して居た。

支那事變起るや小林部隊に屬し直ちに出動して通州に待期中なりしが七月二十八日北寧線を警備の爲行動を起すや午前九時頃落垡附近に於て數箇所に亘り鐵道破壞中の敵兵約五十名を發見し直ちに火砲及機關銃を卸下して之に猛射を加へ忽ち之を潰走せしめ又自ら裝甲軌道車に依り線路偵察を行ひ鐵道修理班の作業を掩護する等神速機敏に活躍し以て運輸交通の確保に多大なる貢献を與へた。

翌二十九日蘆溝橋の攻撃を開始するや氏は山砲兵獨立中隊長として之に參加し城外に在りて活躍中の敵重火器並に長辛店高地より猛射し來る敵砲兵を求めて適時之を制壓し以て我が歩兵の突撃を容易ならしめ且蘆溝橋城の占領を確實ならしめた。爾後當面の歩兵部隊の行動に密接なる協力を與へて殘敵を驅逐し長辛店附近一帶の要點を我が手に收め以て軍の集中を容易ならしめた。

馬廠附近の前哨戰を開始せらるゝや氏は大隊觀測班長を命ぜられ九月九日小王莊北方地區に於ける大隊展開の爲の廣範圍に亘る陣地偵察に從事した。折しも附近一帶は殆んど濕地或は濁水地帶と化し行動頗る困難なりし上敵陣地に近かりし爲切りに敵の彈雨を浴びたが豪膽なる氏は之を意とせず熱心偵察に從事し翌十日に於ける所屬大隊の陣地占領及爾後の戰鬪に多大の貢献をなしたるのみならず大隊長の負傷後も常に敵情並に友軍第一線の狀態に卽應して大隊火力の運用を適切ならしめ以て戰勝獲得に貴重なる素因を與へた。

次で滄州附近の會戰に於ては九月十八日周庄子西側附近の陣地偵察に任じ敵前至近の距離に往來して大隊の爲放列陣地並に大隊觀測所を偵察し又協力すべき步兵大隊との協定を周密にし以て爾後の戰鬪を容易ならしめ尙戰鬪間は機敏に戰況の推移を判斷し的確なる敵情を捕捉して有效適切に大隊長代理を輔佐し二十一日興濟鎭への轉進に方りては率先濁流中を前進路の偵察に任じ又地方舟數隻を蒐集して大隊の張囘庄への集結を容易ならしむる等敏活適切なる行動に依り其任務を全うした。

滄州附近の戰鬪に勝利を得た所屬大隊は鐵道に依り直ちに桑園に向ひ輸送せられた。然るに十月二日未明敵兵約三四百名桑園驛附近一帶にかけて來襲した。氏は率先驛に至り敵情及同地附近の戰況を視察して速かに所屬大隊長に報告し以て其戰鬪指揮を適切ならしめ續いて砲兵使用の目的を以て德州東北側の地形を偵察し貴重なる報告を提出せるのみならず翌三日德州城を攻擊するに方り所屬大隊の盧院南側の展開並に城壁に據る敵に對する火力運用を容易ならしめ以て德州城攻略の爲大に貢献し續いて敗退せる敵を急追して同地南方約三里に在る二十里舖部落に達し赤柴步兵部隊と共に同地に露營した。翌四日は同地に在りて至嚴なる警戒に就いたが同夜午前三時半頃約二大隊を下らざる敵は二十里舖南側より包圍攻擊し來るの情報に接し氏は步兵部隊本部との協定を行ひたる後部落南端に位置して逐次現出近迫し來る敵情を觀察し偶々同地附近に進出せる第二中隊の一小隊並に步兵小隊を併せ指揮し機宜に適する戰鬪を指導した。斯くて午前六時頃敵步兵主力及乘馬部隊が逐次村落南方より東方に迂囘中なるを認むるや自ら村落の東南角に到りて敵情を搜索すると共に同地附近に陣地を占領しありし所屬大隊の重機關銃の射擊を指導し陣前約二三十米に肉薄せる敵を殆ど殲滅したる際敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け玆に壯烈なる戰死を遂げた。然れども氏の勇敢機敏なる行動に依り其後迂囘中の敵主力部隊に甚大なる損害を與へ又友軍步兵部隊の爲に攻勢移轉の好機を作爲し且其攻勢樞軸となりて戰捷の重要素因を成形した。

氏や參戰以來突破戰線一百里戰鬪を交はる事十數囘或は中隊長として的確機敏なる戰鬪指揮に依り卓越せる砲兵威力を發揮し又大隊觀測班長の榮職を奉ずるや俊敏克く敵情地形を明察し豪膽克く敵前至近の位置に出沒して步兵協同の基礎を確立し不眠不休の努力を以て戰鬪計畫を立案し以て大隊長の戰鬪指揮を適切に輔佐し齎々たる武勳を奏した。而かも部下に對するや溫情溢るゝが如く戰機に投合して人員器材の全能力を發揚せしむる等上下の信賴期せずして一身に蒐まつた。

實に是れ皇軍指揮官の模範となすべき人材なりしに二十里舖一夜の嵐に前途有爲の士を喪へるは轉た哀悼痛惜の情を禁じ得ぬ。然れども氏の功績たるや不朽にして皇軍戰史に輝き其名は後世に傳へて芳ばしく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇運を扶翼し奉り又一家の守護神として其將來に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日砲兵大尉に進級し正七位に昇叙せられ次いで勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　井關光雄

## 人格崇高温情深き小隊長。死を決して堅壘を突破す

氏は鳥取縣鳥取市今町の人にして父を瀧藏母をとしと云ひ明治四十五年一月十五日に生れた。妻澄子との間に忠夫泰博の二愛子がある。資性温和寡默にして孝心極めて深く又弟妹に對しても温情に富み誠實人に交はり諸人の愛敬を受けて居た。然れども事に處するや剛毅果斷貫かずんば息まざるの氣概を有つて居た。昭和五年三月鳥取縣立商業學校を卒業後家庭に在りて米穀商に從事して居たが在學間劍道に精進し劍道部の首席を占め中等學校武道大會に於て優勝を占むる事數回任官後も將校團劍道大會に出場して優勝の榮冠を得其間武道を通じて益々人格の玉成を見るに至つた。昭和七年十二月幹部候補生として鳥取歩兵聯隊に入隊し同十一年三月歩兵少尉に任官し次で正八位に叙せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召長野部隊に屬し篠原中隊の第二小隊長として勇躍北支戰線へ出征した。斯くて九月上旬よりの馬廠攻撃に於ては氏の所屬中隊は旅團豫備隊となり控置され僻肉の歎を啣ちつゝ警戒勤務に服し十日丁莊に十一日日沒後青縣へ入城した。

九月十三日以降は所屬部隊に復歸し津浦沿線の最堅陣たりし滄縣附近の總攻撃に第一線部隊たる光榮に浴し欣然として日夜攻撃の諸準備を整へた。氏は部下に對する温情極めて濃かにして連日の猛追撃間も迫撃砲彈頭上に炸裂し不氣味な小銃機關銃彈身邊を掠むる中に剛膽不敵の行動を以て部下を激勵し又泥土の高粱畑に露營しては兵が氏の身にかけたる高粱を全部兵の爲に敷き與へて寒夜を凌がせ折々は自己の食事を缺きても空腹の兵に頒け與へし事も幾度なるかを知らず我が身を忘れ兵の戰力維持に意を用ゐたが部下一同は唯々涙を以て氏に感謝して居た。

九月二十一日連日に亘りし大降雨も晴れ渡り一同志氣旺盛の中にも氏は夜來の前哨戰で軍服は敵彈の爲引裂かれ泥まみれの顏には敵の血潮を浴びて居たが己が手柄は默して語らず次の戰鬪準備の爲敵情地形を詳細に說明して部下に憑據を與へた。此日所屬部隊は人合庄の北端陣地を攻撃したが氏の小隊は中隊の左第一線小隊となり午後六時より攻撃を開始した。氏は部下を指揮して勇敢敵陣地に近迫し敵前の水濠及鐵條網の狀態を偵察之れが通過法を機敏に立案した。水濠は敵の火線前五十米の線に設けありて幅四米深二米其後方南岸近く鐵條網を設けて居た。敵の機關銃及迫撃砲は間斷なく我を猛射して居たが氏は先づ射撃を以て一點に火力を集中し敵を壓倒すると共に突撃路を概成し率先水濠に跳込んで對岸に取りつき猛烈果敢に斬り込んで敵陣地を奪取し次で徹宵部落内の敵を掃蕩し前方一軒家の線に進出して同地を確保し翌二十二日午前九時完全に人合庄の敵陣地を奪取するを得た。

將校准士官之部

所屬部隊は二十三日午後六時より更に敵の第三陣地たりし姚官屯の陣地を攻撃したが氏の小隊は依然中隊の左第一線となり攻撃前進を起した。敵の猛射を浴びつゝ幾筋かの水濠幾條かの鐵條網を突破して午後八時敵前二百米の一大水濠の線に達した。水深六尺餘月出る前の眞の闇であつた。氏は首丈け水中から出して兵の身を案じ淺い方にと合圖した。前面には幾重にも鐵條網が張りまわされ十數個の露國式のトーチカが矢鱈に撃ち出す飛彈は篠突く雨の如くであつた。やがて決死の鐵條網破壞班が出て行く。氏は水濠線から鐵條網の線まで交通壕を設けよと自らも圓匙を取つて作業し午前三時頃までに十間程の

突擊路が出來た。午前四時は豫定の突入時期であつたが兵團長よりは「成功を祈る」と入電あり中隊長よりは「一歩もおくれるな退くな」と嚴命あり氏は「皆の者之れが最後の別れになるかも知れぬ泥水でもよい別れの盃をせよ」と述べ續いて「何クソ！　支那兵の十人や十五人は敵でもないたゝつ斬るは朝飯前だ死損ねたら此軍刀で死ぬまでだ骨を賴むぞ」と決死の覺悟を定め愛刀を洩れ出づる月光にかざしつゝ高鳴る腕を撫しつゝ刻一刻と迫る豫定の突擊時を待つて居た。「皆よ！　東の空を拜め！　故郷に別れを告げろ！」心靈しの注意を與へ氏も暫しの默禱を捧げた。其間依然として敵の銃彈は絶え間なく身邊に落下炸裂して居た。今しも發煙筒に點火されし煙幕が展張された。瞬間轟く中隊長の突擊令！　氏は猛然として陣頭を疾驅、手榴彈の雨に無慘にも部下の勇士等が前後左右に打倒される烈しい敵彈下に氏の颯爽たる雄姿に續く一群れの黒影巖をも碎かん狂瀾の如く押寄せたが不幸氏は右手に貫通銃創を受け左手に軍刀を持ち替へて尙も指揮を續けたが又もや左手に貫通銃創を受けた。傍の兵は「小隊長殿！　後方へ退つて下さい」と叫んだ。氏は「何をつ、男一疋此身は國に捧げて居るのだ此陣地を占領する迄は死すとも退らぬ、進め！」と不自由ながらも軍刀を兩手につかみ乍ら五六歩を前進し敵陣地の一角に足をかけたる其瞬時敵の投げつけた手榴彈は眞赤な火を吐いて身邊に炸裂し氏は土砂爆煙の中によろめいた。何クソ小癪な！　と踏張りし刹那又も一彈飛來頭部に重傷を受け　天皇陛下萬歳と叫んで打倒れた。敵は其間三回も逆襲して來たが部下小隊は小隊長を護れと奮戰して之を擊退した。氏はかすかに「占領はまだか」と繰り返した。部下は氏の耳許に口を寄せ「陣地占領の一番乘は小隊長殿です確かりして下さい」と叫ぶや氏はニッコリと笑み絶命した。所屬中隊は本戰鬪に於て實に七十三名の尊き犧牲に依り二十四日午前四時十分遂に姚官屯の堅壘を占領した。

氏や夙に忠君愛國の至誠横溢し上官に仕へて敬虔部下に臨みて慈愛至らざるなく上下の信賴厚く一度び聖戰に參加するや剛勇百難を克服し慧敏戰機に投じて赫々たる武勳を奏す。而かも功を誇らず常に部下を勞はりて戰力を貯ひ以て緊要時に其全威を振はんとす眞に青年指揮官の龜鑑と云ふべきである。あゝ前途有爲の人材を此一戰に喪ふ痛嘆禁ずる能はずと雖も氏の功績たるや敵の中央軍が難攻不落の堅陣と誇りし近代式の堅壘而かも優勢なる兵力と多數優良なる各種兵器を以て頑强に死守せる數線陣地を僅かに數日に攻略し得たるは實に氏等の尊き犧牲の賜であつて其功績たるや壯烈鬼神を泣かしめ天晴れ皇軍戰史に異彩を放ち其名は傳へて千載に芳ばしく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈や尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として一家殊に二愛子の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　岡本善太

### 獨斷敵の側防機關を制壓し突擊戰勝の端を拓く

氏は福岡縣糸島郡神吉村の人にして亡父を白水和三郎亡母をサキ養父を髮吉養母をマツヨと云ひ明治三十六年十一月二十五日生で妻壽子との間に幸子高明友道の三子がある。資性豪放磊落なれども執務は熱心緻密、事を爲す率先躬行、部下に對しては溫情溢るゝものがあり爲に模範小隊長として部下は悅服してゐた。大正七年三月京城西大門尋常高等小學校を同十二年三月京城中學校を卒業し引續き日本大學に入學同十三年四月京城帝國大學豫科に入學昭和四年三月同大學法學部を卒業し其後直に朝鮮殖産銀行に勤務した。昭和五年二月幹部候補生として大村歩兵聯隊へ入營し同年十一月滿期除隊同七年三月歩兵少尉に任官正八位に叙せられた。

支那事變起るや鈴木部隊に應召第七中隊第二小隊長として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後七

月二十七日團河村の戰鬪に於ては中隊の第一線小隊長として勇敢に奮戰し二十八日南苑の攻擊には當初豫備隊たりしが南苑占領後敵の逆襲を受くるや中隊の左第一線小隊長として此敵を擊退し爾後七月二十九日より三十一日に至る間は漢安門の警備に、八月一日より九月十四日に亘りては長辛店附近に陣地を占領して我が兵團の集結掩護に任じ九月十五日琉璃河畔の陣地攻擊に際しては中隊の右第一線となり特に房山東北方約千五百米敵陣地の最高地點たる突角陣地に全小隊を率ひて眞先に突擊し敵に多大の損害を與へて該陣地を占領し敵をして房山方向に潰走せしめ息つく遑もなく引續き追擊に移り其の間撰ばれて將校斥候となり敵地深く潛入して敵情其他に關し有益なる情報を呈し以て爾後に於ける大隊の戰鬪を有利ならしめた。

九月十六日涿州保定の會戰は開始せられた。此の日氏の所屬井田大隊は辛庄子の敵を攻擊すべく朝來疊勝の午前七時三十分行動を起した。午前八時頃より敵は猛射を浴びせて來たが中隊は一意前進し敵前五百米に接近した。然るに敵火は愈々熾烈を極め已むなく約四時間此線に停止し爾後の戰鬪を準備した。然かし此附近一帶は遮蔽すべき何物もなく疊勝の空より時々照す陽光は秋とはいひ暑熱尙酷烈であつた。午後二時頃戰車大隊來着し其の協力を得て更に攻擊前進を開始した。優勢頑强の敵は更に猛射を加へて來たが一進一止敵火を制壓しつゝ躍進を續け遂に敵前七八十米にまで近迫することを得た。此頃敵の左翼方面よりする側防火は甚だ猛烈にして中隊の突擊は之れを制壓するにあらざれば不可能の狀態であつた。かくと判斷したる氏は獨斷小隊の全火力を最高度に發揮して之を制壓し中隊の突擊發起を誘致せんことに努め暫時にして其効果顯はれ中隊は將に突擊に移らんとした其刹那惜しくも氏は頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。併し氏の勇敢適切なる指揮に依り中隊は午後一時十分さしも堅固なる敵陣地に突入して之を奪取し午後二時二十分には辛庄子南端に進出することを得た。氏の戰地より上役に送りし書中「どうせ死ぬ身なら華々しくと思ひますが一人の戰爭ではなし功名を急ぐわけにも行きません〇〇名の生命を預かつてゐる身體なのですから……然し之れが一團になつてゐる事は一番の力賴りになります」とあつた。

氏の戰陣に立つや常に勇敢剛膽率先陣頭に立ちて部下を率ひ其性格と相俟て部下敬服し死生の巷に擧止一體となり每戰小隊の戰力を十分に發揮して遺憾なかつた。かくの如きは是れ國軍の楨幹たる負托の重きに省み職責の存する所滅私奉公全能を傾倒し悅んで任に斃るゝは軍人精神の發露にして忠誠の顯現と云ふべきである。氏が出征以來每戰樹てたる赫々の武勳は千載の下靑史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈尙出でゝは聖戰を守護し入りては愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

---

## 陸軍步兵中尉從七位勳六等功五級　垣尾文夫

### 人合庄攻擊に偉勳を奏し遂に淸涼店の華と散る

氏は兵庫縣朝來郡與布土村の人にして實父を利市實母を初枝と云ひ明治四十五年五月三日に生れ大正三年一月叔父垣尾德次郎同りゑの養子となり未だ獨身であつた。資性豪邁にして沈着品行方正義務心に富み公共に奉ずるの念厚く爲に鄕黨

の信頼を受けて居た。昭和二年三月興布土小學校高等科を卒業し續いて兵庫縣立八鹿蠶業學校に入り昭和五年三月卒業同七年十二月幹部候補生として鳥取歩兵聯隊に入營熱心軍務に精勵成績良好にして翌年十一月除隊し九年六月には居村消防組第五部小頭を命ぜられ克く組員を統御し又青年學校教練指導員を囑託せられ熱誠以て指導の任に當り成績大に見るべきものがあつた。氏は又青年團役員として鄉土青年の爲盡瘁し團の向上發展に貢献せし所多大であつた。此の間氏は昭和十一年十月豫備歩兵少尉に任ぜられた。

支那事變起るや昭和十二年七月三十一日應召長野部隊第十二中隊に編入第三小隊長として八月九日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月七日より十二日に亘る馬廠附近の戰鬪には大隊大行李の掩護に任じ敗殘兵所々に潜在しある中を幾多危險を冒して第一線への糧食補給を遺憾なからしめた。九月十三日より滄縣附近の攻擊開始せられ二十一日所屬中隊が人合庄東側陣地の敵攻擊に當るや氏は右第一線の小隊長として小隊を率ひ午後四時三十分行動を起した。此の前進間氏は克く部下を掌握し自ら敵陣地の情況等を視察し刻々中隊長に有利なる報告を提供し午後九時より戰鬪を開始するや敵の銃砲火は頗る猛烈なりしも毫も屈することなく部下を激勵しつゝ勇進に勇進を重ね遂に敵前至近距離に達して敵に猛射を浴びせ愈々突擊の機熟するや敢然敵陣に突入して其一角を占領した。續いて終夜敵と交戰しつゝ占領地點を確保し翌二十二日拂曉より更に戰果を擴張すべく攻擊を實施するや敵は尙頑强に抵抗し殊に其の側防掩蓋機關銃よりの猛射は我が突擊を妨害せるのみならず隣接左小隊は之が爲前進甚だ困難となつた。氏は我が死傷續出し苦境に瀕せしも今こそ決死奮起の時なりと聲を嘱らして部下を激勵し的確に射擊を統轄し此危害を與へつゝある敵の側防機關銃を制壓し中隊の右翼方面即ち氏の小隊方面よりする戰果の擴張を容易ならしめ愈々此側防機關銃を撲滅するや機を失せず陣頭に立ちて水濠及鐵條網を乗り越え果敢に敵地に突入部下と共に忽ち敵十數名を斃し遂に午前十時人合庄東側陣地を奪取したが此の戰に於ける氏の活躍奮鬪は拔群であつた。更に續いて翌二十三日姚官屯驛の攻擊に當りては當初右第一線として勇敢に攻擊前進し特に右隣接第十一中隊の攻擊目標を側面より制壓して同中隊の攻擊を容易ならしめ相協力して敵に近迫同日午後三時四十分遂に姚官屯驛を占領し後ち豫備隊となつた。而して其の翌日二十四日午前四時より敵の後方主陣地に對し所屬部隊總攻擊を開始するや再び右第一線となりて勇戰奮鬪遂に敵主陣地を奪取し所屬部隊は更に追擊して息つく暇もなく二十五日午前八時より前三里庄の敵陣地を攻擊した。當時將兵一同連日不眠不休の激戰奮鬪に疲勞困憊其の極に達せしも氏は堅忍部下を激勵して腰をも沒する浸水地帶を攻擊前進し遂に午前十一時には之を奪取することを得た。而かも勝利に甘んぜず更に勇を鼓し引續き狼々川の線に敵を追擊し該河右岸に進出して該地橋梁を占領した。然るに敵は健氣にも鐵橋爆破の爲屢々逆襲し來たが其の都度勇戰奮鬪以て之を擊退し同地を確保した。斯くして十月三日德縣攻擊に當りては氏の中隊は更に第一線となり氏は左第一線小隊長として鐵道線路に沿ふ地區より攻擊し敵が城壁上より猛烈なる射擊を以て頑强に抵抗せるも勇敢に攻擊して之を擊退し翌四日には氏は將校斥候長となり敵情地形の偵察を命ぜらるゝや疲勞も危險も眼中になく勇躍其の任に當り有利なる情況を中隊長に提供し中隊の任務達成を容易ならしめた。

十月十三日午前六時長野部隊は敵の退路を遮斷すべく清凉店出發大庄に向ひ前進し清凉店東南方一粁に至るや後方に機關銃の銃聲を聞き同時に敵の大部隊我れに向ひ攻擊して來た。中隊は直に大隊の左第一線となり此敵に對し攻擊を開始せ

しが氏は右第一線小隊長として直に火線を構成し迅速に射撃を開始し先づ敵に一撃を加へて多大の損害を與へしが敵は衆を恃みて勇敢に我に向ひ攻撃し來つた。氏は熾烈なる敵火の下少しも動ぜず適切に部下小隊の射撃指揮をなし敵を制壓しつゝ勇進を重ねて敵に肉薄した。然るに敵は石莊部落方面より更に兵力を增加し來りしが氏は毫も屈することなく沈着剛膽小隊を指揮して優勢なる敵に徹底的打撃を與へ遂に勇敢に突撃を敢行して敵膽を挫き寡兵克く十數倍の敵をして潰走せしむるに至つた。然るに此時後方石莊部落に據れる敵より射撃を受け氏は左腰部及右前膊に貫通銃創を受け遂に其場に倒れた。而して收容手當の上遂次後送せられ十五日野戰病院に入院手厚き看護を受たが二十日遂に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏の鄕に在るや一村の模範中樞たり出てゝ軍に從ふや至誠一貫常に率先陣頭に立ちて部下を率ひ猛火の下克く小隊を掌握して擧止一體となり勇猛果敢指揮亦適切にして皇軍歩兵小隊の戰力を發揮して遺憾なかつた。實にかくの如きは皇軍の楨幹たる負托の重きに省み職責の在する所身命を君國に獻げて斃れて後已む忠誠の發露顯現と云ふべきである。今や氏の風發叱咤の壯容に接すべくもなく痛惜哀悼の情禁じ得ざるも然かし此の每戰樹てたる赫々の武勳は千載に輝き其芳名は萬古に流れて盡きざるべく不滅の英魂は護國の神となり神靈は尙も皇軍の戰勝を守護し遺族の將來を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍砲兵中尉從七位勳六等功五級　吉田精一

### 誠忠の教育家母なき一女を遺して南京攻撃の華と散る

氏は福岡縣遠賀郡岡垣村の人にして父を仲亡母をハキノと云ひ明治四十年一月二十四日生で亡妻宮野との間に一子叙子がある。責性明朗快活責任觀念頗る旺盛の人であつた。大正十五年三月東筑中學校を卒業し更に昭和六年三月廣島高等師範學校教員養成所を卒業して翌七年二月徵兵として久留米山砲兵聯隊へ入營同年十一月滿期除隊し同八年四月比叡山中學校教諭となり同九年四月石卷商業學校教諭に轉職同十年三月砲兵少尉に任官正八位に叙せられ同十一年十二月咸興女子高等普通學校教諭に轉職應召時に至つた。

支那事變起るや昭和十二年七月三十一日原田部隊に應召暫らく補充隊附として勤務しありしが氏が召集令狀を受領せしは恰も朝鮮より寸暇を得て故鄕に殘せし母なき愛兒の近況を見るべく內地へ休暇歸省中であつた。依て直に學校長宛「一死國に報いん、あと宜敷たのむ」と打電し歸省先より其儘應召し其後補充隊の勤務多端の中に於て自已擔當の校務を詳細に亘り遺漏なく認めて後任者に文書引繼をなした。氏は補充隊に在て再三再四隊長に戰地に出動を嘆願するところありしが其の都度隊長より急がず時機を待てと慰留せられ歷へ難き雄心を歷へつゝ時節到來を待つた。是に由り之を觀るに氏は動員下令と同時に可憐の愛兒を顧みる暇もなく此の聖戰の機に滅私奉公を期し最早生還を期せざる覺悟牢固たるものがあつたのである。かくして十月二十三日愈々待望の征途に就いたのであつた。氏は中支到着後岡村中尉の指揮する山砲中隊の第一小隊長を命られ十一月二十五日には南京攻撃の爲上海を出發し連日强行軍を續ける事二週間にして十二月八日東善橋近くに達し翌九日午後零時三十分中隊は高家庄南方千二百米の高地に陣地を占領した。此の時氏は敵の銃砲彈雨飛する

中を勇敢に小隊を指揮し敏速に陣地に誘導して放列を布置し中隊長の意の如く的確に射撃を指揮し有効なる射彈を以て敵に莫大なる打擊を與へ更に午後一時二十分八百米の高地上に陣地變換を行ふや猛火の下率先陣頭に立ち叱咤激勵小隊の志氣を鼓舞しつゝ勇敢に小隊を誘導して迅速に陣地占領を終り機を失せず有効なる射擊を開始し東善橋附近に於ける敵の前進陣地の左翼方面を克く制壓して敵を震駭せしめ遂に敵をして敗退の已むなきに至らしめた。而して其夜零時三十分中隊は追擊前進を起すや氏は中隊の後尾より前進して後方監視の任務を受け前進中偶々駄馬に故障を生ぜる爲之を區署し爲に中隊より遲れて追及すべく前進したが當時殘敵は暗夜尙各所に出沒せる狀況であつた。氏は大に警戒しつゝ急進せしに午前三時二十分暗を通して飛來せる一彈は不幸氏の頭部を貫通し惜しくも其の場に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

因に氏は咸興にありて獨身生活中其居室には常に父の寫眞を掲げ且其傍らに軍服を整備してあつた。身は女學校の教職にありと雖も東亞に妖雲漲るの秋一旦緩急に備ふる氏が平素の心構を窺ひ知らるゝのであつた。

氏や待望せる征途に就き其戰陣に立つや素より生還を期せず其忠誠の迸る所率先陣頭に立ち勇敢機敏確實に部下を掌握して的確に小隊の射擊を指揮し皇軍山砲の威力を發揮して遺憾なかつた。然るに征途間もなく江南の華と散りしは洵に痛惜の極みである。然かし死生命あり其名は盡くるなく南京攻擊の爲高家庄附近の戰に樹てたる赫々の武勳は其の芳名と共に千載に亘りて朽ちざるべく又不滅の英魂は護國の神と祀られ神靈尙皇國を守護すると共に孤兒の將來を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日砲兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　鷹尾武二

**平戰兩時の模範士官馬落坡夜襲に偉勳を奏して玉碎す**

氏は兵庫縣加東郡米田村の人にして亡父を道三郎母をなをと云ひ明治四十年十二月一日生で妻さかゑとの間に未だ愛子はなかつた。資性快活明朗身を持すること謹嚴責任觀念頗る旺盛にして各上官等しく敬服せし所であつた。又部下に臨むに骨肉の情を以てし期せずして其信望を一身に聚めてゐた。大正十一年三月米田尋常高等小學校を昭和二年四月京都工業學校電氣科を卒業し同三年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營下士官を志願し採用せられて同年十二月熊本陸軍教導學校に入校翌年十一月卒業し十二月歩兵伍長に任官し愈々精勵累進して同十年十一月歩兵特務曹長に進級し更に少尉候補者に選ばれ同年十二月陸軍士官學校に入校し翌十一年十一月卒業同十二年三月歩兵少尉に任官し正八位に叙せられ其の間昭和九年四月勳七等に叙し瑞寶章を賜り又滿洲建國功勞章を授けられた。氏は士官學校在校中父の訃に接す當時の日誌の一節に「唯此上の孝養は益々修養を積み國軍將校として愧かしからぬ德操を磨き一身以て報國の實を擧げ父祖の名を顯はし以て追善すとあるのみ」又「父の靈魂は永く此地に留まりて我盡忠報國の本領達成を必ずや見守るならん日夜精勵學生の本分に邁進し不日最も良き國家の干城として護國の重責を十二分に果し以て父の靈を瞑せしめざるべからず」とあり實に優秀

模範の將校として上下の信頼厚く聯隊の貴重なる存在として景仰せられしは宜なりと云ふべきである。

支那事變起るや沼田部隊に屬し第十二中隊小隊長として昭和十二年八月十一日勇躍征途に就いた。其動員下令時の日誌に「午後五時傳令來るいよ〳〵待望の日は來た。家族が既に覺悟を定め沈着して居るのが嬉しい」と後顧の憂なく出陣せる樣が窺はるゝのである。

九月十五日より滄州附近の戰鬪開始せられ同月廿一日滄州附近敵陣地右翼の據點たる馬落坡に對し所屬部隊は夜半より同陣地の東北側に向ひ壯烈なる攻擊を實施した。然るに敵の陣地は四ヶ月餘も費して構築せる堅固なるものにして加之敵は此陣地に據り頑强に抵抗し續々兵力を增加せしが遂に戰鬪交綏狀態に陷るに至つた。此時に當り部隊長は敵は東正面に沒頭しあるを看破し馬落坡西方より乾坤一擲の夜襲に依り一擊の下に敵陣地を突破し戰局の進展を圖らんとし氏を簡拔して夜襲の目的を以て輕裝甲車を利用し馬落坡西方地區に於ける敵陣地並に地形の偵察を命じた。玆に於て氏は欣然として二十三日午前一小隊を指揮し輕裝甲車に依り偵察を行ひたるも更に他の視角より精細的確なる偵察を行はんが爲部下を後方に殘置し單身晝間然かも敵陣地の直前數十米に進出し敵彈を冒して陣地前の障碍物殊に水濠の狀況敵の配備トーチカ等を仔細に偵察し時機を失せず報告し部隊長に夜襲の計畫立案の基礎資料を提供し且其成功の確信を得しめた。而して責任觀念旺盛なる氏は夜襲正面に對する我山砲の敵陣地要部の破壞に際して勞を厭はず午後八時再び自ら突破點に赴きて射擊の效果並に突破正面を點檢した。次で同夜午後十時第十一中隊は右第十二中隊は左第一線となり爾餘の部隊は聯隊の豫備隊となりて夜襲の爲前進を起した。當夜は月あるも空は曇りて周圍は暗く而かも敵彈は篠つく雨の如く其の中を氏は聯隊の最先頭第十一第十二中隊の中央前にありて誘導將校となり正確に之を誘導し幅深共に四米の外壕に跳ひ込み梯子にて前岸に登り鐵條網破壞と共に先頭に立ちて敵陣地に斬込み以て突入路を拓き爾後第一線小隊長として率先敵の第一第二陣地を突破續て最も堅固に構築せる第三線本陣地も突破した。かくして午前一時頃四線に亘る堅固なる敵陣地を三千米の縱深に亘り一舉に奪取し更に午前七時張新庄を占領して砲四門を鹵獲し此間幾度も敵の逆襲を擊退し遂て敵の後方據點たる孟家庄の攻擊を準備する爲張新庄南端に於て小隊を指揮しつゝありし時恰も午前十時敵の迫擊砲彈身邊に落下炸裂し無念右頰下部に其破片創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し堅固なる陣地に對する聯隊の夜襲を成功せしめ敵陣地崩壞の端緒を拓きたるは氏の力に俟つ所極めて大なるものがあつた。戰死三日前の日誌に「九月二十一日聯隊長に召され御下賜の酒を賜ふ一死報國」と記載せられてあつた。

氏や平素皇軍の模範たる德操の修養に怠りなく上下模範として敬服せし所其出てゝ戰陣に臨むや盡忠報國の至誠の迸る所斥候となりては剛膽縝密聯隊の夜襲計畫となり誘導將校となりては沈着勇敢所望の地に突擊路を拓き第一線小隊長となりては敢爲猛進息つく暇もなく四線の堅陣を突破す。其活躍は人間業ならずと讃へられしも宜なりと云ふべく眞に敵の心膽を寒からしめ鬼神を哭かしむるものがあつた。征戰中途氏の如き得難き將校を喪ふ痛恨盡きずと雖も士の戰場に臨むや百戰功なく甕全を愧ず一戰玉碎名を殘すに如かず實に張新庄の一戰氏の樹てたる赫々の武勳は千載の下靑史に燁き平戰一貫せる儀表は萬世に傳へて以て鑑とすべく其芳名は父祖を顯揚し英魂永へに靖國の神位に列し後世萬民に仰がるゝと共に神靈尙も皇猷を扶翼し奉り遺族に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し次て從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　松本三郎

## 勇敢積極的の大隊副官東邊庄の激戰に於て職に殉す

氏は岡山縣倉敷市南町の人にして父を平四郎亡母をコノと云ひ明治三十九年一月廿五日に生れ妻朝子との間に長男道男を擧げた。資性温厚篤實にして義務心厚く事に臨みて不屈不撓遂げずんば息まざるの氣概があつた。大正十二年三月岡山縣金光中學校を卒業し同十五年十二月幹部候補生として岡山歩兵聯隊へ入隊し熱心軍務及學術科の研鑽に努め昭和五年三月歩兵少尉に任官し次で正八位に叙せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月應召赤柴部隊に屬し末永大隊の大隊副官として勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて八月二十一日所屬部隊は良王莊を出發し膝を沒する浸水泥土の高粱畑を行くこと四里午後三時頃より畢庄子に蟠居せる約百十名の敵を擊破して同陣地を占領し更に薄暮を利用して徐庄子に據る敵約百名を攻擊して午後七時四十分之を奪取し續いて同部落の殘敵を掃蕩して夜を徹した。然るに同夜十二時頃迫擊砲三門を有する約三百名の敵は小癪にも同地の奪回を企圖し夜襲して來た。併し我が軍は勇敢に反擊を加へて之を擊退した。氏は此間克く隊長の戰鬪指揮を輔佐し又は敵彈雨飛の中を意とせず第一線各中隊長に重要命令及大隊長の意圖を傳達して各中敵の連繫協同を容易ならしめた。尙部落内の殘敵掃蕩に方りては率先剛勇果敢なる行動を以て敵の潛伏家屋に突入して之を剿滅し其勇名を馳せた。

八月二十三日午前三時所屬部隊は徐庄子を出發し東邊庄の敵陣地に向ひ前進した。東邊庄は靜海縣附近に於ける敵陣地帶の最右翼の堅壘にして有力なる機關銃迫擊砲を配置し加ふるに陣地直前には汎濫地帶を設くる等防備頗る完備し尙逐次兵力を增加し最後には約一千名の兵力となつた。所屬部隊は膝を沒する泥濘浸水の高粱畑を通過せざるべからざりしを以て其行動其戰鬪指揮は極めて困難なりしのみならず敵の各種銃砲彈猛烈に飛來し死傷者續出の狀態となつた。氏は斯る苦戰中に在りて克く大隊書記以下を掌握激勵して大隊長の戰鬪指揮を輔佐し又自ら第一線諸隊に赴きて緊要なる命令意圖を傳達する等機宜に適する行動を以て所屬大隊の戰鬪を有利に進展せしめた。敵は此陣地を失はんか全陣地帶の瓦解を來すべき事必然たりしを以て逐次に兵力を增援したが所屬大隊の猛攻に抗しかね遂に其戰線に稍々動搖の徴を認むるに至つた。茲に於て所屬大隊長は午前十一時三十分敵の彈雨を冒し猛然として第一線に躍進し氏も之に隨行した。此時敵のチェッコ銃より猛烈なる側射を受け氏は右腰部より腹部にかけ貫通銃創を受けどつと其場に倒れ「天皇陛下萬歳」と叫び更に大隊長に對し「後を頼みます」の一語を名殘とし壯烈なる戰死を遂げた。所屬部隊は氏等の勇戰に依り翌二十三日午前七時五十分東邊庄の堅壘を占領し靜海縣附近一帶の敵陣地帶崩壞の重大素因を與へた。

氏や夙に盡忠報國の志篤く其職責の命ずる所水火尙辭せざるの人であつた。今次聖戰に方り選ばれて大隊副官となるや上級部隊との連絡は勿論よく本部附要員を指揮掌握し適時適切に所屬大隊内の諸部隊に大隊長の命令意圖を傳達し慧眼克く戰機を看破して大隊長の戰鬪指揮を輔佐し又大隊の設營給養等戰力維持に細心の注意を以て晝夜間斷なき努力を傾注し

以て輝々たる戰果を收めしめた。然るに東邊庄の激戰に不幸此俊敏豪膽なる良幹部を喪ひたるは眞に痛惜を禁じ得ずと雖も氏の功績たるや其芳名と共に千載の下皇軍戰史に輝き不滅の英靈は尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族殊に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　福田幸一郎

### 勇敢有爲なる將校斥候

氏は栃木縣上都賀郡日光町の人にして亡父を芳三郎母をノブと云ひ明治四十四年十月二日に生れ妻タミとの間に長女富美子がある。責性溫順なるも事に臨みて果敢難局に當りて屈せず居常部下に接するに溫威兼ね行はれ部下の信賴厚かつた。昭和五年三月栃木縣立今市中學校を卒業同六年十二月幹部候補生として水戸歩兵聯隊に入營翌七年十一月滿期除隊し同十年三月歩兵少尉に任官の上正八位に叙せられた。除隊後は青年學校指導員として熱心精勵青年の訓導に努め柔剛宜敷を得生徒の敬愛を受けてゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月二十七日應召坂西部隊に編入せられ勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十一日より十三日に亘る楡岔鎭南方永定河畔の戰鬪に際しては十二日夜半將校斥候として永定河の渡河點及對岸の敵情偵察の任務を受け勇躍行動を開始し遂に敵線を突破して仔細に敵情を偵察し貴重なる報告を提供し指揮官に有力なる決心の根據を與へた。九月十五日より十七日に亘る拒馬河畔の戰鬪に際しては中隊内の小隊長として十五日午後三時三十分拒馬河畔に進出し輕機關銃擲彈筒等を指揮しつつ對岸の敵を制壓し以て大隊の渡河を掩護し次で午後十時頃中隊が渡河するや氏の小隊は中隊の第一線となり北相に向ひ攻擊せしが其前進間村落内に於て數次に亘り敵の逆襲を受けたるも指揮適切果敢なる反擊に依り之を擊退して同地を確保した。之が爲中隊は部隊の左側背を掩護安全ならしむることを得た。九月十八日及十九日平漢線鐵道西側地區の戰鬪に際しては中隊の左第一線小隊として北義安を攻擊し隣接機關銃と密接なる連繫を保ちつゝ互に協力して中隊の攻擊を容易ならしめた。九月二十一二十二日大冊河畔の戰鬪開始せらるゝや氏は一個分隊を率ひて將校斥候となり大冊河の景況及王谷莊堡附近の敵情偵察を命ぜられ二十一日午前九時三十分出發長驅して午後五時大冊河左岸舫上附近に達し仔細に敵情を偵察し其結果を大隊長に報告したが間もなく所屬隊も來着展開せし爲氏は直ちに部下第二小隊を指揮して尖兵中隊なりし第二中隊の左に展開し果敢に攻擊して舫上村の敵を驅逐し以て大冊河渡河點及王谷莊堡附近の偵察を完ふした績いて同夜大隊が大冊河畔の敵陣地を夜襲するに當りては氏は其偵察せる結果に基き部下小隊を率ひて大隊本部誘導の重任を受け大隊の先頭に在りて前進し遲滯なく敵に近迫して愈々敵陣地に肉薄するや率先々頭に立ちて猛然敵陣に突入直ちに敵數人を斬殺し忽ち敵陣地の一角を奪取せしがかくと見たる敵は三方より奪取せられたる地點に火力を集中せし爲氏は遂に胸部に貫通銃創を受けて壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し此勇敢なる突入は大隊戰捷の端緒を爲した。

氏の鄕に在るや閭里の薫染に努め出てゝ軍に從ふや部下を掌握して衆心一體となし而して其戰ふや率先陣頭に立ちて頗る勇敢指揮的確常に選ばれて或は斥候となり或は第一線となる。殊に大冊河畔の敵陣地攻略に際しては獅子奮迅の勢を以て敵陣の一角を奪取し皇軍歩兵の特色を發揮し遺憾なしと云ふべきであつた。實にかくの如きは職責の存する所家を忘れ身を忘れ唯々皇軍の楨幹たる矜持の下に斃れて後已む決意の顯現と云ふべきであつた。其赫々の武勳は千載に輝き不滅の英魂は護國の神と仰がれ尙も皇猷を扶翼し奉り又一家殊に愛兒の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級　藤生兵次

### 沈着にして勇敢なる小隊長

氏は群馬縣桐生市廣澤町の人にして父を梅太郎亡母をイツと謂ひ明治四十五年六月十五日に生れ藤生ための養子となり妻アキとの間に一子訓義がある。性沈毅にして忠實人に對する溫雅にして寛恕上下の愛敬を受けて居た。大正十四年三月廣澤尋常高等小學校を卒業後栃木縣立足利工業學校に學び染織科の課程を修めて昭和六年三月之れを卒業し其の修得した所を以て直ちに實務に當つたが翌七年十二月幹部候補生として高崎歩兵第十五聯隊に入營した。在隊間氏は最も眞面目に軍務に精勵し成績優良にして昭和八年十一月除隊となり同十一年三月豫備役歩兵少尉に任ぜられ次で正八位に叙せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊に屬し小隊長として間もなく北支に出征した。時恰も盛夏にして炎熱灼くが如く又未曾有の豪雨の爲到る所洪水泥濘に惱まされたが氏は率先垂範部下を愛護激勵して克く戰鬪力の維持に努めた。

九月十日所屬隊は永定河畔に達するや其右岸を占領せる敵に對し趙村附近を占領して連日至嚴なる警戒に任し此の間氏は屢々將校斥候となり敵情並河川の情況を偵察し有力なる資料を上官に提出し次で十四日には永定河を渉り對岸の敵を擊攘し續いて十五日拒馬河畔に據る敵を攻擊する爲先づ東茨村の敵を驅逐し更に西章它に轉進して奮戰大に努めた。更に十八日所屬中隊は高碑店に於て敵の退路を遮斷すべき任務を以て急追中萬家塢附近に於て敵の一部隊を擊破したが其際若干の死傷者を生じたるを以て中隊長は氏に其小隊約四十名を率ゐて死傷者收容隊長となり死傷者を後方に收容したる後中隊主力に追及すべき事を命じ中隊主力は再び急進を續けた。萬家塢附近の殘敵は我收容隊の兵力少數なるを知るや約四五百の敵は一團となり猛襲して來た。氏は直ちに小隊を鐵道線路西側の凹地に遮蔽せしめて敵情を視察して居たが此の際部下の中に敵の兵力多數なる爲やゝ狼狽の色をなす者あるを見た氏は聲を勵して「敵兵我れに近接するは彼自ら死地に入ると同じだ。今に殲滅してやる」小隊長の命令ある迄は絶對に射擊を禁ずると叫び此一言に兵卒は小隊長を絶對に信賴し整然として戰鬪準備を整へて待つた。敵は漸次兩翼より我れを包圍する如き態勢を以て終に三百米程に近接した時氏は一擧射擊開始を號令し俄然急襲的猛射を加へ多大の損害を與へた。之が爲敵は躊躇し遂に停止したが更に多數を恃みて再び前進を始めた。此頃小隊はやゝ亂射となつて來たので氏は大膽にも一度射擊を中止せしめ兵卒の精神を沈靜せしめた後更に綿密

正確なる狙撃的射撃を命じ此の間氏は終始泰然として部下を指揮し敵兵愈々五十米附近に接近するや左方面より敢然突撃を令し自ら先頭に立ち猛烈果敢に敵中に突入した。敵は脆ろくも混亂に陥り遂に多大の死傷者を遺棄して敗退した。斯くて氏は徐ろに兵を集め我が死傷者全部を收容して完全に其の任務を果した。次いで所屬隊は九月二十二日大凱河畔黄村附近に於て敵を撃破し殘敵を掃蕩して十月三日には石家莊附近を攻略した。

十月二十日所屬部隊が彰河右岸の敵を攻撃するに方りては氏は兵五名を率ゐて將校斥候となり渡河點を捜索する目的を以て午前八時中隊の位置を出發し上七垣部落西端合流點附近に於て自ら先頭に立ちて水中を渡り之れを偵察して成案を得再び河を渡りて將に我岸に上らんとする時惜しくも敵に發見せられ俄然迫撃砲彈の猛射を受け氏は顔面及四肢に多數の爆創を受け倒れた。然し剛毅なる氏は再び立ち流血を拭ふの暇もなく斥候に扶けられつゝ中隊長の許に歸還し視察せる情況を詳細に報告したる後「中隊長殿洵にすみません後を宜敷頼みます大變お世話になりました」と述べ又衛生兵に向ひ自分の手當は構はんでよいから同行の負傷兵の手當を頼むと謂ひ終ると共に名譽の戰死を遂げた。然れども氏の報告せる資料により爾後部隊は容易に彰河を徒渉して敵を撃破する事が出來た。

氏や熱誠温情部下に臨み部下皆悦服し又責任觀念旺盛にして常に最善の努力を拂ひ上司の信頼日を追ふて厚きを加へて居た。果せるかな萬家塢の戰鬪の如き冷靜果斷克く戰機を看破し衆敵を撃破して之を潰走せしめ又漳河の河川偵察の如き適切なる渡河點を偵察して爾後の戰鬪指導に貴重の資料を與へ而かも其臨終の心境たるや眞に皇軍幹部たるの眞價を發揚して百世を感激せしむるの概がある。あゝ前途有爲の青年將校を聖戰の半ばにして喪ふ痛恨禁ずる能はずと雖其功績たるや皇軍戰史に輝き其芳名は不朽に傳へらるべく其英靈亦不滅に生きて護國の神と仰がれ其神靈や尚も皇猷を扶翼し奉り又一家殊に愛子の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵中尉に進級し次で從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍砲兵中尉從七位勳六等功五級　柴田信雄

### 勇敢機敏の小隊長馬廠追縣攻撃に獨斷射撃を開始し偉勲を奏す

氏は兵庫縣飾磨郡糸引村の人にして父を朝二母をぬいと謂ひ明治四十四年二月十四日生れで未だ獨身であつた。資性謹直明朗にして友情厚く又責任觀念旺盛の人であつた。昭和五年三月兵庫縣立姫路商業學校を卒業し直に株式會社姫路銀行（後の神戸銀行）に入り執務誠實孜々として勉勵し上下の信頼を受けて居たが昭和六年十二月幹部候補生として野砲兵第十聯隊に入營し翌年十一月除隊し其後豫備役砲兵少尉に任じ正八位に叙せられ除隊後は再び神戸銀行に於て預金係貸附係を歴任して秘書課に勤務して居た。

支那事變起るや昭和十二年七月應召砲兵小隊長として勇躍北支方面に出征した。時正に盛夏酷熱灼くが如く而かも當時北支一帯は連日未曾有の豪雨に至る所出水し道路は泥濘馬脚車輪を沒し爲に皇軍作戰行動の困難は想像も及ばぬ程であつたが氏は小隊長として紛骨碎身凡ゆる困苦を克服し部下を督勵して難行軍を續け九月五日津浦沿線の戰鬪に於て所屬中隊が揚官屯南側に陣地を占領せんとするや氏の中隊長は觀測所に先行し氏をして中隊の陣地進入を指揮せしめた。然るに附近一帯は浸水地帯にして而かも諸所壕あり泥水汎濫して之を發見する能はず爲に砲車は水中に轉覆し馬匹は轉倒し所命地點への陣地進入は頗る困難であつた。之を見た氏は放列布置の機を失せん事を恐れ獨斷其の近くに陣地を占領して其の旨前田大隊長に報告し機を失せず中隊長の意圖の如く射撃を開始し第一線歩兵の攻撃に適切なる協力を爲し敵陣奪取に大な

る貢献を爲した。次いで九月八日より敵の要衝たる馬廠附近の攻撃開始せらるゝや氏の所屬兵團は流河鎮の敵を攻撃した。此の時氏の所屬中隊は大張屯附近に陣地を占領し左翼隊の渡河攻撃に直接協力した。當時我が砲列陣地には敵の裝甲列車砲野砲機關銃彈等は盛に集中せられ死傷相續いて生じ又中隊の觀測所は地形上遠く陳庄に進出し爲に指揮困難なりしも氏は放列先任小隊長として猛烈なる敵火の下に克く部下を掌握し正確適切なる射撃を以て第一線歩兵を支援し其の勇敢なる活躍と適切なる指揮は流河鎮攻略に寄與せし所偉大なるものであつた。

續いて滄縣附近の攻撃開始せられ九月二十一日夕氏の中隊は人合庄攻撃の爲め門官屯に向つて前進す此の時田中中隊長は豆店附近に陣地偵察の爲先行し氏は部隊を指揮して難路を前進中氣球隊より敵は退却を開始せり砲兵の射撃を望むとの通報に接し氏は直に之を中隊長に報告すると共に獨斷直に門官屯西方鐵道線路附近に陣地を占領し機を失せず退却する敵歩兵に猛射を浴びせ尚抵抗しある敵の裝甲列車並に人合庄南側トーチカを制壓し歸來せる田中中隊長に其處置を報告したが此の時に於ける氏の機敏なる獨斷行動は拔群の功績であつた。

九月二十七日より所屬部隊は德縣に向て敵を追撃した。此の日氏は砲兵通過の目的を以て滄縣より德縣に至る道路偵察を命ぜられた。氏は實に九月二十七日より十月三日に亘り此の重任に服し敗殘兵出沒する地域を萬難を排して偵察し機を失せず之を報告し主力砲兵の德縣進出を容易ならしめた。斯くて十月十三日より十四日に亘る平原附近攻撃には氏の中隊は敵前千米の暴露陣地に進入して松江歩兵部隊の攻撃を援助したのであつたが氏は小隊長として勇敢に敵猛火を冒して近距離射撃に依り敵の自働火器等を制壓撲滅し多大の損害を與へた。

十月十七日朝氏は斥候長として大隊長より平原停車場より大八里庄小八里庄に至る道路及附近一般地形の偵察を命ぜられた。氏は勇躍して部下斥候を率ひ午前九時出發先づ平原停車場守備部隊と連絡し郭庄附近を經て小八里庄に向ひ前進し午前十時三十分頃小八里庄の西側八里園附近に達するや突如四五十名の敵と遭遇した。氏は直に部下斥候をして之を大隊長に報告せしめ他の部下を遮蔽せしめ自ら敵情を偵察しありしが暫くして敵は我を發見し忽ち猛射を浴びせ來り氏は偵察を遂げ巧に遮蔽して歸還せんとする刹那無念敵の一彈は氏の頭部を貫通した。部下は直に氏を介抱したが致命傷は遂に一語も發する能はず壯烈なる戰死を遂げたのであつた。

氏は謹直明朗な銀行員として將來を囑目せられ今次聖戰に從うや克己堅忍凡ゆる辛酸困苦を克服して自己の職責を完うし殊に馬廠滄縣攻撃の際は中隊長不在中中隊を指揮して獨斷機敏に機宜の處置を爲して我が砲兵の威力を發揮し敵に多大の損害を與へ我が友軍歩兵の攻撃を支援した其の功績は誠に偉大なるものである。斯る勇士を斥候長として遂に八里庄に散華せし事は洵に痛惜の極みである。然し士の戰場に臨むや元より生還を期せず。今や氏の颯爽たる壯容に接すべくもないが其の赫々の武勳は皇軍戰史に輝き其の名は不朽に傳へられ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尚皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神ともなりて遺族に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日砲兵中尉に進められ次いで從七位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵少尉正八位勳六等功五級　猪股英雄

## 優秀なる機關銃小隊長陽高城奪取に勇戰し戰勝の途を拓く

氏は秋田縣由良郡石澤村の人にして亡父を寅之助母を美津乃と云ひ明治三十六年一月十三日に生れ妻レイとの間に長男豐を擧げた。性溫厚篤實にして孝心深く長上を敬ひ後輩を慈しみ一度び交はれば常に友情を重んじ禮節に厚かつた。氏は又極めて責任觀念强く責務の存する所不屈不撓遂げずんば息まざるの氣魄を以て努力し其忠實熱誠自づから世の垂範となり諸人の深き信賴と敬愛とを受けて居た。大正五年三月石澤小學校高等科を卒業し其後教員養成所に入所して所定の課程を修め大正六年四月より入營時まで小學校教員として奉職して居た。同十一年十二月現役兵として秋田歩兵聯隊へ入營し下士官候補者として採用せられ學術科優秀にして伍長に任官し爾來益々敏腕を發揮して昭和十年十二月歩兵准尉に累進した。其間昭和七年より九年にかけ滿洲事變に出動し功を以て勳七等に叙せられ同十一年四月麻布歩兵聯隊へ轉任し翌五月より北滿齊々哈爾に於て滿洲警備に服して居た。

支那事變起るや湯淺部隊に屬し松浦大隊の機關銃中隊第一小隊長として急遽天津方面に南下し以て同地方の警備に任じ更に踵をかへして承德多倫を經張北方面に進出し八月二十日より長城附近の敵陣地を攻擊するに至つた。當日所屬部隊は午後一時より攻擊を開始したが氏の指揮する小隊は第六中隊に配屬を命ぜられ第一線兩小隊の中間に展開し既設陣地に據る優勢なる敵に對し迅速機敏なる射擊を以て敵を制壓し以て同中隊の敵陣地奪取を容易ならしめ次で翌二十一日第六中隊の紅花平北方高地望樓の要點奪取に當りては機關銃中隊主力と共に先づ右側下方の敵側防火器を制壓して第六中隊の谷地通過を掩護し又長城線既設塹壕に據る頑敵を適時適切に猛火を浴びせて之を火制し遂に同中隊をして長城線最要地點たり





し望樓附近一帶を占領せしめた。

所屬大隊は翌二十三日拂曉より長城線の紅花平土井子南天門附近の敵陣地に向ひ攻擊を續行した。此時氏の所屬中隊は第一線兩中隊の中間に展開し正面の敵を猛射して大隊の攻擊前進を容易ならしめ翌二十四日土井子附近の既設陣地を攻擊するや氏の小隊は主力機關銃隊として敵陣地の右翼方面に進出し以て此敵に斜射側射を加へて之を撲滅し第一線中隊の攻擊前進を著しく容易ならしめ遂に大隊主力をして敵陣地の右翼包圍の動作を成功せしめた。所屬大隊は附近の敵を席捲して薄暮張家口に向つて前進中午後十一時頃石柵附近の溪谷に差しかゝつた。此際其西側高地より急射を受けし爲遠かに東方高地を占領した。其夜午前一時兵力不詳の敵の密集部隊氏の機關銃陣地に逆襲し來るや氏は機を失せず部下分隊をして之を猛射せしむると共に率先此敵に突入して敵兵二三名を血祭に上げたが敵は之に氣を呑まれ算を亂して潰走した。其後二十六日二十七日の兩日に亘り引續き主力機關銃隊として大隊の攻擊に適切なる支援を與へ二十八日張家口に入城するを

得た。

所屬部隊は其後戰力を充實し更に敵を追擊して山西省陽高城方面に行動を起したが九月六日午前六時永嘉堡の露營地を出發し大橋屯の敵陣地に對し午後一時攻擊を開始し午後五時同村の一部を占領した。然るに敵は夜暗に乘じて既に退却し所屬大隊は翌七日早朝追擊に移つた。途中敵は深さ五米幅三米の阻絶壕を設け且つ到る處橋梁を破壞しありし爲車馬の通

過は勿論徒歩兵さへも行動困難となり豫定時間よりも三時間の遲延を來たし午前十一時漸く天鎭城を距る二千米の地點に進出するを得た。天鎭城には約四五千名の敵兵ありて我が軍を阻止せんとしたが我が軍は一部を以て正面より攻擊せしめ主力は遠く右側方を迂回して天鎭城の背後に進出するに及び敵は周章狼狽陽高城方面に敗走した。

所屬大隊は八日午前十時行動を起し同十時四十分陽高城を距る一千米の線に進出するや敵の砲兵迫擊砲及び機關銃は一齊に火蓋を切り忽ち地上は彈幕地帶と化し山河に轟く銃砲聲の物凄さ敵は無雙の堅壘に據り其兵力約一萬と傳へられて居た。流石の皇軍も如何にして陽高城を攻略すべきかに頭を惱ましし午後三時に至つた。午後四時の命令で午後五時十分を期し約一時間二十分の城壁破壞射擊を行ふに決し此射擊の終末に膚接して氏の所屬大隊は先づ第五第六中隊を第一線とし突擊する事になつた。氏は主力機關銃の小隊長として城壁を距る二百米附近の家屋上に陣地を占め最も適切有效に敵を制壓し以て第一線中隊の突擊を容易ならしめた。今や第五中隊は右翼に第六中隊は左翼に突擊隊形を整へて猛虎の如く城壁の破壞孔に向ひ驀進した城壁の高さは約二十米もあれど破壞孔は僅かに幅二米高さ十米に過ぎなかつた。友軍は三本の梯子を接續し更に其上に人梯子を作りて決死の突入を敢行して居た。此時氏の小隊は第六中隊に配屬を命ぜられ機を失せず城壁目がけて陣地變換を行つた。小隊は午後十一時過ぎ漸く城壁上に到達するや敵の逆襲を受け重大危機に直面した。氏は直に猛火力を以て群がり襲ふ敵を將棋倒しに打のめした。斯くと見たる敵は其全火力を此處に集中した。あゝ悲慘鬼神を欺く氏も遂に擲彈筒彈の爲頭部右肩右足に重傷を受け幽かにも萬歲の一語を名殘とし壯烈なる戰死を遂げた。時に八日午後十一時三十分頃であつた。然かし所屬部隊は氏等の尊き犧牲に依り城壁の一角を確保し爾後城內掃蕩戰に入り遂に赫々たる戰勝を獲得するに至つた。

氏や多年の修養に依り益々其德性を玉成し又不斷の研鑽努力に依り實兵指揮の妙諦を把握し常に積極進取克く上官を輔佐し後輩を誘掖し上下の信望寔に大なるものがあつた。果然今次聖戰に參加以來各地の激戰に於て中隊長を初めとし中隊の戰死傷者實に三十數名を生じたが或は先任幹部として或は中隊長代理として悲眼克く敵情を明察し指揮亦適切にして克く所屬中隊の卓越せる戰鬪力を發揮し以て赫々たる武勳を奏するを得た。今や風發叱咤の壯容に接する能はず轉た痛惜の情禁じ難しと雖も氏が不朽の功績は天晴れ皇軍戰史に輝きて其の芳名は後世に讃はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵少尉に進級し正八位に叙せられ次で勳六等單光旭日章竝に功五級金瑪勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵少尉正八位勳六等功五級　大木金治郎

**長城線の作戰に偉功を奏して玉碎す（模範的機關銃小隊長）**

氏は埼玉縣北足立郡加納村の人にして亡父を松之助母をいくと云ひ明治三十六年八月十日に生れ妻ハルとの間に長女和代長男滿幹の二愛子を擧げた。性溫厚篤實にして常に上を敬ひ下を慈しみ就中愛子等の養育に就ては極めて注意深き溫情をかけて居た。氏は又讀書を好み絕えず自己の識見の增進を圖ると共に修養に資し常に責任を重んじ職責の伴ふ所水火をも辭せざるの氣慨を有し諸人の深き信賴を受けて居た。大正六年三月加納村尋常小學校を卒業し其後は母を扶けて家業に精勵する傍ら獨學を以て熱心勉學を續けて居た。大正十三年一月現役兵として麻布歩兵聯隊へ入營し克く軍務に勉勵して良成績を擧げ下士官候補者として採用され翌十四年十二月歩兵伍長に任官爾來益々敏腕を發揮し昭和九年には勳八等瑞寶章を賜はり又勤功章を授與せられ同十年十二月歩兵特務曹長に累進して滿洲派遣部隊に屬し齊々哈爾に駐屯し同地方の警

備に任じて居た。

支那事變起るや間もなく小林部隊に屬し龜谷機關銃中隊の第三小隊長として急遽天津地方に出動し東奔西走以て同地方の治安維持並に殘敵掃蕩に活躍し更に轉じて外長城線方面の張北に到り警備の重任に就いた。然るに所屬兵團は一般の情勢より速かに外長城線の敵を攻撃するに決し所屬部隊は八月二十日午前四時半行動を起し午前八時半より攻撃前進に移つた。氏の小隊は小浦少佐の指揮する第三大隊へ臨時配屬となり第一線中隊の攻撃前進を適切有效に支援し同日夕刻長城の北方高地に進出した。此夜第三大隊は主力を以て敵陣地に向ひ夜襲するに決し機關銃隊は現在地に在つて同大隊の側背並に兵團主力正面の掩護を命ぜられた。氏は其間戰況の推移を明かにし部下の志氣を鼓舞し旺盛なる企圖心を以て積極的に其任務を遂行した。翌二十一日は固有所屬大隊に復歸して右第一線となり第一線中隊に膚接して一擧長城主陣地の一角に進出し機を失せず敗退する敵を猛射して之に殲滅的大損害を與へた。翌二十二日所屬部隊は長城線より敗退せる敵を萬全方向に追撃した。氏の小隊は此際右追撃隊たりし梶山中隊に配屬せられ午前八時勝坊堡南側に到達した。此時氏の小隊は梶山中隊長の命に依り歩兵一小隊と共に同地西方高地上を前進して中隊主力の右側を掩護すべき任務を受け前進中俄然進路の前方高地に在りし敵より狙撃を受けた。氏は一進一止河原を超へて前方高地に取りつき機敏に臺上緣端に射撃陣地を占領し台上に於て猛威を振ひありし頑敵を制壓して之を驅逐し速かに所望地點に進出し以て完全に右側掩護の任務を全う

し同日夕刻所屬中隊に復歸した。

所屬部隊は更に前進を續行せんとしたが敵は我が進路上の天險水魁附近に既設せる堅固なる陣地に據り頑強に抵抗せるを以て同夜强襲するに決した。當時敵は兩側の高地及前方より熾烈なる彈雨を浴びせ來り我が第一線は全く隘路内に進退の自由を失ひ死傷續出する有樣であつた。此時氏は所屬中隊長の命に基き率先小隊を提げて大隊の右第一線に進出し前方道路上の敵重機關銃に殲滅的の大打撃を與へて之を壓倒震駭し以て所屬大隊並に兵團爾後の夜間攻撃に至大なる效果を齎らした。

八月二十五日張家口附近の戰鬪に於ては所屬中隊の主力機關銃として行動し吉家庄北側の敵を猛射し第一線歩兵部隊の進出を容易ならしめて居たが吉家庄西南側地區より約三四百名の敵兵我が右翼に向ひ逆襲し來りて一時所屬大隊の右側は危殆に瀕したが氏は從容機敏に小隊の猛火力を之に指向し瞬く間に大損害を與へて潰亂敗走せしめた。翌二十六日大隊主力は小場方向の敵を攻撃したが氏は其際東堡及西堡方向の敵に猛火を浴びせ以て大隊の側背を安全ならしめた。

九月六日所屬大隊が天鎭附近大橋上の敵陣地を攻撃するや氏の小隊は左第一線たりし第三中隊に配屬となり同中隊第一線兩小隊の中間に展開し大橋上以南の敵陣地を攻撃した。午後二時愈々攻撃前進に移るや敵火極めて猛烈の中を物ともせず丈餘の地隙を出づれば據るべき地物もなき平坦地にして前進甚だ困難なりしも氏は部隊を叱咤激勵し我に續けと疾風の如く躍進して適切なる射撃陣地を占め敵陣地に對する中隊突撃の直前に於ける機に投ぜる一齊射撃は敵に多大なる損害を與へ第一線陣地の奪取を容易ならしめた。氏は機を失せず敵の右側に陣地變換を敢行し退却中の敵を求めて背後より猛射を浴びせ以て協力中隊の戰果擴張に至大なる支援を與へた。

所屬中隊は其後聚落堡の戰鬪を經て九月二十四日以來下社村附近の戰鬪に參加したが二十八日氏の小隊は再び第三中隊

に配屬となつた。第三中隊の双子山高地の攻撃に於ては部下を激勵しつゝ率先斷崖絶壁の山腹を萬難を排して中隊に跟隨し中隊突入の機徴に卽し克く機關銃の特性を發揮して遂に敵陣地を奪取せしめ其夜は敵の執拗なる逆襲に對し終夜交戰して之を撃退し翌拂曉双子山々頂に在る主陣地の攻撃に方りては第三中隊の戰鬪に密接に協力して山嶺を完全に占領せしめ尙敗退する敵に殲滅的の大打撃を與へ爾餘の敵も急遽敗退の餘儀なきに至らしめた。

九月三十日よりの崞縣附近の戰鬪に於ては當初所屬中隊主力と共に行動し其後第一中隊に配屬せらるゝや常に積極且果敢に行動して第一中隊の戰鬪に協力したが就中十月四日薄暮より同中隊が崞縣城の西方車站附近の部落を占領して本道を掩護し其交通を確保すべき任務を受くるや氏の小隊は東條小隊と共に車站占領の任務に就いた。附近の地形は平坦開濶にして敵は近距離より我に終始熾烈なる銃砲火を浴びせて居たが氏は適切有效なる射彈を以て之を火制し再三の敵襲も見事に撃退し次で所屬大隊が城外西端部落を攻撃するや東條小隊と共に車站附近より熾烈なる猛火を浴びせて敵を此方面に牽制し以て大隊主力の戰鬪を容易ならしめた。併し其際金子一等兵外數名の戰死傷者を出し相すまぬと悲憤の涙を浮べて居た。然るに翌朝午前六時敵が部落南側より出撃し來るや氏は今こそ部下の仇討だと云ひ乍ら敵彈雨飛の中に鐵帽をも冠らず勇戰奮鬪し敵に多大なる損害を與へたが午前八時四十分一彈飛來無念！左耳より後頭部にかけ貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏や平素部下に接するや骨肉の情を以てし熱誠研鑽實兵指揮に習熟し而かも企圖心旺盛にして必勝の信念を以て職務に邁進して居た。果然今次聖戰に參加するや每戰機關銃隊は全性能を發揮し赫々たる武勳を奏し其任務を完遂した。寔に是れ實兵指揮官の鑑とすべき所報國の至誠亦鬼神を泣かしむるものがあつた。斯かる忠誠勇武の士を喪へるは痛嘆極まりなしと雖も氏が果敢の勳功は皇軍戰史に異彩を放ちて芳名は永く後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家特に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵少尉に進級し正八位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵少尉正八位勳六等功六級　岡本春雄

### 優秀なる機關銃小隊長人合庄の激戰に難局を打開して玉碎す

氏は鳥取縣氣高郡大正村の人にして亡父を信藏母をつや纖母をシナと云ひ明治三十六年三月四日に生れ妻とも子との間に長女嶺子を擧げた。性溫厚篤實志操堅確にして犧牲的精神に富み頭腦亦明晰にして特に教育技能に秀いで常に長上を敬ひ後輩を慈しみ上下諸人の信望極めて厚かつた。大正六年三月鄕里の高等小學校を卒業し翌七年十月鳥取縣教育會甲種講習所に入所したが中途退所して同縣土師尋常小學校准教員となり爾來同縣內賀露大和各小學校に歷任し大正十二年五月より兵庫縣廣谷第二小學校に奉職して居た。翌十三年一月現役兵として鳥取步兵聯隊へ入營し下士官候補者として採用せられ翌十四年四月より滿洲駐箚部隊に屬して渡滿し續いて山東臨時派遣部隊に配屬せられ昭和四年三月より第十師團司令部附となり爾後滿洲事變の爲鳥取步兵聯隊附として出征した。氏は其間克く軍務に精勵して其敏腕を發揮し昭和九年九月步兵特務曹長に累進し滿洲事變の功に依り勳七等青色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや間もなく長野部隊に屬し神原機關銃中隊の小隊長として勇躍北支戰線へ出征した。氏は所屬中隊唯一の現役幹部として克く中隊長を輔佐して八月末より所屬中隊長が特別事情に依り一時裝甲列車隊長として服務するや氏は中隊の重鎭として極めて積極的に活躍し中隊の任務達成に毫も遺憾なからしめた。

九月十日敵の第一線陣地たりし小王莊陣地の攻撃に際しては部下を督勵し自らも銃器彈藥を擔ひて機を失せず敵前の水濠を徒渉し同日午後四時中隊主力は馬廠主陣地の左翼據點なる流河鎭西南端に進出して警備に任じた。氏の小隊は此際中隊主力に在りて西方に對し警戒中午後五時頃に至り中隊正面に輕機關銃及擲彈筒各々若干を有する約三百名の敵兵が逆襲して來た當時敵は流河鎭奪回の目的を以て果敢なる猛攻撃に轉じたのであつたが氏は冷靜沈着好機に投じて熾烈なる火蓋を切り敵に潰滅的の大打撃を加へ其企圖を根本的に挫折せしめ以て馬廠主陣地帶の左翼に重大脅威を與へた。

九月十八日所屬中隊は川上大隊長の指揮下に滄州の敵主陣地に向ひ接敵行動中午前五時半頃魏庄子附近の堤防に據る敵より猛射を受け其前進困難となつたが氏の小隊は機を失せず之を火制して其前進を容易ならしめ交戰約三時間にして敵の第一線陣地を奪取せしむるに至つた。其後二十二日所屬部隊は友軍砲兵の攻撃準備射撃に引續き李家樓及人合庄附近の敵陣地に對し攻撃を開始するや敵亦ベトン製トーチカ及掩蓋陣地に據り極めて頑強に應戰し殆んど間斷なき銃砲彈の彈幕を以て我が攻撃前進を阻止した。遺憾乍ら我が軍は井上少佐以下多數の死傷者を出し攻撃意の如く進捗せず戰鬪漸次苦戰の狀態となつた。氏の小隊は此日早朝より第一線として人合庄東北方より攻撃し第三中隊の戰鬪に協力して居たが氏は此苦境を目撃するや獨斷最も活躍中の敵機關銃を求めて之に穿貫的の威力を發揚し以て第三中隊及第二大隊の攻撃前進を誘起し更に北部人合庄の東南端に陣地變換の爲率先躍進中無念敵彈飛來左悸肋部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。時に午前六時頃であつた。部下小隊は悲憤其極に達し敵前五十米の地點に銃を据え此敵に對し銃口火を吐いて猛射を浴びせかけ殲滅的の大打撃を與へた。其間山田上等兵は大腿部を射貫れて倒れ松村上等兵は頭部に貫通銃創を受け銃を握れるまゝ即死する等筆紙に盡し難き激戰であつた。併かし所屬部隊は氏等の尊き犧牲に依り同日午後八時五十分人合庄附近一帶の堅固なる陣地を占領するを得た。

氏や人格高邁教育技能優秀にして多年育英事業に貢献し出でゝ軍務に從ふや奮て皇軍幹部の一員となり益々其德操と幹部たる技能とを涵養し滿洲に將た山東に克く其敏腕を發揮し上下の信頼愈々厚きを加へて居た。果然聖戰に參加するや選ばれて機關銃小隊長たるの榮職を命課せられ小隊の團結鐵石の如く俊敏克く戰機に投合して適切なる射撃陣地を占め慧眼克く犬牙錯綜の戰況を判斷し獨斷其卓越せる火力を運用して之を誤らず以て友軍協力部隊の戰鬪に至大なる支援を與へた。寔に是れ皇軍幹部の龜鑑たる者であつたが遂に人合庄一朝の嵐に此有爲精悍の勇士を喪ふ眞に痛惜哀悼の情を禁じ得ない。然りと雖も氏が果敢に亘り殘せる赫々たる功績は天晴れ皇軍戰史に輝きて不朽に其芳名を謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇猷を扶翼し奉り一家の守護神として遺族殊に愛子の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵少尉に進級し正八位に叙せられ次で勳六等單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級　梶原祐藏

## 寡兵克く十倍の匪賊を撃退し遂に北滿の華と散る

氏は山梨縣東八代郡英村の人にして亡父を喜太郎亡母をよねのと云ひ明治三十八年十二月十四日生で妻ふさとの間に一子琇子がある。資性溫良事に當り明察果斷犧牲的精神に富み在鄕間は社會公共事業に貢獻せし所尠くなかつた。大正七年三月英尋常小學校を卒業し其後家業たる農に從事してゐた。大正十五年十二月徴兵として羅南歩兵聯隊に入營し熱心勉勵成績良好にして下士官候補者に採用せられ昭和二年七月豐橋陸軍教導學校に入校同三年七月同校を卒業し同年十一月歩兵伍長に任官爾後累進して昭和十一年十二月歩兵特務曹長に進み其間昭和六年十二月より同七年十月まで滿洲事變に從事し其功に依り勳七等に叙せられ青色桐葉章を賜はり同十二年四月會津若松歩兵聯隊に轉任第十中隊附を命ぜられた。當時新所屬隊は滿洲守備交代出發前にして業務頗る多忙を極めしが氏は着任早々の身を以て日夜熱誠業務を處理し殊に下士官以下の指導適切にして複雜繁多なる編成其他の出發準備を完了し其の輸送間に於ても克く中隊長を輔佐し無事長途の輸送を完了せしめた。中隊は滿洲到着後四月二十八日より主力を三江省通河縣祥順山に置き一部を三站に配置し警備の任に就きしが氏は祥順山中隊主力の位置にありて小隊長として同地附近の警備に任じ傍ら討伐並に治安維持に熱誠努力し中隊の警備任務達成に貢獻せる所頗る多かつた。特に此間五月十五日より十七日に亘る烏拉呼屯（祥順山西北方約十五粁）附近及六月二十四日より二十五日に亘る魚泡（祥順山南方約十五粁）附近の匪賊討伐には困難なる地形を克服して勇敢機敏に行動し部下小隊を確實に掌握して中隊長の意圖の如く活躍し中隊の任務達成を遺憾なからしめた。

十一月四日未明共產匪首趙尙志の麾下張一鵬雷平金主任等の率ゆる匪賊約二百名は氏の駐屯地祥順山の東南約二里にある東六方部落附近に蟠居しありとの報に接し氏は部下二十二名滿洲國警察隊二十名を指揮し午前九時祥順山駐屯地を出發した。此の時氏は先づ自ら敵情地形を偵察しつゝ敵の側背攻擊の目的にて氏以下七名乘馬にて出發他の十五名は菅野伍長の指揮にて東六方に向ひ前進せしめ該地に於て氏の指揮下に入るべく命令し滿洲國警察隊は別に敵の東側背を衝かしむる如く行動せしめた。東六方附近は一望千里の原野而かも滿洲特有の濕地帶にて泥濘膝を沒し其の行動の困難は言語に絶するものがあつた。菅野伍長の率ゆる一隊は東六方に近づくや約十倍の匪賊より射擊を受け菅野伍長以下勇戰奮鬪遂に之を擊退し敵は更に滿洲國警察隊に退路を阻止せられ北方に退却し東六方の東北部落圍壁に據て抵抗した。此の時午後〇時三十分氏以下七名の乘馬隊は菅野隊の東北に進出し氏は菅野隊を併せ指揮して猛烈果敢に攻擊した。敵の占據せる部落は東西に別れ氏の率ゆる七名は東部々落に菅野伍長の率ゆる十五名は西部々落に向ひ攻擊したのであつたが敵は頑强に抵抗し我は彈藥さへ漸く缺乏を來すに至つた。氏及菅野伍長は雨の如く降り來る敵彈を物ともせず一意前進して敵に肉薄し遂に阿修羅の如く敵陣に突入し菅野伍長は忽ち敵三四名を刺殺し更に稻塚のかげに據る敵に躍りかゝらんとする刹那敵の拳銃彈三發は無念菅野伍長の左肩に命中し倒れた。之を見た氏は「菅野を殺すな」と大呼して該方に前進せんとせし時敵の一彈は氏の左頸部を貫通して打倒れた。兩幹部を失つた部下一同は隊長の仇とばかり獅子奮迅の勢を以て突入縱横に敵を刺殺又は射殺し遂に敵をして多數の屍體馬匹を遺して敗退せしめた。部下は直に氏等を介抱手當したが氏は「何俺は大丈夫

だ兵力を確かり集結して置け」と答へ其の夜即ち五日の午前一時擔架に依り祥順山駐屯地へ送られた。而して午前五時駈け附けた坂本中隊長は直に氏を見舞ひ「御苦勞であつた何も家に申送る事はないか」と問うや氏は「何も言う事はありません家の事は心配ありません」と答へたのみであつた。斯くて哈爾賓陸軍病院に入り厚き手當を受けたが其の甲斐もなく翌六日午後五時北滿の華と散つた。因に菅野伍長も治療効なく同日午前六時瞑目したのであつた。

氏の駐屯地たるや東に北に滿蘇國境を控へて一觸即發の危機を孕み內壓縮せられたる匪賊は支那事變の勃發を奇貨として各地に蠢動を開始せる北滿の奧地であつた。此の時に於ける北滿警備の駐屯部隊の日夜の勞苦と危險は實に北中南支出征部隊に讓らざるものがあつた。而かも氏は新たなる部隊に轉任早々の身を以て克く部下を統御指導し忽ち上下の信頼を受け一度匪賊蟠居の報を受くるや地形の困難兵力の寡少の如きは之を顧みず萬難を排して勇戰奮鬪身は玉碎して遂に十倍餘の敵を撃壞し皇軍の威武を宣揚して遺憾なかつた。是れ實に一身を君國に捧げ斃れても尙已まざる忠勇義烈の精神の發露である。氏や惜しくも北滿の華と散りしも王道樂土建設の礎石となりたる赫々の武勳は千載の下靑史に輝き五族等しく景仰措かざるべく其の英魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神ともなり妻女の前途を加護照覽して已まぬであらう。

氏は傷死の日歩兵少尉に任ぜられ正八位に叙し次いで勳六等單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜つた。

## 陸軍歩兵少尉正八位勳五等功六級　武田忠次

### 勇敢機敏の小隊長瀕死の重傷を負ひ業務引繼を爲す

氏は茨城縣水戸市細谷門前町の人にして亡父を川又初太郎母をきく養父は松之介養母はきんと云ひ明治三十二年七月二十四日生で妻つるとの間に克士孝久の二兒がある。資性實直寡默溫厚にして勤勉殊に責任觀念頗る强かつた。幼より戰爭遊戯を好み劍術も靑年大會等には常に出場する等生來武を好みし反面人情には頗る濃かにして家庭に於ける弟に對しても學校に於て生徒に對しても軍隊に於て部下に對しても同樣であつた。大正二年三月前渡村高等小學校を卒業し又之より先大正元年四月より側ら水戸市上市漢學私塾に入り同二年四月まで修學した。大正八年十二月徵兵として水戸歩兵聯隊に入營、同年四月西伯利亞事變に出動十月屯營歸着、其功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はり、同十年十二月歩兵伍長に任官し同十四年甲種學生として陸軍戸山學校に分遣修業五ヶ月にして卒業歸隊、昭和元年十二月大隊本部書記となり昭和二年三月より二ヶ年間滿洲駐箚、同四年四月內地歸還、同年十二月聯隊本部書記となり同七年三月再び北滿に派遣せられ同年十二月內地に歸還、此間累進して同八年五月歩兵特務曹長に進級し又勳六等に叙し瑞寶章を賜はり同十年十二月依願豫備役に編入せられた。在隊間は精勵恪勤殊に銃劍術の伎倆は優秀にして特有の技能であつた。其後水戸師範學校に奉職せしが日淺かりしも上下の信頼頗る厚かつた。

支那事變起るや昭和十二年八月十七日應召石黑部隊第四中隊附となり同月二十七日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十四日永定河畔北相莊附近の戰鬪に際しては中隊指揮班長として戰鬪に參加し午前十一時渡河後敵陣地前數米の位置

に肉薄し中隊將に突入せんとする重要時機に突如敵の機關銃陣地より猛射を受け氏は之が爲我が突擊頓挫してはと直に中隊指揮班を指揮し此敵機關銃陣地に勇猛果敢に突入し敵兵數名を斃し退却せる敵を猛射せしめ敵に多大の損害を與へ以て中隊の突擊を奏功せしむるに至つた。

九月十五日中隊は引續き一擧に拒馬河畔に向て追擊した此の時中隊は大隊の拒馬河敵前渡河の掩護を命ぜられた氏は第一小隊長代理として小隊を指揮し對岸の敵陣地を射擊して之を制壓し大隊の渡河を成功せしめ午後十一時頃大隊主力の渡河終了後小隊亦渡河して南進すること數里此處に一時停止して爾後の追擊を準備し居たりしが翌十六日後方に殘置して小行李等の渡河掩護に任せしめありし中隊の第三小隊が敵の急襲を受け苦戰中なりとの報告に接し中隊は聯隊命令に依り直に拒馬河に急行軍を以て引返し第三小隊及大隊小行李救出の任務を達成し且死傷者の收容に任じありしが午後五時頃敵飛行機襲來し氏は小隊を指揮して沈着剛膽此飛行機と對空戰鬪中其投下せる爆彈三箇の中一彈は氏の身邊に爆烈し氏は腹部其他に破片創を受け瀕死の重傷を負ふに至つた。然し剛氣の氏は從容迫らず駈け寄りし衛生兵に對し「自分にかもうな輕傷者を早く繃帶せよ」と云ひ氣息奄々たる中に傍の次級幹部高根曹長に事務を引繼き更に中隊長に對して「戰場に斃るゝは本望なり倅は軍人にして貰ひたい」と遺言し衛生兵の手當も甲斐なく午後八時名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏の指揮班長たるや隊長に對する補佐至らざるなく其戰ふや勇猛果敢特有の武技を發揮す殊に瀕死の重傷を負ふも從容迫らず任務の引繼を爲せるが如きは其責任觀念の旺盛なる將兵一同感嘆措く能はざる所であつた。無念敵の爆彈に散華せしと雖も其赫々の武勳と責任觀念の示範とは千載の下靑史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈出でゝは聖戰を守護し入りては愛兒の身邊に留まり遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵少尉に進級し次て正八位勳五等に叙し雙光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵少尉正八位勳六等功六級　黑澤喜吉

### 勇敢機敏の機關銃小隊長死に臨みて尙進擊を號令す

氏は群馬縣多野郡万場町の人にして父を角吉と云ひ明治三十六年十一月十四日生で妻ちゑ子との間に一子智子がある。資性溫厚篤實寡默にして實行力に富み恪勤精勵人格高邁上下の信賴頗る厚かつた。大正九年三月神川尋常高等小學校を卒業し其後家業たる農に從事し入營時に至つた。大正十三年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營熱心精勵成績良好にして下士官候補者となり同十四年優秀なる成績を以て歩兵伍長に任官翌年十二月軍曹に進み昭和三年九月には聯隊本部附となり同五年三月旅團司令部附に選拔せられ同七年三月上海事變に出征して吳淞に上陸五月北滿に轉進濱江省呼蘭縣に於て滿洲事變に從事し同九年五月內地に歸着其功に依り勳七等に叙し靑色桐葉章を賜はつた。此の間巢進して同十年二月歩兵特務曹長に進級し高崎歩兵聯隊附となつた。

支那事變起るや森田部隊に屬し第二機關銃隊に編入第四小隊長として昭和十二年八月十四日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三十四日永定河畔の戰鬪に際しては雨下する敵彈下に克く部下を激勵して一擧對岸に涉り直に要地を占領し部隊の渡河を容易ならしめた。次いで九月十五十六日拒馬河畔望海庄附近の戰鬪に際しては主力機關銃隊に屬して戰鬪に參加し又河西務の攻擊に際しては敵彈雨飛の下克く敵情に留意し有利なる目標を發見して之に射擊を加へ更に不意に制高地點に進出し適切なる急襲射擊により敵を沈默せしめ以て歩兵中隊の攻擊を容易ならしめた。翌十七日には第五中隊に配屬せられ部隊轉進の掩護に任じ九月十八日澤畔店の戰鬪に際しては敵火の下克く部下を掌握し第一線に追尾して適時進出し敵の掩蓋機關銃を發見して之を射擊し我が機關銃の威力を十分に發揮した。斯くて九月二十一日には大冊河畔舫上附

近二十三二十四日は保定附近の殘敵掃蕩に任じ爾後十月二十九日に亘る間京漢沿線を彰德城に向て追擊した。此間殆ど不眠不休幾多困難の裡に部下を激勵しつゝ克く其任を完ふした。次いで十月三十日東部辛庄攻擊に際しては主力機關銃隊として戰鬪に參加し該地占領後は第八中隊正面に進出し公民屯方向より逆襲し來れる敵に對し急襲的射擊を加へて多大の損害を與へ之を擊退し又敵の掩蓋機關銃を發見して之を制壓し以て大隊の戰鬪を有利に導き爾後第七中隊が中央辛庄を攻擊するや同中隊に配屬せられ適時中隊正面の敵を制壓して中隊の該地占領を容易ならしめた。

十一月二日所屬隊は彰德西方千二百米王村部落に於て第八中隊に配屬せられ敵の警戒陣地盤磨花園庄附近の敵を攻擊した。此の時も氏は勇敢適切なる指揮により敵自動火器を制壓し中隊の戰鬪を有利ならしめ又同夜敵の逆襲に際しては沈着剛膽敵を至近距離に引寄せて之に迅雷的急襲射擊を浴せ多大の損害を與へて擊退し引續き十一月三日明治節の佳辰徐庄附近を攻擊するに當りては雨下する敵彈を冒し平坦開豁何等據るべき地物なき綿花畑を勇猛果敢に前進し克く部下を掌握して適時敵の自動火器を制壓又は撲滅し中隊の攻擊を容易ならしめ愈々敵に近迫し敵前八十米に達するや突擊援助の爲左第一線小隊の左翼たる恒河右岸斷崖近くに陣地を變換し中隊正面を側防して危害を與へつゝある敵掩蓋機關銃に對し不意に急襲的射擊を加へ之を制壓中射彈觀測の爲立ち上るや無念下腹部に貫通銃創を蒙り其場に倒るゝに至つた。然し剛氣の氏は之に屈せず、中隊長より戸部曹長小隊長代理の旨傳へらるゝや氏は「未だ大丈夫だ。殘念々々」と連呼し



幾度か起たんとするも身體の自由を失ひ出血亦多量眩む眼を開きては「進め／＼」と命し注射に依り漸く生命を保つの狀態となり遂に隊繃帶所に擔送收容せられ其後手當を盡したるも甲斐なく十一月五日午前七時半「進め／＼」と讃言を言ひつゝ名譽の戰死を遂々るに至つた。然し氏の勇戰奮鬪に依り小隊は配屬機關銃として其眞價を發揮し中隊をして敵陣地を奪取するに至らしめた。

氏の戰場に臨むや克く部下を掌握して擧止一體たらしめ毎戰率先垂範沈着剛膽積極機敏或は迅速なる敵發見となり或は大膽なる陣地變換となり或は的確なる射擊指揮となり皇軍機關銃の精鋭を發揮し敵の心膽を寒からしめて遺憾なかつた。就中常に第一線を志願して屢々配屬機關銃となり其傷つくや屈せず死期迫るも進擊を命じて已まず其壯烈鬼神をも哭かしむるものがあつた。かくの如きは是れ國軍の楨幹たる負托の重きに省み職責の存する所身命を君國に獻げて斃るゝも已まずとする忠誠の發露顯現と云ふべきである。征戰中途氏の如き忠勇の指揮官を喪ふ痛恨盡きずと雖も毎戰氏の樹てたる赫々の武勳と職責遂行の示範とは千載の下青史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり神靈尙皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族愛兒の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵少尉に進級し次て正八位勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍騎兵少尉正八位勳六等功五級　根岸理三郎

### 機關銃小隊長として勇敢機敏屢々偉勳を樹て遂に大册河畔に玉碎す

氏は群馬縣邑樂郡長柄村の人にして父を治助亡母をキタと云ひ明治三十五年一月三日生で妻サチとの間に君代チヨの二

女がある。資性剛膽にして忍耐力强く負け嫌であり理非を明かにし一旦志したる事は飽く迄貫徹するの風があつた。大正三年三月長柄尋常高等小學校を同八年三月實業補習學校を卒業し同九年十月及十年三月の二回に亘り青年部劍道講習に出席受講し劍道には頗る熱心にして寒暑を厭はず精進し郡聯合競技會に優勝賞狀を授與せられしこともあり又刀劍に嗜味を有してゐた。大正十二年十二月徴兵として宇都宮騎兵聯隊に入營成績良好にして下士官候補者に採用せられ同十三年八月騎兵學校に入校同年十一月騎兵伍長に任官し昭和二年三月より同四年三月まで滿洲公主嶺に駐劄同七年二月師團司令部附となり滿洲事變に參加此間累進して同十年二月騎兵特務曹長に進級した。劍道は殊に優秀にして師管下下士官の試合に優勝したこともあつた。

支那事變起るや安田部隊に屬し機關銃小隊長として昭和十二年九月三日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十四日永定河畔中公由附近の戰鬪に際しては右第一線中隊の攻擊に協力の爲午後三時五十分墓地附近に陣地を占領し迅速機宜に適せる射擊指揮と熾烈なる射擊とに依り敵を制壓し爾後第一線中隊の攻擊前進に伴ひ逐次陣地を變換して敵を震駭せしめ第一線中隊の攻擊を容易ならしめ以て午後四時十分遂に敵をして退却の已むなきに至らしめ中公由西方地區を占領するに至つた。次で九月十五日拒馬河畔駱駝灣附近の戰鬪に際しては迅速機敏なる行動と其射擊威力の發揮とに依り克く聯隊をして威力偵察の目的を達成せしめ次で九月十六日平漢線松林店驛附近の戰鬪に際しては午後十時松林店南方三百米の地點に於て第一線兩中隊に各一分隊宛分屬して其攻擊に緊密に協力し爾後聯隊長の直轄に復して第一線中隊と共に停車揚に向つて前進し第一中隊が愈々兵營に突入するや敵は該兵營を脱出して北方より迂回せんと試みしが氏は逸早く其行動を發見し機を失せず之に猛火を注ぎて殲滅し以て驛爆破作業班の行動を容易ならしめた。。引續き九月十七日史各莊附近に於ては退却し來る敵に猛射を浴せて多大の損害を與へ敵を混亂に陷らしめ次て聯隊が松林店を攻擊するや第一線たる第一中隊の攻擊に協力し敵を制壓しつゝ勇敢機敏に敵に近迫し敵をして對應の處置なからしめ多數の死者及糧秣衞生材料を殘して潰走するに至らしめた。次で九月二十日大冊河畔東西劉附近に於ては午前十一時四十分第二中隊の戰鬪に協力して勇敢に敵に近迫して猛射を加へ當面の敵退却するや迅速機敏に其退路に進出し猛烈なる火力を浴びせて敵に多大の損害を與へ多數の死體彈藥兵器を遺棄して潰亂するに至らしめた。次で九月二十一日大冊河畔小田城附近の敵攻擊に際しては第一中隊に協力し午前十時二十五分小田城村落内の敵を驅逐して攻擊前進し午前十一時十分頃同村落南端の敵陣地を奪取し續いて西莊村の敵に向ひ部下を叱咤激勵しつゝ攻擊前進し熾烈なる火力を發揚して協力中惜しくも頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の戰陣に立つや精悍常に陣頭に立ちて部下を率ひ其行動剛膽機敏其指揮沈着的確常に掌握確實擧止一體たらしめ每戰騎兵の活躍に重大なる役割を荷ふ機關銃の威力を適時適所に發揮して騎兵隊戰勝の素因を爲し遺憾なかつた。かくの如きは氏が幼より武道に精進せる膽力の賜なりしと雖も亦職責の存する所身命を君國に獻けて斃れて後已む忠誠の發露と云ふべきである。實に氏が每戰樹てたる赫々の武勳は千載の下靑史に輝き其芳名は萬古に流れて盡きざるべく又不滅の英魂は護國の神となり神靈出てゝは皇軍の戰勝を守護し入りては愛兒の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日騎兵少尉に進級し次て正八位勳六等に叙し單光旭日章並に功五級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵准尉勳六等功六級　飯田時造

## 豪快の勇士興安縣下に寡兵克く皇軍の武威を宣揚して玉碎す

氏は茨城縣結城郡大生村の人にして亡父を榮吉亡母をてふと云ひ明治四十二年十一月二十六日生れ未だ獨身であつた。資性磊落元氣にして事を爲す綿密周到而かも熱心精勵であつた。大正十年三月大生尋常小學校を卒業引續き菁莪農商學校に入り同十三年三月同校を卒業し昭和五年六月徴兵として會寧歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵成績優秀にして下士官候補者に採用せられ翌六年六月豐橋陸軍教導學校に入校同七年五月同校卒業歸隊の上歩兵伍長に任官同八年十二月滿洲獨立守備歩兵第一大隊附に轉屬累進して歩兵曹長に進級し其間滿洲に於て警備討匪に活躍し昭和九年四月功に依り勳七等に叙し瑞寶章を又同十一年七月青色桐葉章を賜はつた。尚氏は特に銃劍術に長じて居た。

昭和十二年七月支那事變勃發するや奉天省内に匪賊横行し滿洲國の治安を攪亂せんとする不逞の企圖あるを知りたる氏の所屬部隊長は岡田討伐隊を編成し奉天省清原縣の匪團を徹底的に覆滅する爲本部を清原縣城に置き討伐を開始することになつた。氏は討伐隊本部附として清原縣城に出動せしが七月十七日岡田中佐以下興安縣灣甸子部隊の討伐指導の爲該地に赴くや氏も亦隨行し一行十三名と共に自動車にて灣甸子に到り翌十八日再び該地を出發して歸還に就いた。然るに其途中午前十時三十分七道河子附近に差懸るや匪首王師長の率ひる自動火器を有する共產匪と保國軍との合流匪百餘名と遭遇した。岡田中佐は餘りに我が寡兵なると殊に遭遇地點が谷地底にして交戰上頗る不利なるに依り一擧に突破通過せんものと全速力を以て自動車を疾走せしめし處敵の自動火器及小銃の猛射に依り遂に運轉手は胸部に貫通銃創を受け自動車の運轉不能となり停止せしを以て今は是れまでなりと竟然敵を攻擊するに決し下車を命令した。此時氏は命令一下直ちに下車し岡田中佐坂本少佐等と共に護衛兵の主力を指揮し圍壁右側に進みて直ちに應戰猛烈なる射擊を開始した。然るに敵は高地稜線を占領し我は之に反し低地にして地形甚だ不利なりし爲猛烈なる敵の十字火を蒙り流石勇將猛兵も衆寡敵せず刻一刻相次で斃れ漸次苦境に陷るに至つた。然れ共氏は素より決死沈着剛膽勇敢に生存せる部下を激勵叱咤しつゝ勇戰奮鬪大に努めたりしが午前十一時三十分無念右胸部より右肩胛部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂げた。

氏の獨立守備隊に轉屬するや外對蘇一觸即發の危機に備へ內建國漸く數年未だ王化に靡かぬ殘匪肅清の重任を負ひ爾來四星霜或は兵の直接訓練に任じて對蘇對匪の準備に遺憾なからしめ或は警備討匪に任じて建國の創業に貢獻せる功績は沒すべからざるものがあつた。偶々敵匪の包圍を受くるや天時を借さず凶彈空しく氏を斃し日頃の劍雄を發揮するに由なかりしは長恨痛惜の至りである。然し孤軍奮鬪皇軍の威武を宣揚して玉碎せる其赫々の武勳は王道樂土建設の礎石となりたる偉功と共に千載の下に輝き其の英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙皇猷を扶翼し奉り遺族に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵准尉に進級し次で勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵准尉勳七等功六級　田中文三

## 瀕死の重傷を受け尚部下を督勵し山西省宋家庄の突擊を成功せしむ

氏は千葉縣長生郡高根本鄕村の人にして父を留藏母をとめと云ひ明治四十一年四月二日に生れ妻德との間には未だ愛子を惠まれなかつた。性溫良眞摯にして親に孝兄弟に優さしく又知己朋友間の情誼敦厚にして事に當るや熱誠忠實不屈不撓の氣慨があつた。從て諸人の愛敬を受け前途有爲の靑年として將來を囑目されて居た。大正十二年三月茂原小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶けて家業に精勵して居たが熱烈なる軍人志願抑へ難く遂に現役志願をなし甲種合格を以て採用せられ昭和二年一月麻布歩兵聯隊へ入營し熱誠軍務に精勵して良成績を擧げ下士官候補者に採用され愈々其技能を發揚して歩兵伍長に任官し爾來各種業務に歷任して敏腕を揮ひ曹長に累進し昭和十一年五月以來は滿洲警備部隊に屬し齊々哈爾に駐屯し同地方の治安維持の重任に服務して居た。

支那事變起るや間もなく小林部隊に屬し黑岡中隊の指揮班員として急遽天津方面に南下し天津附近の支那軍掃蕩及附近の警備に任じ續いて開平附近に於ける武裝解除及獨流鎭附近の戰鬪に於ては第一線として活躍し八月中旬所屬部隊は熱河省を經て張北に轉進した。氏は其間大中隊間の連絡に命令受領に將亦諸報告に不眠不休の努力を以て複雜多忙の業務を處理し又彈丸雨飛の下豪膽機敏に活躍して克く其任務を全うした。

所屬部隊は其後張北に在りて待機中であつたが八月二十一日より外長城線の堅壘を攻擊して之を奪取し續いて敗敵を追擊して萬全方向に前進中二十三日午前零時頃土井子東方高地に到達した。此時敵は前面及左右より氏の所屬中隊を包圍し鼓に激戰を展開するに至つた。氏は敵彈雨飛の中に大中隊間の連絡並に命令受領に任じありしが第三小隊長負傷して噎るゝや氏は爾後第三小隊長を命ぜられ此敵を擊破し更に其東南方ナマコ山の敵陣地を攻擊するに至つた。此時氏は左第一線小隊長として敵の右側に迂回し不意且猛烈に敵を側射して中隊主力の突擊を容易ならしむると共に部下小隊を提げて敵陣地に突入し此高地を占領した。二十四日夜に入り所屬大隊は縱隊追擊を以て南天門北側高地附近に達せる時鼓に再び優勢なる敵より包圍せらるゝに至つた。此時氏の中隊は大隊主力と共に南天門東側高地を占領して敵の右翼を席捲し敵に多大の損害を與へて戰果を擴張し遂に二十六日午前七時敵を潰亂敗走せしめ二十七日張家口を占領した。氏は此間敵の機先を制し最も勇敢に奪鬪し中隊戰鬪の遂行に甚大なる貢獻を與へた。

九月六七日に於ける天鎭附近の戰鬪に於ては中隊指揮機關として活躍し特に敵が退却に方り交通遮斷の目的を以て設けありし阻絶壕の埋沒作業を命ぜらるゝや適切なる指揮を以て迅速に之を完了し以て部隊の追擊動作を容易ならしめ又九月八日陽高城の攻擊に方りては彈丸雨飛の中に指揮機關として奮戰し殊に南門及び城壁內側よりの敵の回復攻擊に際しては夜暗火急且困難なる情況下に適切機敏に命令報告を傳達し以て中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。

九月十日所屬中隊は本隊內に在りて敵を聚樂堡方向に追擊し翌十一日午前十一時より宋家庄西南方高地の敵を攻擊するに至つた。此際氏は左第一線たる第一小隊長を命ぜられ既設陣地よりする敵の猛射を浴びつゝ一意攻擊前進し機關銃小隊の協力と相俟ち敵前百五十米に近迫し戰鬪愈々激烈となつたが氏は部下を督勵して敵を壓倒し漸く其の動搖を認むるや氏

は小隊を提げ獨斷突擊を決行し敵前二十米を疾驅中惜くも敵彈の爲下腹部に貫通銃創を受けて打倒れた。氏は之に屈せず立上り數歩を前進したが力盡き再び倒れた。氏は尙も部下を叱咤して前進と叫び午後四時頃小隊が喊聲を揚げつゝ敵陣地に突入之を占領するを認むるや氏は莞爾と笑み幽かにも「萬歲」と奉唱し一言私事に及ばす從容として戰場の華と散つた。

氏や幼にして軍人を志し誠實克く職務に勉勵し着眼適切にして優秀なる成績を擧げ溫情克く下級者を指導し常に中隊幹部の中堅として將兵一般の信望を一身に蒐めて居た。果然聖戰に參加するや中隊指揮機關として將た第一線小隊長として俊敏よく情況に適合して其敏腕を伸べ周到豪膽以て志氣を鼓舞し中隊戰勝の爲常に貴重なる素因を作爲したる等眞に中隊幹部の模範として有爲の人材であつた。然るに聚樂堡附近一朝の嵐に此忠誠勇武の士を喪ふ洵に哀悼痛惜の情を禁じ難しと雖も氏が累次の武功は赫々として皇軍戰史に輝き其芳名は後世に讃はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵准尉に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵准尉勳六等功六級　山田英章

**優秀なる指揮班長東花園の激戰に殊勳を奏して玉碎す（壯烈敵七八人を斬殺す）**

氏は鳥取縣氣高郡神戸村の人にして父を山田梅信亡母を同さく養母を同ふみと云ひ明治四十三年五月二十七日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして祖父及父母に仕へて孝心深く又兄弟に對しても溫情誠に濃やかであつた。學友隣人の交際亦圓滿にして常に國家並に鄕黨の榮榮に心を用ゐ曾て母校に奉安殿を新設の擧起るや氏は平素蓄積せる貯金全額を引出して其建設費の一部にと寄附し又戰死後手記の遺書に所持金は國防献金にせよと書き誌されてあつた。以て氏が性格の一端が窺はれやうと思ふ。大正十四年三月神戸小學校高等科を卒業後直に同地農業補習學校へ入學し昭和三年三月同校卒業昭和五年一月現役志願兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し下士官候補者として採用せられ熊本陸軍教導學校へ入校翌六年十一月同校卒業の上歩兵伍長に任官し爾來益々心身を鍛錬し軍事知識の增進を圖りて敏腕を發揮し昭和九年十二月曹長に累進した。氏は其間滿洲事變に參加し各地の警備討伐に任じ功を以て勳七等青色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや間もなく長野部隊に屬し和仁中隊の指揮班長として勇躍征途に就いた。斯くて八月下旬北支に到着するや父宛に左記要旨の手紙を送つた。「近き中に第一線部隊と交代の噂あり宿望の軍刀切れ味を試さんチャンコロは大した事なし御安心あれ祖父は達者ですか？　出發の際一目なりとも面會を望んで居たが其機を得ず出發したるは甚だ殘念なり宜敷く申上げて下さい尙母上及岩男へ宜敷」とあつて此處にも氏の面目躍如たるを認め得る。

八月下旬まで兵團豫備隊たりし所屬部隊は愈々第一線部隊を命ぜられ九月上旬より馬廠陣地帶の西北正面に向ひ前進した。敵は李文百を總帥として敗殘の第三十八師及中央軍二箇師を合し其兵力三萬堅壘と地の利に據り頑强なる抵抗を企圖して居た。九月十日所屬部隊は砲兵部隊並に航空部隊の敵主要陣地に對する砲擊及爆擊に引續き敵陣地の左翼方面に對し

攻擊前進を開始した。當時氏は歩兵砲中隊の掩護部隊長を命ぜられ歩兵一小隊を指揮し所屬大隊の戰鬪開始位置を出發し歩兵砲中隊の直接警備並に彈藥補充の援助に當つた。此時歩兵砲中隊は第一線部隊の直後を行進中であつたが氾濫の爲道路甚だしく不良にして後方小隊特に彈藥小隊の前進は極めて困難となり剩へ進路の左右よりは屢々小逆襲を受けた。氏は機を失せず之を擊退し歩兵砲隊をして豫期の如く小王莊西北側に陣地進入を完了せしめ以て所屬大隊の戰鬪に適切なる協力を與へしめ殊に同中隊の戰砲隊が第一線歩兵の前進に伴ひ流河鎭南側に陣地を推進すべく前進を起し其彈藥小隊が進路上の水濠を渡河する頃約三倍の敵が三方面より包圍せんとする狀態となつた。此時氏は部下小隊を指揮し機敏適切に此敵の近迫を阻止し以て歩兵砲中隊の行動を安全ならしめたるのみならず大隊豫備隊と協力して敵の重圍の中より所屬大隊を救出し其後第一線小隊長として決死の夜戰に參加し敵の展望哨觀測所等を猛射して其機能を失はしめ遂に人和鎭兵營奪取に先陣の功を樹て更に息つく暇もなく之を追擊し早林庄に向ひ攻擊前進した。氏は其際指揮班長として敵前三百米に於て率先渦卷く濁流を押し渡りて敵情地形を偵察せる結果正面攻擊の不適當なるを中隊長に竟見具申し一部を以て正面より主力を以て敵の左側背を攻擊するに至つたが氏は中隊主力内に在りて敵の盛を衝き遂に殲滅的打擊を與へて此陣地を奪取した。

九月二十三日所屬部隊は滄洲の本陣地たる人合庄東花園の敵陣地前に進出し爾後の攻擊を準備した。同日午後五時半所屬中隊は右第一線中隊となり東花園の敵陣地を攻擊すべき命を受け日沒より夜襲の爲行動を起した。敵の陣地は數年前よりの構築にかゝる堅壘にて砲擊も爆擊も其效なく八聯式トーチカ及掩蓋機銃座を無數に設け草の動きにも警戒の眼が鋭く光つて居た。其夜月煌々と照り渡り「日本」「鳥取」の合言葉に蕭々として地を匍ひつゝ幾つかの水濠と障碍物を乘り越えて敵前五十米に近迫した。突如トーチカ陣地より氣たゝましき猛射が初まる、中隊は數名の犧牲者を生ずる、今は是れ迄と鐵條網の强行破壞トーチカの肉彈爆破の一齊强襲と變つた。此時第二小隊長負傷し氏は代つて小隊を指揮し一氣呵成に突擊路より突入し紫電の弧を畫いて群がる敵兵を叩つ斬つた。續く部下小隊も接戰格鬪遁ぐる敵をば射倒し斬り倒し拂曉頃には東花園の南側に出でゝ敵の退路を遮斷して居た。返り血を浴びし氏は血刀を提げ「中隊長殿！　七八人斬りました」と威風凛々邊りを拂ふ間もあらばこそ衆を恃める敵軍は午前六時形相物凄く所屬中隊目がけて逆襲して來た。氏は思ひ切り敵を三十米迄近寄せて一齊射擊の猛射を加ふれば敵は累々たる死屍を殘して潰走した。されど敵は新手を替へて逆襲する事三回に及んだ。氏は常に部下を激勵して悉く之を擊退したが無念！　此間敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。併かし所屬中隊は氏等の尊き犧牲に依り午前八時三十分東花園の堅壘を占領之を確保するを得た。

氏や志操高邁にして年と共に指揮技能並に軍事上の諸着眼を向上し一隊將兵の深き信頼を受けて居た。今次聖戰に參加するや中隊幹部中唯一の現役者として名實共に中隊の柱石となり克く戰機を明察し部下指揮班員の掌握を的確にし外隊長の企圖に基き適切機敏に其戰鬪指揮を輔佐し小隊長として第一線に立つや旺盛なる企圖心と精練せる實兵指揮技能と卓越せる武技とに依り數次の戰鬪に赫々たる武勳を奏し戰勝の途を拓いた。あゝ忠誠にして有爲の良幹部を喪へるは痛恨極まりなしと雖氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて其芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として其將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵准尉に進級し次で勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵准尉勳六等功六級　關根定二

## 崞縣攻撃に突撃の好機を看破し友軍の突撃を誘起す

氏は埼玉縣南埼玉郡新方村の人にして父を清良母をヨシと云ひ明治四十年十一月十八日の生で妻某との間に長男勉がある。袁性溫厚篤實にして義務心厚く又慈善の心深し大正十一年三月新方尋常高等小學校を卒業し、爾後家に在りて農業に從事し昭和三年一月徴兵として歩兵第三聯隊に入營し、下士候補者に採用せられ累進して歩兵曹長となり滿洲守備の爲齊々哈爾に駐屯中昭和十二年七月支那事變勃變するや氏は湯淺部隊の中隊給養係曹長として北支に出動した。斯くて所屬隊は天津に至り該地附近殘敵掃蕩の上八月中旬外長城線に向つて前進し二十二日臨坊堡を二十七日張家口を九月七日天鎭十三日大同を席捲した。此の間氏は第一中隊指揮班長として又張家口攻撃以後は第三小隊長として重疊せる山岳地帶に連日連夜困苦と缺乏を克服し不眠不休の活動を續け熱心中隊長を補佐して克く其の任を全うした。以上の各戰鬪に於ては所屬兵團は遂に名譽の感狀を附與せられた。斯くして氏の所屬部隊は九月二十四日より自動車又は徒歩行軍に依り長驅百二十餘里を突破し山岳地帶所在に敵を撃破しつゝ十月四日より崞縣城の攻撃を開始した。氏は谷中隊第三小隊長として終始第一線に立ち四日未明崞縣城西方約四百米水道路附近に至るや忽ち敵の猛射を受けた。氏は中隊長の意圖に從ひ機敏に小隊を部署し敵の猛火を冒して勇敢に攻撃し遂に敵の第一線を突破占領した。然るに敵は其の本陣地より猛射を浴びせ來り而かも敵陣地は地の利を占め其の陣地たるや頗る堅固にして戰鬪遂に日沒となり敵前近く夜を徹して翌日の攻撃を準備した。翌五日拂曉と共に我が砲兵は敵陣地を猛撃し又我が飛行隊は猛爆を加へ所屬兵團は北方より主攻撃を實施し氏の所屬隊は兵團の主攻撃を容易ならしむる目的を以て午後二時より決然攻撃前進し急霰の如き敵の銃砲火を冒して遂に敵前百米に肉薄した。茲に所屬隊は我が砲兵の破壞射撃を待つて突撃を敢行すべく其機を待ち戰鬪は最高調に達して彼我の砲聲は迅雷の如く轟き我が飛行機は敵陣地上空に亂舞して其の爆彈は蒙々こる土柱を立て慘憺たる修羅の光景を現出した。氏は敵の動搖今かと突撃の好機を狙ひつゝありしが決然突撃を令して胸墻上に躍り出でた。然るに惜しや此の時敵機關銃の一彈は氏の頭部を貫通し壯烈なる戰死を遂げた。之を見た小隊の分隊長以下は信頼せる小隊長の仇討とばかり突撃し遂に翌八日未明崞縣城は陷落し城頭高く旭旗を翻すに至つた。

氏は軍隊に入り日夜心身を鍛錬し學術技能を練磨すること十有一年其の間幾多の尊き體驗を得今や下士官として玉成し鼓に聖戰に從ひ遺憾なく其の軍人精神と蘊蓄を發揮した。出征以來中隊指揮班長として山岳地帶に殆ど不眠不休幾多の危險と困苦缺乏を克服し堅忍奮鬪中隊長の股肱となり其の困難なる指揮を助け更に小隊長としては克く部下を掌握して其の信頼を一身に集め小隊一團となつて勇戰奮鬪就中崞縣攻撃の激戰に至難なる突撃の好機を觀破して率先塹壕を躍り出でゝ突撃を令して友軍の突撃を誘起し戰勝の端を拓きたるは如きは蓋し氏の軍人精神と尊き體驗の結果と謂はねばならぬ。今や聖戰の初期此の如き幹部を喪へるは洵に痛惜の至りである。然かし氏逝けりと雖も其の赫々の武勳は聖戰々史に輝き千古に語り傳へられ其の英靈は不滅に生き護國の神と仰がれ神靈尚も皇猷を扶翼し奉り又愛子の上に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵准尉に任ぜられ勳六等に叙し單光旭日章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

# 下士官之部

## 陸軍歩兵曹長勳七等功六級　飯島正三

### 優秀なる本部書記克く連絡の重任を果し惜くも空爆に拒馬河畔の華と散る

氏は群馬縣佐波郡境町の人にして父を道之助母をたつと云ひ大正三年三月十九日に生れ未だ獨身であつた。資性質實剛健不言實行の人であつた。昭和三年三月境町高等小學校を卒業し引續き境町青年訓練所に入り同八年三月其の課程を修了した。昭和八年十二月現役志願兵として高崎歩兵聯隊に入營直に所屬隊と共に北滿に駐屯し該地に於て初年兵教育を受けつゝ四周匪團横行の地にありて警備に任じつゝありしが將來幹部たらんことを熱望し下士官志願を爲し採用せられ翌九年四月内地に歸還同年十二月仙臺陸軍教導學校に入校翌十年十一月同校を卒業し原隊に歸り同年十二月歩兵伍長に任官し同十一年十二月軍曹に進級翌十二年七月には選ばれて大隊本部附となつた。此間軍務に精勵學術の成績優秀にして上下の信頼厚く將來を囑望せられてゐた。尚滿洲事變の功に依り勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや森田部隊に編入せられ第二大隊本部書記として昭和十三年八月十四日勇躍征途に就いた。此間連日殆と不眠不休出戰準備に努め續いて長途輸送間宿營給養に關する業務貨物搭載卸下に關する業務等複雜多岐なる諸般の業務を處理し些の支障をも生ぜしめなかつた。北支戰線到着後九月十三日より十四日に至る永定河附近の戰鬪に際しては所屬大隊は豫備隊となり第一線大隊に續て該河を渡河し引續き夜間追擊を敢行せしが氏は本部連絡掛として當時敵の敗殘兵各地に殘存し絶へず我に對し射擊を加へつゝある狀態なりしが氏は夜間之等危險地帶を奔走し以て各中隊との連絡を確保し大隊長をして困難なる夜間の指揮掌握を容易ならしめた。

九月十五十六日拒馬河々畔望海庄附近の戰鬪に際しては所屬大隊は右追擊隊前衛として午前三時より行動を起し午後零時半より敵彈下に拒馬河の渡河を敢行し爾後主力の渡河を容易ならしむべく午後二時三十分展開して敵陣地に對し攻擊を開始した。氏は敵彈雨飛の間連絡掛として第一線中隊との連絡に任じ克く活躍して其連絡を確保しつゝありしが午後四時第六中隊の狀況を視察し來るべき旨大隊長より命ぜらるゝや當時敵彈益々熾烈なりしに拘はらず彈雨を冒して決死勇躍第一線に進出し詳かに狀況を視察し且第六中隊長と連絡し幸に微傷だも負はず滯りなく本部位置に復歸して重要なる報告を大隊長に呈した。然るに間もなく敵機上空に現はれ其投下せる爆彈は本部附近に落下炸裂し無念腰部に爆創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し大隊長は氏の齎せる報告に基き極めて有利に戰鬪指導を爲すことを得午後六時には遂に可西務の敵陣地を占領することを得た。

氏や待望の幹部となり偶々時運に際會して其戰陣に立つや常より一死奉公の覺悟、彈雨を意とせず只管其任務に邁進し大隊長を輔佐して其戰力を發揮せしめ遺憾とする所なかつた。然るに天氏に更に一層の雄腕を揮ふの時を借さず征戰間もなく空爆の犧牲たらしめしは眞に長恨に禁へないが死生命あり其名は盡くるなし、可西務の一戰に大隊戰勝の素因をなしたる拔群の功績は支那事變史に牢記せらるべく新東亞建設の礎となりたる其芳名は千歳に謳はれ英魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尚も皇國を守護し又遺族の前途に尊き加護佑助を

垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵曹長勳七等功六級　稲村秀信

### 優秀なる中隊指揮班長姚官屯の血戰に奮鬪し戰勝の基礎を作る

氏は鳥取縣八頭郡若櫻町の人にして父を甚六母をさとゝ云ひ明治四十三年六月二日に生れ妻花代との間に長男公明を擧げた。性溫良眞摯にして孝心深く交際圓滿信望あり。又事を行ふや細心大膽にして不屈不撓の氣慨を持つて居た。大正十三年三月若櫻小學校高等科第一學年を修了し其後は家庭に在りて父母を扶けて農業に精勵し餘暇を以て青年訓練所に通學し昭和五年十二月所定の課程を終了した。翌六年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊へ入營し同年十二月歩兵上等兵を命ぜられ間もなく臨時派遣部隊に屬して渡滿し各地に討匪警備の重任を果たし同九年二月軍曹に累進して豐橋歩兵聯隊附となり同年十二月凱旋し功に依り勳七等青色桐葉章を賜はつた。爾來益々軍務に精勵して居たが一家の事情に依り昭和十年十一月善行證書並に事務適任證明書を附與せられ滿期除隊した。歸鄉後は再び家業に精勵して兩親に孝養を盡し又在鄉軍人分會長として大に活躍し分會の向上發展に甚大なる貢献を與へ又町内の模範青年として其將來を囑目されて居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊に屬し篠原中隊の指揮班員として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來津浦線に沿ひ南進し九月中旬馬廠附近の戰鬪に於ては所屬中隊は丁莊に進出して高等司令部の警戒に任じたが氏は能く敵彈下に勇敢機敏に諸連絡を確保して所屬中隊の任務遂行に遺憾なからしめ又其後敵を青縣に向ひ急追して所屬兵團爾後の



前進を容易ならしめた。

九月二十一日所屬部隊が午後六時行動を起し人合庄の敵陣地を夜襲するに方りては氏は敵彈雨飛の中を物ともせず中隊と所屬大隊本部間を往復して夜間困難なる連絡を確保し中隊が愈々敵陣地に突入するや機を失せず大隊本部を中隊位置に誘導し中隊が更に前方一軒家の線に進出されるや闇夜を衝いて大隊本部に連絡中有力なる敵の逆襲部隊を發見し直に之を所屬中隊及大隊本部に報告せるのみならず隣接中隊にも通報して見事に之を擊退せしむるを得た。

次で二十三日姚官屯附近の戰鬪に於て中隊指揮班長たりし補田准尉が第一小隊長代理となるや氏は代て指揮班長を命ぜられた。姚官屯の敵陣地は敵主陣地の核心とも稱すべき堅壘にして敵の抵抗亦頗る頑強であつた。我が軍は午後六時行動を起し終夜に亘る夜襲を反復し苦戰奮鬪の結果翌二十日午前五時二十分遂に之を占領した。氏は其間敵の猛烈なる彈雨を浴びつゝ暗夜且泥濘地帶に指揮班員の運用を適切にし又自ら難局に立ち重要連絡を確保して中隊長の指揮連絡を容易ならしめたるのみならず屢々貴重なる敵情報告をなし午前四時所屬中隊が敵陣地の一角を占領し更に頑強に抵抗する殘敵を制壓しつゝ再び突擊を行ふや氏は中隊長と共に猛烈に敵陣地に突入壯烈なる白兵戰に依り之を奪取し息をもつかず疾風迅雷戰果を擴張せんとする刹那頭部に手榴彈創を受け壯烈なる戰死を遂げた。併かし所屬中隊は氏等の勇戰に依り赫々たる戰勝を獲得するを得た。

氏や郷に在りては孝悌青年の模範となり軍に從ひては義に滿洲事變に赫々たる武勳を奏し再び今次聖戰に參加し中隊指揮班員として俊敏克く情況を判斷して熱心中隊長を輔佐し又部下班員の狀態を明察して適時適切に之を運用し以て中隊長の命令意圖を所要部隊に傳達せしめ。難局に遭遇するや率先自ら重要連絡に任し以て常に中隊戰力を最高度に發揚せしむるを得た。而して姚官屯の血戰には壯烈鬼神も避くる奮鬪に依り戰勝の基礎を確立し遂に玉碎した。寔に是れ皇軍歩兵下士官の模範にして一般軍人の龜鑑たるものであつた。今や其壯容に接し得ざるは痛恨哀悼の情を禁じ得ざるも氏が累次の勳功たるや皇軍戰史に輝やき其芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國竝に一家殊に愛子の將來に尊きが加護佑助を垂るる事であらう。

氏は戰死の日歩兵曹長に進級し次で功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍工兵曹長勳七等功六級　石地源三

### 忻口鎭の難戰苦鬪に偉功を奏し全軍戰勝の端緒を拓く

氏は兵庫縣佐田郡久崎村の人にして亡父を彌之助亡母をシュンと云ひ大正元年十月十三日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實幼にして父母に別れ兄を親とも慕ひ極めて兄思ひであつた。又幼者後輩に對しても慈愛同情をかけ諸事熱誠着實にして義務心厚く世人の信望厚かつた。昭和二年三月久崎第一小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて家業に精勵して居た。昭和七年一月現役兵として岡山工兵大隊へ入營し成績良好にして下士官候補者に採用せられ同年九月より陸軍工兵學校へ分遣となり翌八年十月同校卒業の上工兵伍長に任官し其後間もなく滿洲事變の爲渡滿し警備の重任を果し功を以て一時賜金を賜はり其年十二月工兵軍曹に進級した。同十年三月には陸軍戸山學校へ學生として分遣せられ所定の課程を修めて歸隊し同十一年五月支那駐屯軍工兵隊附となつた。

支那事變起るや間もなく大賀部隊に屬し奥田中隊に編入せられ京津地方の警備に就いた。七月二十七日通州に於て戰鬪を開始せらるゝや氏は第一線部隊と密接なる連繫を保ち彈雨を冒して糧秣を前送して部隊給養に遺憾なからしめ又同夜所屬部隊が南苑攻擊の爲移動するや大行李の自動貨車と行動を共にし徹宵降雨泥濘の難行軍の中に克く指揮官を輔佐し適時部隊の要求を充足し續いて豐台附近の追擊に於ては敗殘兵の襲擊を受けたるも的確機敏なる處置に依り之を擊退し又進路上の障碍を排除して部隊に跟隨し蘆溝橋附近の攻擊の際は物資極めて貧弱なりし爲途中の危險を意とせず僅少なる兵員を指揮して豐台に至り所要の物資を蒐集し以て機宜に應ずる敏活なる行動に依り部隊給養に支障なからしめしが如き氏の獻身的努力は偉大なるものであつた。

八月十九日より十月中旬にかけ氏は所屬部隊の一部と共に北京周邊の交通作業竝に匪賊討伐に從事し渡河鎭黃寺等に駐留して給養業務の主任となり補給調辨等に不休の活躍を續け適切なる給養を實施するを得た。

所屬部隊は十月十三日北平を出發し大同を經由して山西戰線に參加するに至つた。山西戰線に於ては敵は忻口鎭を樞軸とし天險を利用して蜿蜒四里に亘る堅壘を築き精鋭を誇る支那中央軍に依り頗る頑强なる抵抗を續けて居た。皇軍は十月

十三日より約二旬に亘り砲撃及空爆を行ふと共に百方手段を盡して力戰苦闘を續けしに拘らず戰局更に進展せず損害を顧みず肉彈を以て寡兵漸く數倍の敵と相對峙する苦境に在つた。十月二十四日所屬部隊は萱島歩兵部隊に配屬され氏は第二小隊長第一分隊長を命ぜられ同日午後一時を期し敵陣地の要點たる軍艦山に向て猛攻撃を行ひ漸く其一角に近迫し得たるも敵の斜射側射並に正面射頗る猛烈にして爾後の前進困難となり敵前二十五米に於て日沒を待つに至つた。午後六時突撃を敢行したが敵は巧に地形を利用し手榴彈迫撃砲重輕機關銃彈の飛來は宛ら篠つく雨の如く爲に我が軍の死傷續出し玆に遺憾ながら突撃は挫折した。午後八時頃敵は軍艦山方面に兵力を增大し數次の逆襲を行ひ來り混戰亂闘の後敵を撃退し得たるも友軍歩兵の死傷者續出し又携行彈藥も缺乏するに至つた。玆に於て氏は午後十一時を期し爆藥を以て前面の敵重火器を撲滅すべき重任を受け部下四名を指揮し友軍歩兵の支援を受けつゝ爆藥及手榴彈を以て前面の敵を再三攻撃して之に甚大なる損害を與へ遂に軍艦山の一角を占領之を確保し續いて戰果擴張中無念！左胸部に盲貫銃創と頭部挫創を受け壯烈なる戰死を遂げた。併かし氏等の勇猛果敢なる行動に依り當面の我が歩兵部隊は翌二十五日軍艦山に進出するを得玆に全軍戰勝の端緒を拓くに至つた。

氏は陣中より屢々實兄宛に通信し「義の爲に生命を捨つる程尊い事はありません。命のある限り元氣で立派な御奉公を致し軍人の本分を全うする覺悟です」と認め又南苑の總攻撃時には敵兵八名を斬倒したる旨申添へてあつたと云ふ事である。氏や志操堅確沈勇果敢にして思慮周密であつた。東奔西走京津地方の敵大軍を掃蕩するに方りては熱心克く所屬隊の給養を擔任して敏腕を發揮し難戰苦闘の山西戰に於ては實兄に誓へる言を其まゝに一身を犧牲に供して全軍戰勝の端緒を拓き壯烈鬼神を哭かしめ百世の下懦夫を起たしむるの慨があつた。眞に是れ皇軍軍人の龜鑑と云ふべきである。あゝ斯る忠誠勇武の士を喪ふ痛歎哀悼禁じ難しと雖も氏が赫々たる武勳は皇軍戰史に異彩を放ちて其芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守り又一家の守護神ともなり亡き父母に大孝を申べ遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日工兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵曹長勳七等功六級　岩林巖

**老練にして勇敢なる輕機分隊長張新庄夜襲に奮戰し敵陣内に玉碎す**

氏は兵庫縣加古郡天滿村の人にして亡父を勇三郎と云ひ日露戰役に從軍し勳八等功七級を賜はり凱旋後一年にして沒した。氏は明治四十二年二月四日生れで妻正子との間に信行晴子の二兒を擧げた。資性溫厚篤實しかも處事積極的にして責任觀念强く大事に臨み沈着且勇敢であつた。氏の父沒後母は再婚せし爲生後間もなく叔父に養育せられ昭和四年一月現役志願兵として姫路歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして選ばれて下士官候補者に採用せられ同十二月熊本教導學校に入校翌五年十一月同校卒業十二月歩兵伍長に任官し同六年十二月歩兵軍曹に進級同七年十一月善行證書を附與せられて滿期退營し同九年十一月より川崎造船所製鈑工場檢査課に勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召沼田部隊第十二中隊に編入第三小隊輕機關銃分隊長として同月十一日勇躍北支に向け征途に就いた。氏は常に戰友吉村曹長を「吉村お前が死んだらお前の家に行つて話してやる其代り俺が死んだらお前は俺の家に行き行勳を共にして生きて居た時の事を言ふて呉れ」と語らひ合つて居たが其對話は簡なるも死生不定を達觀し遺族に傳ふべき赫々の武勳を擧ぐべく密かに期しつゝありし心構への程を窺ふ事が出來る。八月二十日河圖の攻撃には氏

は中隊指揮班員として又八月二十五日より九月十四日に亘る馬廠附近の戰鬪には中隊兵器係として參加した。

・九月二十三日沼田部隊が張新庄の敵陣地に對し夜襲を決行するや所屬中隊は一同軍旗に訣別したる後午後十時豆店を出發敵陣地に向ひ行動を起し午前零時三十分頃所屬中隊は大隊の左第一線となり接敵行動を開始した。敵は其陣地を數線となし其第一線陣地は數條より成る散兵壕地帶とし其前方には深幅共に約四米の水濠を其又後方には鐵條網を繞らし又第三線陣地は連續せるトーチカを設備し其前方には更に幅五米深一米の水濠を繞らし頗る堅固に構築してあつた。而して當夜は月はあれども空は曇りて周圍は暗く、しかも我接敵前進を起すや敵は疾風の如く猛射し來りしが氏は之を物ともせず克く分隊を掌握し敵の逆襲に備へつゝ勇敢に前進し遂に敵に近迫し率先水濠に跳り込み前岸に登り鐵條網の破壞口完成するや部下を激勵銃劍を振り翳して猛烈果敢に第一線陣地に突入して之を奪取し續て敢爲前進第二線を突破し尙も破竹の勢を以て第三線をも占領せしが其際左前方より敵が逆襲し來るを知るや機を失せず大音聲にて分隊を指揮中無念頭部に貫通銃創を受け午前二時二十分遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏は戰陣に立つや夜間彈雨の下沈着剛膽掌握確實指揮老練加之率先勇敢に行動し部下に深き感銘を與へ至難なる陣內の突破に於ては其敢爲前進を容易ならしめ中隊戰勝の因を爲して遺憾なかつた。是れ蓋し一身を君國に獻げ分隊長たる重責に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである、氏や參戰幾何もなくして散りしは惜みて尙餘あるも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は父子盡忠の譽と共に万世不朽興亞の靑史に異彩を放ち其英魂亦不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙皇國の前途を守護すると共に愛兒の遺志繼承を照覽加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵曹長に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵曹長勳七等功六級　甲田文之助

### 機を覩る敏にして積極勇敢の分隊長遂に北滿の華と散る

氏は大阪府泉南郡熊取村の人にして亡父を鹿造母をマスノと云ひ大正三年三月十五日生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして孝心深く寡默實踐の人であつた。幼にして父に死別し貧困の家庭に兄二人と共に母の手一つに育てられたが幼な心にも母の勞苦を察し朝夕其の手助けを爲しつゝ熊取尋常小學校に通學しありしが大正十四年三月尋常五年修了と共に退學し同村の泉タオル會社に工手として入社し入營直前迄家計を助けて居た。而かも氏は熱心精勵し優良工手として泉州工業團より表彰された。十九歲の時現役志願を爲し昭和九年一月步兵第三十七聯隊に入隊し熱心勉勵其年七月には精勤章を附與せられた。氏は尙下士官候補者を志願して採用せられ同年十二月一日豐橋教導學校に入學翌十年十一月卒業原隊に復歸し十二月一日步兵伍長に任官して第三中隊附を命ぜられ同十一年十二月一日步兵軍曹に進級した。斯くて翌十二年四月氏の所屬部隊は滿洲に派遣せられ爾來湯原縣鶴立崗附近に駐屯し日夜治安の維持警備に任じ屢々匪賊討伐に參加し特に十月七日湯原縣湯旺河谷に於ける共匪討伐の際は能島大隊仁道小隊の先任分隊長として克く小隊長を輔佐しつゝ勇敢に活躍し小隊の任務達成に大なる貢獻を爲した。然るに匪首文武閻王なる者王家店に休宿しある事判明し能島大隊は十日拂曉

を期し之を奇襲する事となつた。此時氏の所屬小隊は十日拂曉迄に王家店西方四粁の高地に進出して匪賊の退路を遮斷すべき命令を受け十日午前零時露營地を出發した。此際氏は兵五名を率ゐて進路上の斥候となり小隊の前方を該高地に向つて前進した。折柄陰暦七日の暗夜加ふるに豪雨沛然として咫尺を辨ぜず道路は泥濘膝を沒する狀況であつたが氏は克く進路を誤る事なく前進し途中梧桐河の障碍に會するや後續小隊の爲暗夜率先河中に入り渡河點を偵察し凡ゆる困難辛酸を克服して漸く午前八時三十分小隊をして所命の地點に進出せしむるを得た實に此時に於ける氏の活躍は賞讃に値するものであつた。小隊長は所命の地點到着と同時に長以下五名の斥候を其東北側高地端に進出して小隊の左側を掩護せしむると共に王家店方面より敗退し來る匪賊に對し警戒を命じた。午前九時五十分頃に至るや王家店方面に熾なる銃聲起り間もなく匪賊約三十名王家店より其西北方高地に向ひ退却して來た。之を見た小隊長は直ちに氏の分隊をして前に高地端に出せし斥候五名を併せ指揮し此敵を攻擊せしめた。氏は此命令を受くるや否や直ちに高地端に進出し今や退却中の匪賊に對して猛射を浴びせ忽ち其數名を斃したるも其他は間もなく高地の彼方に影を沒した。此頃更に王家店より敗退せる匪賊は其主力を以て梧桐河西側地區を北に向ひ又一部を以て小隊の占領する高地兩側の地區と西北方に頽雪を打つて潰走し大隊は近く之に尾して追擊しつゝあつた。斯くと見た高地の彼方に沒せし最初の敵は再び高地頂界線に現はれ大隊方面に向つて猛射を始めた。氏は此狀況を目擊するや部下を叱咤激勵し雨と降來る彈丸を物ともせず該高地頂界線に據れる敵に向ひ遮二無二攻擊前進したが敵は此猛攻に耐えかね數名の死傷者を遺棄して潰走した。次で午前十時五十分頃氏は率先高地上に達し退却する敵を猛射潰滅すべく追及中の輕機關銃に速に進出して敵を猛射する樣號令中偶々飛來せる一彈は無念氏の胸部中央心窩部を貫通した。豪氣の氏は其瞬間何事か部下を激勵するもの丶如く絶叫したが倒れ伏しながら幽かに　天皇陛下萬歳と二度迄唱へて遂に壯烈なる戰死を遂げた。併し小隊は氏等の奮戰に依り匪賊の退路を遮斷し能島大隊は遂に此の匪賊を殲滅したのであつた。

氏や幼時父を喪ひ家貧にして不幸の裡に生長せしが母に仕へて孝養至らざるなく而かも家運を挽回せんとして義務教育さへ完了せざるに熱心勉勵遂に下士官となり其成績亦優良にして大に將來を囑目せられて居た。然るに討匪の一戰に北滿の華と散りしは洵に痛惜の次第である。然かし支那事變勃發と共に滿蘇國境は愈々一觸卽發の危險を孕み內漸く雌伏せし匪賊は此の機に治安を攪亂せん事を企圖しつゝある際滿洲警備討匪の任は極めて重大にして其困難亦決して北中支戰線に活躍する者に比し優るとも劣るものではない。今や氏か壯容に接すべくもないが氏が一身を犧牲にして匪賊を討伐し之を潰滅して支那大陸に奮戰中の皇軍背後を安全ならしめ又滿洲國の治安に貢献した其の赫々の武勳は永く靑史に輝き其の英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵曹長に進級し次いで勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵曹長勳七等功六級　小林正治

## 勇敢機敏の分隊長巧に行動して其の任を全うし遂に蘆溝橋の華と散る

氏は兵庫縣城崎郡豐岡町の人にして父を友五郎母をリョと云ひ大正元年八月九日生れ未だ獨身であつた。資性溫良眞摯にして孝心深く諸人の愛敬を受けて居た。大正十四年三月豐岡尋常小學校を卒業して豐岡商業學校に入學し昭和二年三月卒業後家庭に在つて父の業を助けて居た。昭和八年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入隊し間もなく北滿に派遣されたが熱心軍務に精勵し下士官候補者に採用せられ其年十二月一日熊本陸軍教導學校に入學翌九年十一月卒業歸隊し十二月一日歩兵伍長に任官し爾後各地の匪賊討伐に參加して偉功を奏し勳八等に叙し白色桐葉章並に金貳百圓を賜はり翌十年十二月一日歩兵軍曹に進級し同十一年五月支那駐屯歩兵隊に轉屬爾後天津附近の警備及居留民の保護に任じて居た。氏は特に銃劍術及射擊技能に秀で賞狀を授けられし事數回に及んだ。

支那事變起るや氏は牟田口部隊の中隊兵器掛及給養係下士官として不眠不休出動準備を整へ所屬隊は七月十一日駐屯地を出發十三日西五里店に到着し高庄より一文字山を經て砂凸子附近に亘る線を占領して警備に任じた。當時我が軍は北平に於て支那當局と交渉中にして現地支那當局は我が要求に從ひしも之を實行せざるのみか衆を頼みて益々排戰的態度に出で氏の所屬部隊正面の蘆溝橋（苑平縣城）及衛門口附近を占領せる敵は十九日に至るや盛に我を砲擊し遂に氏の中隊長其他負傷するに至つた此の日蔣介石は對日決戰を全支に聲明するの擧に出た。玆に我が軍は遂に勘忍袋の緒を切り彼を懲するに決し所屬牟田口部隊は二十日午後二時を期し砲兵協力の下に蘆溝橋の敵に對し攻擊を開始した。斯くと見た蘆溝橋の城壁に據れる敵の第一線部隊は勿論其後方の迫擊砲及永定河右岸長辛店西北方高地の敵砲兵は一齊に猛烈なる射擊を開始し其の砲彈は物凄く我が軍の頭上に炸裂し加ふるに一文字山の西南砂凸子及平漢線に沿う地區よりする敵の小部隊殊に自動火器の斜射及側射は一文字山部隊の攻擊を妨害する事一方ならず殊に砂凸子東北の我が大隊砲小隊は危險を感ずるに至りし爲大隊長は氏に大隊砲小隊の掩護を命じ氏は直ちに兵十一名を率ひ雨下する敵彈を冒して一文字山南端踏切附近に急進し砂凸子方向に對して警戒し同時に大隊砲小隊長と連絡した。暫くして大隊砲小隊長より小隊は蘆溝橋東門扉破壞の目的を以て砂凸子北端附近に進出するに付掩護を頼むとの通報に接し氏は直ちに砂凸子西南端に向ひ前進を起した此の時突如砂凸子東北端に約十名の敵歩兵現出し氏は躊躇する事なく之を擊攘するに決し森林を利用して其背後に進出し至近の距離に於て急據猛射を加るや敵は狼狽し屍體を遺棄して潰走し分隊は直ちに砂凸子西南端を占領し以て大隊砲の同村北端附近への進出を掩護し爾後搜索警戒を嚴にし大隊砲小隊をして何等の顧慮なく十分に其の威力を發揮し遂に東門々扉を破壞せしむるに至つた。然るに午後三時頃飛來した敵迫擊砲彈は無念氏の頭上に炸裂し氏は腹部に其の破片創を受けて倒れた。氏は直ちに部下の介抱を受け次いで衛生部員の懇なる手當を受けたが既に人事不省氣息奄々たる裡に幽かに萬歳を口にしつゝ壯烈なる戰死を遂げた。併し氏の適切機敏の行動に依り我が大隊砲小隊は安全なりしのみならず遺憾なく其の威力を發揮し門扉を破壞し所屬隊は蘆溝橋の敵を擊攘して之を占領するに至たのであつた。

氏は鄕に在りては夙に模範青年として謳はれ其軍に入るや熱心精勵特に武技に長じ有爲の下士官として將來を囑目せら

れ今次事變突發して戰線に立つや滿洲討匪の尊き經驗と矜持とにより沈着剛膽適切機敏の行動を以て克く其の任を全うし所屬隊の戰勝に貢獻する處多大であつた。事變勞頭此の如き勇士を喪ふ洵に痛恨の極みである然かし氏の肉體は蘆溝橋の華と散りしも其赫々たる武勳は燦として皇軍戰史に輝き其英靈は不滅に生きて永へに護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に限りなき加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵曹長に進級し次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍砲兵曹長勳七等功六級　坂本俊夫

### 高射砲觀測班長勇敢克く卓越せる技能を發揮し遂に空爆に散る

氏は愛知縣碧海郡明治村の人にして父を鬼太郎亡母をたねと云ひ大正四年四月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性寡默沈勇勤勉にして責任觀念に富み師範學校在校中は野球の選手であり又和歌小品文に嗜味を有してゐた。昭和四年四月岡崎師範學校に入學同八年三月同校四學年修業の後退學し同九年一月現役志願兵として濱松高射砲聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして下士官候補者に採用せられ同年十二月野戰砲兵射擊學校に入校翌十年十一月同校を卒業し十二月砲兵伍長に任官し同十一年十二月砲兵軍曹に進級した。

支那事變起るや五弓部隊に屬し觀測班長として昭和十二年七月二十日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後所屬隊は天津附近の警備に任じて居たが七月二十九日未明敵襲を受くるや氏は逸早く機關銃を指揮して宿舍正門前に位置し之と應戰し勇敢奮鬪克く其威力を發揮して忽ち敵を擊退した。其の後所屬隊は唐山附近にありし敵の武裝解除に協力し永定河渡河戰に際しては其上空並に我が飛行場防空に任ずる等不眠不休神速なる活動を續け此の間陣地占領に際しては氏は機關銃を指揮して砲隊の直接警戒に任ずる等觀測班長としてのみならず勞苦危險を顧みず常に積極的に活躍して砲隊の任務遂行に寄與する所大なるものがあつた。

九月二十五日砲隊は堂々保定に入城し直ちに農學校々庭に陣地を占領し停車場並に其附近兵站諸施設の上空掩護に任じた。斯くて九月三十日には拂曉より滿天雲低く垂れ遠望を許さず。然るに俄然遙か上空に爆音を聞き刻一刻爆音は保定上空に近づいて來た。所屬隊員は夫々配置に就いて射擊準備は怠りなかつたが敵機か味方か暗膽たる密雲は全く機影を認むるを得ず隊員殊に氏等觀測班の者は異常の緊張を以て爆音の方向を見張て居た。午前六時四十分突如雲を破て降下せるは正しく敵機であつた其瞬間早くも停車場近く爆彈は炸裂した。氏は爆彈の轟きも知らざるもの〻如く神速機敏に正確なる目標諸元を測定し砲隊は間髪を容れず砲口火を吐いて急速なる猛射を集中し敵機は忽ち雲にかくれて逃走せしが更に續く敵機の投下せる一爆彈は氏の近く十米附近に落下炸裂し其破片は氏の腹部に命中して倒れた。部下は直ちに氏を介抱せんとするや氏は氣息奄々たる裡に「俺にはかまはず射擊を射擊を」と叫び部下を激勵しつゝ人事不省に陷つた。軍醫は敵機を擊退し氏は野戰病院に收容せられ手厚き治療を受けたが其の甲斐もなく十月三日午前七時二十分遂に名譽の戰傷死を遂ぐるに至つた。氏は其入院中も夢うつゝの裡に砲隊の射擊及部下の狀態を案じて屢々夫を口にして居たが死期迫るに及び五

弓部隊長は親しく「何か言ひ遺すことなきや」と問ひたるに「何もありません中隊長殿長々御世話になりました」……「天皇陛下萬歳」と微かに唱へて絶命した。

氏や特に觀測に優秀の技能を有し今次戰場に臨むや選ばれて高射砲隊の最も重要且困難とする觀測班長となり勤勉努力常に之が準備に遺漏なかつた。然るに開戰初頭北支は殆んど我皇軍の制覇する所となり氏をして其の雄腕を揮ふの機會に惠まれざりしも偶々保定に於て其空襲を受くるや一戰克く其卓越せる能力を現はししかも頻死の重傷を負ふも其職分に邁進して已まず實に是れ氏が盡忠至誠の發露と云ふべく征戰幾何もなくして北支の華と散りしは惜しみて尙ほ餘ある次第である。然かし一戰玉碎は百戰功なきに優る。其斃れて尙ほ已まざる精神と其武功とは万世不朽皇軍戰史に輝き不滅の英魂は永遠に護國の神と仰がれ神靈尙皇國の前途を守護すると共に一家の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日砲兵曹長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　飯田實

**職責觀念旺盛の指揮班員克く其の任を果して大册河畔に玉碎す**

氏は栃木縣足利郡筑波村の人にして父を忠幸母をテツと云ひ大正三年一月一日生で未だ獨身であつた。資性溫厚篤實而かも積極機敏の風あり且責任觀念の旺盛なる人であつた又親に仕へては孝心殊に篤かつた。大正十五年三月筑波尋常小學校を卒業したが在校中は成績常に優秀級長に推されてゐた。其後群馬縣館林町共立モスリン株式會社に入り昭和四年春より千葉縣市川市中山町工場に勤務してゐた。昭和十年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營願來軍務に精勵學術の成績優秀にして上等兵に進級し同十一年十一月善行證書下士官適任證書を附與せられて滿期除隊し其後は再び前記會社に復歸し勤務してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第六中隊に編入中隊指揮班員として八月二十九日勇躍征途に就き九月一日歩兵伍長に任官した。北支戰線到着後九月十八、十九日平漢線兩側地區の戰鬪に際しては十八日々沒より十九日拂曉に亘り中隊指揮班員として夜間困難なる中小隊間の連絡に活躍し中隊長の意の如く攻擊を遂行することを得しめた。

九月二十一日所屬中隊は主力に先んじて大册河の渡河點を確保すべき重任を受け午前二時行動を起せしが對岸の敵は蜿蜒長蛇の堅陣を構築し機關銃其他各種火器を配備し我攻擊に備へてゐた。而かも當夜は皎々たる明月中天に懸り晝をも欺く明るさなりしを以て我夜襲の企圖を祕匿することは頗る困難であつた。併かし將兵一同成島中隊長の弔合戰とばかり勇敢に敵前强行渡河を開始し河中に飛び込みしが大册河は水深胸部に達し其流れも速く足を浚はれんとする狀況なるに加へて敵は忽ち其堅陣より猛烈なる射擊を開始し其彈丸は篠つく雨の如く見る〳〵死傷續出するに至りしも一同之に屈せず對岸に迫り着き不取敢遑地に掩體を構築して突擊時機として各小隊との連絡に任じありしが戰況愈々交錯し混沌たる狀態を呈するに至るや猛火の下之に屈せず中小隊間を縱横に馳驅活躍し克く中隊長の企圖命令を或は自ら傳達し或は部下傳令を激勵して各小隊長に連絡せしめ、かくして中小隊長

の指揮を容易にし絶えず中隊戰力の統合、鞏固なる團結に留意し奮鬪努力至らざるはなかつた。次で愈々中隊突擊を敢行するや氏は中隊長と共に勇敢に突入遂に敵陣を奪取し次で直に占領せる陣地を死守すべく中隊長は部下の整理に着手するや氏は積極的に各小隊長と連絡し中隊長の意圖の如く各小隊配備の整理に奮鬪努力したが其の間無念右眼後頭部に敵彈を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して中隊は惡戰苦鬪殘員僅かに十七名となれるも氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲に依り遂に午前十時第一線を突破し同十一時主陣地を奪取することを得た。

氏は鄕にあるや至孝出で、戰陣に立つや忠孝一如指揮班長代理として彈雨の下死生を顧みず神速機敏常に戰機を看破し戰況混沌たる中克く中隊長を輔佐し中隊戰力を渾然一體統合發揮せしめ中隊の戰勝に寄與せし所甚大であつた。かくの如きは是れ指揮班たる重責の存する所身命を君國に献げて斃れて後已む盡忠至誠の發露と云ふべく征戰中途惜くも大册河畔の華と散りしと雖も其赫々の武勳と職責遂行の示範とは千載の下青史に輝き其芳名は萬古に流れ英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙皇國を守護し又一家の前途を加護照覽するであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　井上半之助

### 忠烈孝悌神に通ずる勇士滄州血戰の華と散る（義烈）

氏は兵庫縣美方郡兎塚村の人にして父を半七母をせいと云ひ大正四年四月一日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして敬神崇祖の念厚く特に親に對する孝心と弟妹に對する慈愛は村内の模範となつて居た。氏が入營の前年弟義郎が重病を患ひし時氏は父に嘆願して京都病院に入院せしめたが難病の爲遂に絶望を醫師より宣告された。氏も一時は失望落膽せるも決然として「よし！　此弟は我が手で助ける、熱と誠だと叫び義郎！　お前一人を苦しめぬぞ、私も苦んでやるぞ」と潔齊神助を祈る事一ケ月、弟の爲我が血を分けて輸血し漸く快復の緒に就きし折突如父も發病して同じ病院に入院の身となつた。氏は重患の父又衰へ果てたる弟の姿を眺めては人知れず熱い涙を絞つて居た。輸血に次ぐに輸血を以てし晝夜に亘る看病の爲氏の身體も次第に衰弱したが赤誠に燃ゆる氏は父と弟の爲なら此身を粉にしても看病に當る事正に八ヶ月醫師は微笑を湛え乍ら「愈々全快に近いです。至誠に動かぬものありませんな」と氏の篤行を絶讃した。其後間近に迫る入營期を控えて父子三名打揃ひ我が家に歸へるを得た。氏は昭和四年三月鄕里の高等小學校を卒業後直に兵庫縣立農學校へ入學し同七年三月同校卒業積いて神戸專修簿記學校へ入學して其課程を卒へ其後は家庭に在りて商業に從事したが在學間の成績優秀にして屢々表彰を受け相模競技スキーに堪能にして明朗快活の性格を兼ね備へ業務に當るや熱誠不屈不撓の氣慨があつた。昭和十一年一月鳥取歩兵聯隊へ入隊し幹部候補生を命ぜられ克く軍務に精勵し特に銃劍術に習熟して賞狀を授與せられ翌十二年一月歩兵伍長を以て滿期除隊となつた。其後は再び家業に精勵し在鄕軍人分會の幹部及青年團副團長並に青年學校指導員に推擧せられ熱心積極的に其向上發展に盡力し聲望敬愛益々高きを加へ其將來を深く囑目されて居た。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊に屬し森岡中隊の指揮班員として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は八月中旬

北支へ到着し降雨炎熱泥濘の難行軍を續けつゝ津浦沿線を南下し九月中旬に於ける馬廠攻撃に當りては所屬中隊は大隊の中央第一線となり敵陣地の中央を突破して驍名を謳はれたが氏は其際彈雨を冒して東奔西走し機敏に關係諸部隊間の連絡を確保し克く犬牙錯綜の陣内戰闘に中隊長の戰闘指揮を容易ならしめた。

所屬部隊は更に敵を急追して敵が津浦線上最後の抵抗線と恃める滄州の堅陣を攻撃する爲諸準備を整へた。九月二十日夜所屬部隊は他部隊と交代して中央第一線となり高官屯附近に於て翌二十一日人合庄の堅堡を攻撃の爲敵情地形の捜索を行つた。而して二十一日午後五時頃より友軍砲兵の砲撃開始と共に行動を起し午後六時より攻撃を開始した。此時敵の銃砲彈猛烈にして且附近の地形も沼澤水濠錯綜しありて連絡極めて困難であつたが氏は指揮班傳令長として大中隊間の連絡を緊密にして以て中隊長の指揮及中隊の行動を容易ならしめた。中隊は敵陣近く肉薄したが敵の陣地前には幅約四米深二米の大水濠横はり且水濠に沿ひ鐵條網を設けありて突撃行動至難なりしも午後八時頃遂に水濠を渡つて突撃を敢行し陣地の一角を占領した。此時敵は前面及左右の三面より銃砲火の集中射を浴びせ來りし爲其後の戰況進展せざるのみならず所屬大隊は苦戰に陥つた。されど拂曉までに人合庄南端を占領すべき命令に接し午後十一時三十分より第二次の夜襲を決行した。敵亦堅壘に據りて死守し戰闘愈々激烈となり遂に中隊長は重傷を負ひ小隊長二名も相次いで倒れ中隊は正に苦境に陥つた。氏は指揮班員の一名をして中隊長の介抱を命じ自らは敵の迫撃砲機關銃の猛射を意とせず手榴彈炸裂する中を物ともせず勇敢に活躍し其間顔面に破片創を受けたが毫も之に屈せず中小隊間の連絡を緊密ならしめ以て中隊の危急を脱せしむるを得た。續いて所屬部隊は二十三日午後五時頃より敵主陣地の鎖鑰たる姚官屯に向ひ攻撃の爲行動を起すや所屬大隊は中央第一線となり第六中隊は大隊の右第一線に所屬第八中隊は左第一線として展開し第五中隊は聯隊豫備隊として第七中隊は右第一大隊に增加隊として使用され午後六時三十分より攻撃を開始した。氏は顔面に負傷の爲後退を勸められたが之を却けて留まり尙克く中隊長代理を輔佐し隣接第六中隊との連絡に任じ進んで難局に處し其任務を遂行した。斯くて午後九時頃水濠の線に達したが水濠は幅六米深一米五〇河岸堤防の高さは三米ありて敵彈の飛來は宛ら嵐の如く一歩も進出するを得なかつた。此頃左右の大隊正面には騷音と共に喊聲が聞えた。やがて左右の大隊は突撃成功の旨所屬部隊本部より電話があつた。併かし左右正面の敗殘兵は氏の所屬大隊正面に集り來り火力を集中せるもの、如く大隊正面の敵彈は愈々熾烈を極め爲に所屬大隊の將兵は既に死傷續出して殘員僅少となつたが玆に大隊長以下悲壯の決意を以て午前四時煙幕を展張し續いて死の突撃を敢行した。此時氏は中隊長代理と共に率先中隊の先頭に立ち將さに敵陣地に突入せんとする直前惜しくも敵手榴彈の爲右足に爆創を受けた。併かし氏は尙之に屈せず再起して突撃を敢行せんとする一刹那再び敵手榴彈の爲頭部に爆創を受け遂に壯烈なる戰死を遂げた。而して所屬中隊の大部は戰死傷したが氏等の奮戰と尊き犧牲に依り午前九時過ぎ目指す敵陣地を占領するを得君ケ代吹奏と共に日章旗をひるがへすに至つた。此の時生存者は勿論尙餘命あり餘生あるもの皆涙と共に東天を拜し又氏等の尊き犧牲に感謝すると共に自己の尙餘喘を保つを心苦しく思つたとの事であつた。氏や孝悌世人の鑑となり其致誠神に通ずるの人陣中小閑を得ては詳細に戰地の狀況を認めて父に通報し常に發剌たる意氣と忠誠溢るゝが如き至誠自づから章句に躍動し而かも家族の健在を祈り續けて息まなかつた。又常に口癖の如く百戰功なく瓦全を恥ずと戰友に語る。蓋し氏の信念なるや一朝一夕のものにあらずして父祖傳來の尊き信念の轍承玉成せるものであつた。而して滄州の血戰に於ける所屬大隊は最も難局に遭遇せるものにして眞に惡戰苦闘の連續であつた。其間に處し氏は斃るゝも尙息まざりし氣魄を止めて玉碎した。噫忠孝兩全の勇士にして天晴れ皇軍下士官の龜鑑たり今や其壯容に接すべくもない。痛歎哀悼極まりなしと雖も氏の赫々たる武勳は皇軍戰史に輝きて其芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　春井賤夫

### 苗家の攻撃に彈雨の下決死火砲夜間射撃の標燈を設置して散華す

氏は兵庫縣佐用郡德久村の人にして實父を半兵衛實母をイトヱ養父を萬壽治養母をキリと云ひ大正二年二月十日に生れ妻ナミ子との間に未だ愛子はなかつた。資性溫厚孝心深く事を爲す勤勉にして責任觀念强く大事に臨みては沈着剛膽であつた。昭和二年三月小學校高等科を卒業し引續き縣立佐用農蠶學校に入り同五年三月同校を卒業其後家に在りて農蠶業に從事し同六年四月兵庫縣蠶業試驗場に入り同年十一月試驗場研究科を修了し同七年四月青森縣三戸郡川内村蠶業技術員に就職し同年七月退職同八年四月兵庫縣佐用郡平福町蠶業技術員に就職同八年入營の爲退職した。昭和八年十二月現役兵として姫路歩兵聯隊に入營し直に滿洲に派遣せられ吉林省掖河に駐屯同地附近の警備に任じ翌九年五月内地に歸還した。入營以來軍務に精勤學術の成績優秀にして同年六月には精勤章を附與せられ十二月には上等兵に進級し翌十年一月には伍長勤務を命ぜられ同年五月歸休除隊した。而して滿洲事變の功により勳八等に叙し瑞寶章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召沼田部隊第十一中隊に編入第二小隊擲彈筒分隊彈藥手として同月十一日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月下旬より九月十四日に至る馬廠附近の戰鬪に際しては三間房附近の警備に任じ九月中旬に於ける滄州附近の戰鬪に際しては馬落坡及張新庄附近の戰鬪に第一線として更に同月下旬より十月上旬に至る德州に向ふ追擊に際しては千庄劉八里庄小屯附近の戰鬪に第一線として何れも參加し歩兵小隊の重要火器たる擲彈筒々手と一體となり

毎戰勇敢に奮戰し克く其任務を完ふして小隊の攻擊を容易ならしめた。氏は其の後九月二十三日の夜襲時に於ける狀況と心境とを家鄉に通信して曰く「我等は決死隊となり大夜襲を行へり彈丸は雨霰する砲彈は炸裂するその中を胸に彈丸を抱き思ふ事なし、大君への一言敵地目がけて突入せり此時ばかりは死すと思ひしに、第一線にて日章旗を高く翻へしたる時の氣持只戰友と手と手を握り合つた儘暫し言葉もなき、之亦神佛の御蔭と感じずには居られなかつた云々」又「二十三日は死を覺悟致した爲大切な物は全部後に殘し」とあり死生眼中になく唯々大君の御楯となり決死突入奮戰せる狀況眼前に髣髴たるものがある。氏は十月一日伍長に任官すると同時に中隊長より過去の戰績に付賞詞せられ感激新たなるものがあつた。しかも其の日以後氏は第一小隊第四分隊長として活躍することゝなつた。斯くして十一月三日濟南に向ひ南進するに當り一書を家鄉に送りて「自分はきつと立派な働きを致します、分隊長として元氣にて君の爲働きます故一同御安心ありたし」と今後の決意を披瀝してゐた。

而て黃河北岸の掃蕩戰開始せらるゝや十一月八日所屬大隊は午前五時行動を起し午前九時張家に向ひ攻擊前進し先づ之を占領し引續き苗家の敵陣地攻擊に移つた。所屬中隊は大隊の右第一線となり氏の小隊は中隊の左第一線として攻擊前進を起し雨や霰と降り來る敵彈を冒し一進一止して薄暮頃敵陣地前至近の距離に達した然るに敵は村落に據り堅固なる圍壁に銃眼を設備し其要點には掩蓋及障碍物を設け且水濠を繞らし頑として動かず猛攻中遂に日沒となつた。依て大隊は本夜敵陣地を强襲して奪取するに決し其準備に着手し先づ重火器を以て

敵陣地を制壓する爲火砲の夜間射擊の爲の標燈設置を必要とするに至つた。午後十時過油井曹長は斥候長となり此の標燈設置を命ぜらるゝや氏は同斥候に加へられ勇躍して勇敢にも敵前四五十米にまで近迫し敵の盲目的十字火の中にありて泰然自若此決死的作業を了へ其重任を完遂して歸還せんとするや其途中無念頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし大隊は氏の勇敢剛膽なる行爲に依り有効なる火砲射擊を實施することを得敵を覆滅し突擊に成功して九日午前五時三十分遂に苗家を占領することを得た。

氏は鄕に在るや孝子たり其征旅に就くや素より忠孝は一道なり果して戰陣に立ち彈雨の下沈着剛膽擲彈筒彈藥手として筒手と協力して每戰敵を震駭せしめ分隊長としては常に率先陣頭に立ちて部下を率ひ掌握確實指揮的確分隊の戰力を發揮して遺憾なかつた。殊に苗家の攻擊に於て標燈設置の決死的作業を完遂せる如き實に是れ陣中屢々心境披瀝の如く一身を君國に獻げ任務に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。氏や征戰中途にして黃河の北邊に華と散りしは痛惜に禁へざるも其奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は万世不朽皇軍戰史に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると同時に遺族の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵軍曹勳七等功六級　長谷川喜藏

### 夜間斥候單身剛膽蘆溝橋の敵情を偵察し大隊の黎明攻擊計畫に貢獻す

氏は鳥取縣東伯郡榮村の人にして父を秀藏母を壽子と云ひ大正三年十月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順品行方正にして正義の觀念强く孝心頗る厚くして業務に勤勉にして責任觀念旺盛鄕黨同輩尊敬の的であつた。又生來馬を好み幼時より之に親しみ馬術に秀でてゐた。昭和五年四月鳥取縣立倉吉農學校に入校同八年三月同校を卒業したが小學校農學校共に優等生であつた。昭和十年一月徵兵として松江步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして同年十二月上等兵に進級同日伍長勤務を命ぜられ翌十一年五月支那駐屯步兵聯隊に轉屬通州に駐屯し七月北京に移駐した。而して六月には選ばれて下士官候補者となり同年十二月步兵伍長に任官し事變發生時に至つた。

支那事變起るや當時通州に演習の爲野營中の所屬山崎部隊第三中隊は七月八日早朝通州を出發先づ北平東郊列國射擊場に集合して大隊長の指揮に入り次で大隊は豐台に集結を命ぜられ同日正午同地を出發し行軍を以て豐台に急行した。氏は此急行軍に際し松井小隊に屬し一文字山に先遣を命ぜられ該小隊第二分隊長として率先垂範克く部下の志氣を鼓舞し遂に一名の落伍者も出すことなく目的地に進出することを得しめた。而して一文字山を占領中同日午後十時三十分斥候として敵情偵察の命を受けた氏は剛膽にも單身同地を勇躍出發し蘆溝橋部落東側樓門附近に近づき該地附近の敵情を仔細に偵察し午後十一時半頃歸來の上蘆溝橋部落東側城壁外には敵兵を見ざること及城門の狀態は何等防禦工事を施しあらず平時と變化なき旨を報告した。之により大隊長をして步兵砲による城門破壞の確信を得しめ其攻擊計畫の策定に多大の貢獻を爲した。而て所屬部隊が翌九日未明より蘆溝橋の敵を攻擊するに決するや中隊は大隊の左第一線となり蘆溝橋

部落東方約三百米の無名部落西端に進出して攻撃準備を爲すべく命ぜられた。此際氏は義に斥候として偵察せし地形を更に中隊長に委細報告し中隊長をして夜間にも拘らず遲滯なく適切なる攻撃準備位置を占領することを得しめた。爾後中隊の右第一線小隊の火線分隊長として此頃陣地附近には敵の砲彈熾に炸裂するも意に介せず勇敢に部下を指揮しつゝ自ら敵情を監視して小隊長を輔佐しつゝありしが忽ち飛來せる敵迫擊砲彈の爲無念右肩胛下部に破片創を受けた。然かし剛氣の氏は之に屈せず尙も部下を激勵して戰鬪を續けありしが出血甚しく敵情監視を繼續中深傷に氣力漸く盡き遂に絶命玆に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

因に氏の父は其戰死の報に接するや「名譽の戰死を遂げた事は一家の譽である。喜んで死んだ事でせう。あの子はおとなしい親思ひの子で任地から三日にあげず手紙をよこし云々」と述べてゐた。尙ほ同家は男兒四名全部が兵役關係ある譽の一家である。

氏は鄕に在るや至孝しかも學業共に其成績は優秀であり其軍隊に入るや頭角を現はし選ばれて幹部の班に列し其戰陣に立つや滅私奉公の念厚き父の子として忠誠に燃へ勇躍分隊長たる任務に邁進し其職責を完ふしたるのみならず其斥候に任ずるや行動剛膽觀察的確單に此一事に見るも氏の面目躍如として現はれ遺憾なかつた。天氏に一層の雄腕を揮ふべき時を借さず開戰日ならずして事變發端の地に華と散りしは惜みて尙餘あるも一戰玉碎は百戰功なきに優る。開戰劈頭氏の樹てたる拔群の武功は忠孝一如の示範と共に万世不朽軍民の鑑として仰がるべく不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵軍曹勳七等功六級　直原勝男

### 勇敢なる分隊長馬廠閘門の敵陣地に突擊中敵彈に殪る

氏は岡山縣勝田郡河邊村の人にして父を喜一母を繁野と云ひ大正三年十一月二十六日に生れ妻裕代があつたが愛子なく昭和十三年一月離別となつた。性溫良眞摯にして孝心深く事を行ふや熱誠不屈不撓の氣慨を持つて居た。昭和八年三月岡山縣立津山商業學校を卒業し其後は家庭に在りて家業に從事中同十年一月鳥取步兵聯隊に入營同年五月幹部候補生試驗に合格し昭和十一年一月步兵伍長を以て退營した。歸鄕後は再び家業に就き克く兩親に仕へて孝道を盡し靑年團第二支部長在鄕軍人會河邊村分會幹部等に推擧せられ鄕土の爲盡力せる所多大であつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召赤柴部隊に屬し福光中隊第一小隊第三分隊長として勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて北支到着後は津浦線に沿ひ南進し揚柳靑良王莊の殘敵を掃蕩し所屬中隊は獨力を以て同區間の鐵道警備に服した。九月二十六日揚柳靑を出發して靜海縣に到着し主力部隊に合し爾後陳官屯附近の敵陣地を攻擊の爲所屬大隊の右側衛に屬し前進中大超家窪に於て敵と遭遇するや氏は小隊の右第一線分隊を指揮し豪膽果敢なる行動を以て忽ち敵に大打擊を與へ之を潰走せしめた。

九月四日唐官屯附近の戰鬪に於ては聯隊豫備隊として軍旗護衛に任じて居たが唐官屯市街に進入の際敵の頑强なる抵抗を受くるや氏は火線分隊長として適切なる指揮と勇敢機敏の奮鬪とに依り敵を擊破し中隊の同市街占領に貢獻せる所甚大であつた。

九月九日所屬中隊は所屬大隊へ復歸し翌十日馬廠主陣地に對し攻擊を開始するに至つたが敵は馬廠河の障碍を利用して

約一ケ月の日子と數千の苦力を使用して最も堅固に陣地を構築し死力を竭して防戰に努めて居た。此時氏の所屬堀田大隊は全兵團の爲決死部隊となり諸隊に先ち馬廠河を渡河し同河南岸に確乎たる據點を占領し主力部隊爾後の渡河を容易ならしむべき重大任務を受けた。斯くて馬廠陣地帶攻略の成否は一に懸つて氏が大隊の奮鬪如何に在つた。大隊全員は悲壯の決意を固め心計りの別れの杯を傾けて意氣軒昂十日午後三時より行動を起した。大隊長は先驅第六中隊を指揮して乘船し

續いて第七中隊次て氏の所屬第八中隊の順序を以て午後四時三十分來着せる軍用艇に乘船し前屯乘船場を出發した。此頃よりして彼我の銃砲戰刻一刻激烈を加へ敵彈身邊に集中し來り文字通り烈しき彈雨を浴びた。今や支流を下りて本流への合流點に進出すれば待ち構へたる敵の掩蓋側防機關銃は銃身も熔けん許りに猛側射を浴びせかけて來た。決死の我が工兵操舟員は之に屈せず神速果敢なる力漕に依て午後四時四十五分頃對岸に取り着き福光中隊長の合圖と共に敵の陣地前三十米の河岸を占領した。同時氏の所屬小隊は大隊命令に依り左前方約百米なる閘門附近の掩蓋機關銃陣地を奪取すべき重要命令に接した。氏は小隊長若狹少尉の直後に驀進した。然るに不幸小隊長は重傷を負ひて倒れ氏は直に之に代つて指揮を執り前進を續けたが無念午後五時十五分飛來せる敵の一彈は氏の頭部を貫通し氏は前方五十米の掩蓋機關銃を睥みつゝ壯烈なる戰死を遂げた。其後小隊は悲憤の涙を拂ひて此敵陣を占領し所屬部隊は引續き壯烈なる突擊を反覆しつゝ午後十時馬廠一帶の陣地を奪取し敵は陣地を捨てゝ遠く西南方に潰走した。其後軍司令官は氏の奮戰せる戰跡に馬を進め故堀田中佐の後任大隊長より詳細なる激戰の狀況を聽取せられ懇ろに英靈を弔はれたとの事である。

氏や溫厚謹嚴克く分隊の團結を鞏固にし熱心小隊長を輔佐し勇猛果敢常に分隊の先頭に立ちて難局に當つた。故に參戰以來一隊將兵の深き信賴を受け模範分隊長として其敏腕を發揮して居た。然るに馬廠閘門附近に於ける一夕の嵐に此有爲にして精鋭なる分隊長を喪へるは痛惜禁ずる能はずと雖も氏が赫々たる勳功は天晴れ皇軍戰史に光彩を放ち其芳名は永く後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　大島傳一

### 慧眼克く戰機を觀破して偉勳を奏し遂に大名城に玉碎す

氏は栃木縣下都賀郡豐田村の人にして父を彦太郎母をサクと云ひ大正五年八月一日生で未だ獨身であつた。資性溫厚篤實而かも機敏事に臨み勇敢であつた。昭和九年三月縣立栃木中學校を卒業し十九歳にして現役兵を志願し其の年十二月宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして上等兵に進級し同十一年歸休除隊した。其後は家庭にありて祖先の名を揚ぐべく鋭意其家業に努力してゐた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第三機關銃中隊に編入第二小隊第七分隊長として勇躍征途に就き九月一日歩兵伍長に任官した。北支戰線到着後十月十一日より十五日に亘る石家莊元氏及瀋龍河附近の戰鬪に際しては常に敵彈下に勇敢機敏に活躍し奮戰大に努めたりしが特に十一日午後三時三十分滹河村北端を占領せる敵を攻擊せる際第一線攻擊部

隊たる第十中隊は逐次敵に向ひ攻撃前進中同地東側附近を占領せる敵の自動火器の猛射を受け前進頗る困難の狀態に陷つた。かくと見たる氏は戰況一刻の猶豫を許さゞるに顧み獨斷而かも機敏に之に機關銃を指向し急襲的射撃を集中し指揮的確忽ちにして見事之を撲滅することを得た。之が爲第十中隊は其の機を逸せず前進を起して敵に肉迫し遂に突撃を敢行して淀家村を占領することを得た。

十一月十一日所屬部隊は宋哲元最後の根據地たる大名城を攻撃した氏の所屬機關銃中隊は午後零時三十分より第一線歩兵に緊密なる協力を爲し攻撃を開始した敵は我が攻撃前進と共に一齊に熾烈なる銃砲火を浴びせ來り而かも我攻撃地區は平坦開豁何等據るべき地形地物なく忽ち死傷續出し前進頗る困難の狀態に陷つた。然し氏等機關銃隊は毫も之に屈せず我第一線歩兵の攻撃を惱ましつゝある敵の機關銃を求めて逐次之に急襲鐵槌的射撃を加へ或は撲滅し或は制壓し以て第一線歩兵をして午後五時には敵の第一線を突破し續いて夕刻には天空に聳ゆる大名城壁の至近距離まで近迫することを得しめた。而して愈々夕刻より城壁攻撃に移らんとするや氏の分隊は當初第一線突撃隊の援助を命ぜられたるも午後七時五十分工兵隊が城壁爆破に成功するや小隊長より城壁上に前進を命ぜられしを以て氏は勇躍先頭に立ち部下の志氣を鼓舞しつゝ分隊を確實に掌握し小隊長に遅れじと急峻なる突撃路を自ら機關銃の前脚を持ち勇敢に攀登した。而して將に頂上に達せんとせし時敵兵數十名城壁の西側地區にあるを知り之が逆襲し來りては突撃部隊は將に九仞の功を一簣に缺かんとする危機一髪小隊長の命を待つ間もなく獨斷以て急遽頂上に進出して銃を据え迅速機敏直ちに該敵に猛射を加へ敵を震撼せしめ以て遂に其逆襲企圖を破摧し城壁の頂上を確保することを得た。然し無念此瞬間敵彈氏の頭部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然れども所屬大隊は氏等の勇戰奮闘に依り大名城一番乘の榮冠を贏ち得たのであつた。

氏の戰陣に立つや歩兵の重要火器たる機關銃分隊長として率先勇敢部下の掌握確實終始擧止一體たらしめ射撃の指揮的確每射鐵槌的打撃を與へ而かも迅速機敏、戰機の看破、機宜の獨斷、常に偉功を奏し皇軍機關銃の眞價を發揮して遺憾なかつた。かくの如きは是れ機關銃分隊長たる重責の存する所身命を君國に捧げて斃れて後已む靈忠赤誠の發露と云ふべく征戰中途惜むべき分隊長を喪ひ痛恨禁ぜざるも其赫々の武勳と卓越せる分隊指揮とは千載の下青史に輝き其芳名は念願の如く父祖の名を顯はし萬古に薫りて盡きざるべく英靈は不滅に生き護國の神と祀られ神靈尙皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　織本清一

### 勇敢俊敏なる指揮班員每戰奮闘し竟に大册河畔の華と散る

氏は栃木縣芳賀郡眞岡町の人にして亡父を傳次郎亡母をキク養母をツネと云ひ大正三年二月十七日生で未だ獨身であつた。資性溫厚篤實情誼厚く事に臨みては勇敢にして責任觀念の强い人であつた。三歳にして實母と生別し養母に育てられ昭和三年三月眞岡小學校高等科を卒業續いて補習科に入りしも十五歳の時實父と死別し其の後家事の都合に依り昭和五年

四月退學して芳賀區裁判所雇となり精勵し日曜休日も職業戰線に立つて家計を助け傍ら刻苦勉勵十九歳の時專檢に合格した。又入營前青年團幹部に推され團の發展に盡瘁して居た。昭和十年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績亦優秀にして精勤章を受け特に武技に長じ銃劍術徽章を附與せられ同年十二月上等兵に進級し同日伍長勤務を命ぜられ同十一年十一月善行證書下士官適任證書を附與せられて輝かしき除隊をした。其後東京市大森區田中計器會社々員となり孜々として勉勵して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第三中隊に編入せられ中隊指揮班員として八月二十六日勇躍征途に就き九月一日歩兵伍長に任官した。北支戰線到着後九月十四日南公山の戰鬪に際しては大隊長自ら第三中隊を率ひ敵の退路に向ふや氏は夜間の連絡頗る困難なりしに不拘而かも敵彈雨下する中に於て不屈不撓萬難を克服して中隊長と大隊長間及小隊長との間の連絡を終始確保し克く中隊指揮機關たるの任務を完ふした。續いて翌十五日拒馬河の渡河攻撃に際しては敵火猛烈を極め第一線渡河部隊たる第二大隊の渡河意の如くならざりし爲中隊は一部を河岸に出して之が渡河掩護に任ずる樣命令を受け中隊の一部は直ちに河岸に進出した此の時中隊主力と第一線との間は二百米にして敵の掃射地帶であつたが氏は第一線と中隊主力間を往復すること數回克く連絡の任を完ふした。次で中隊は夕刻渡河し夜間續いて前進の途中不意に敵の猛射を受け中隊長は直ちに此の敵に對し夜襲を敢行した此時氏は中隊長と共に敵中に突入して敵の第一線を撃攘し更に敵後方の陣地に向ひ指揮班長落合准尉と共に勇敢に先頭に立ちて突入し奮戰格鬪敵を刺殺すること數人遂に中隊は敵の堅陣を占領した。而して中隊長は直に陣地確保の爲混亂せる態勢整理に着手するや氏は尚絶えず飛來する彈雨の間を奔走し以て大中隊間の連絡を全うし又中隊長の意の如く各小隊を配備せしめ以て中隊の陣地確保を迅速容易ならしめた。

九月二十一日所屬部隊は保定攻略の爲敵を急追して王谷莊堡附近大冊河の線に達した。然るに敵は大冊河の障碍を利用し水中には水雷を設け其後方には更に水濠鐵條網を繞らし數線に散兵壕を設け其各線を交通壕にて連絡する等堅固に陣地を構成して之を占領し以て我前進を拒守すべく構へてゐた。第一大隊は二ケ中隊を以て此陣地を夜襲して奪取すべき任務を受け直に之が準備に着手し其の夜即ち二十二日午前零時舫上部落を出發し河岸に攻撃準備を整へ午前二時三十分大冊河を渡河し敵陣地に迫りしが敵は逸早く我夜襲を察知し死物狂に我に猛射を浴せ來つた。氏の中隊は大隊の左第一線として攻撃せしが氏は此攻撃間彈丸雨飛の中にありて大中隊間の連絡を確保し殊に大隊長重傷を負ひ副官戰死し書記相續いで斃るゝや直に此狀況を中隊長に報告し且隣接中隊に通報し次いで中隊長より大隊の狀況を部隊長に報告すべく命ぜらるゝや部下一名を從へ勇躍任に就き篠つく雨の如き敵彈下を勇敢に部隊長の許に至り報告し無事其使命を果して中隊に復歸せしが其後中隊と共に攻撃前進中左股に敵彈を受けた。然かし剛氣の氏は之に屈せず尚も前進を繼續中更に右前方掩蓋機關銃より猛射を受けて腹部に貫通銃創を負ひ遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の選べれて指揮班員たるや神速機敏而かも勇敢不屈戰況慘憺たる中に克く中隊長を補佐して其の指揮掌握を容易にし中隊の戰力發揮に遺憾なからしめた。殊に率先敵陣に突入し或は傷つくも屈せず勇進する等唯々中隊の戰勝に向ひ邁進せし如きは是れ一に氏が忠誠の發露と云ふべく氏や征戰中途大冊河畔の華と散りしと雖も其赫々の武勳は千載に輝き其芳名は萬古に薫り英靈は不滅に生きて神靈尚皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　奥村太郎

### 獨斷敵の側防機關銃を撲滅し東邊庄の華と散る

氏は岡山縣小田郡中川村の人にして父を倉太郎母をつうと云ひ大正四年三月一日に生れ未だ獨身であつた。性溫良眞摯にして孝心深く兄弟仲も誠に麗はしかつた。又事に當るや熱心勉勵遂げずんば息まざる氣魄を持つて居た。昭和二年三月中川南尋常小學校を卒業後直に縣立矢掛中學校へ入學し同七年三月同校を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶けて農業に精勵して居た。同十一年一月岡山歩兵聯隊へ入隊し幹部候補生を命ぜられ熱誠軍務並に學術科の研鑽に努め翌十二年一月歩兵伍長に任官し退營した。同年七月大阪府巡査に採用せられ教習所に入所し大に勉勵成績亦良好にして其將來を囑目されて居た。

支那事變起るや同年八月應召赤柴部隊に屬し佐藤中隊第二小隊第二分隊長として勇躍征途に就いた。北支到着以來は津浦線に沿ひ南進したが北支は數十年來の大雨にて到る所道路泥濘脛を沒し極めて難行軍であつた。氏は懇ろに部下を犒ひ又之を激勵して行軍力の維持增進を圖つた。九月二十一日午前八時鐵路良王莊に到着直に中隊の右第一線とし畢庄子に向ひ前進したが此時前方より駈け來りし騎兵斥候の通報に依れば敵は意外の近距離に堅固なる陣地を構築し之を守備しある事が判明した。此敵は天津附近より驅逐せられしもので外國將校指導の下に大規模且優秀なる陣地補强工事を施し小癪にも我が精鋭の皇軍を迎擊せんとする氣構を示して居た。氏の所屬隊は斷乎攻擊に快し火蓋を切れば彼亦之に應戰し玆に津浦戰の序幕戰を展開した。氏は火線分隊長として勇躍猛攻を加へ午後四時頃畢庄子を占領し更に徐庄子の既設陣地に據り頑强に抵抗する約百名の敵を夕刻より攻擊した。此頃迫擊砲三門を有する約三百名の敵兵逆襲し來るを物の見事に大損害を與へて擊退し午後七時四十分完全に徐庄子を占領した。

翌二十二日所屬部隊は早朝より東邊庄の敵陣地を攻擊したが此附近一帶は高粱生ひ茂りて通視を妨げ又到る所沼澤化し友軍間の連絡は極めて困難であつた。敵は巧に地形を利用して既設陣地に據り何處に潛むやチェッコ機關銃の銃聲響しも息まず斜射縱射又側射の彈巢地帶に無念の齒がみをなして斃れゆく戰友等の姿を眺むる氏は必ず仇を取つてやるぞと歩一歩匍匐前進を以て敵陣地に近づき夜に入つた。敵は執拗にも逆襲して來たが素より物の數ならず氏は冷靜適切なる指揮を以て近寄る敵をば將棋倒しに薙ぎ倒して之を擊退し尙翌拂曉攻擊の爲敵陣地前の地形偵察を命ぜらるゝや氏は熾烈なる敵火を冒して水濠の狀態並に敵主陣地前の警戒陣地を詳細偵察して貴重なる報告を提出し又突擊陣地の構築に從事する等徹宵奮鬪を續けた。東天白む頃所屬小隊は東邊庄の東北陣地に向ひ猛攻擊を開始したが小隊の突擊實施に方り俄然敵の側防機關銃は小隊正面に對しひた擊ちの猛射を浴びせて來た。此狀況を目擊せる氏は憤然として獨斷部下分隊を提げて此敵に突入し白兵を振つて二三名の敵兵を串刺に刺殺した。あゝ阿修羅の如き此紛戰の一瞬時無念！一彈飛來氏は腰部貫通の銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。併かし所屬小隊は氏の機宜に適せる勇戰奮鬪に依り機を失せず敵主陣地に突入して頑敵

を粉碎し東邊庄占領の重要素因を作つた。

氏や鄉に在りては純朴農村青年の模範であり出でゝ聖戰に從ふや俊敏克く上官を輔佐し恩愛骨肉の情を以て部下を激勵し難局に遭遇するや率先垂範果敢なる行動を以て戰勝の途を開いた。寔に是れ皇軍歩兵下士官の模範とすべく又一般軍人の龜鑑たるものであつた。あゝ前途有爲にして忠誠の士を此一戰に喪ふ洵に痛恨哀悼極まりなしと雖も氏の赫々たる功績は皇軍戰史に光彩を放ち其芳名は不朽に輝はるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　渡邊孟男

### 分隊長として永定河畔に奮戰し戰機の看破機宜の獨斷は小隊の突擊を容易ならしむ

氏は栃木縣上都賀郡北犬飼村の人にして父を湯三郎母をヤイと云ひ大正三年三月二十九日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良實直處事積極的にして責任觀念强く大事に臨みては頗る剛膽であつた。昭和三年三月犬飼小學校高等科を卒業し引續き縣立宇都宮農學校に入り同六年三月同校卒業其後家業たる農業に精進してゐた。昭和九年徵兵檢査の際體格並に學業操行一般に優良にして他の模範たる故を以て時の縣知事より記念牌及賞狀を附與せられ同年十二月徵兵として滿洲獨立守備歩兵第十四大隊に入營黑河附近の警備に任じ昭和十年には九月より十二月に亘り洮南附近、錦州省北部、興安西省南部及熱河省の討伐に、昭和十一年には五月より昂々溪附近の警備に任じ九月より十一月に亘り洮南膽榆縣境附近嫩江左岸附近扶餘縣附近及索倫附近の討伐に參加し十二月より札蘭屯附近の警備に任じ昭和十二年三月滿期除隊した。在隊間は軍務に精勵學術の成績優秀にして昭和十年六月には精勤章を附與せられ同年十二月上等兵に進級し翌十一年三月伍長勤務を命ぜられ又特に輕機關銃の射擊に秀て輕機第二種射擊徽章を授けられ其除隊に際しては善行證書及下士官適任證書を附與せられ又滿洲事變の功により勳八等に叙し白色桐葉章を賜はつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第八中隊に編入分隊長として四月二十六日勇躍征途に就いた北支戰線到着後九月十三、十四日永定河畔胡林南方地區の戰鬪に際しては彈雨の下流速急にして水深胸部に達し而かも兩岸濕地帶の永定河を渡河し率先々頭に立ちて分隊を指揮奮戰し小隊の攻擊を容易ならしめた。

九月十五日所屬隊は拒馬河の線に達した。然るに敵は水深胸部に達し而かも急流の拒馬河を陣地前の障碍となし對岸に一連の堅固なる陣地を構築し我攻擊に應ぜんとしてゐた。氏の所屬中隊は大隊の右第一線中隊として午前十時より對岸の敵と戰鬪を開始するや氏は中隊の左第一線小隊の火線分隊長として彈雨の下沈着剛膽克く部下を掌握して的確なる指揮をとり小隊の戰鬪を容易ならしめつゝありしが愈々午後四時强行渡河に移るや敵彈益々猛烈を極め河川の障碍と相俟つて前進頗る困難なりしも氏は之に屈せず自ら陣頭に立ちて部下を叱咤激勵しつゝ勇敢に對岸に涉り部下分隊を部署中正面至近の壕內に敵兵あるを發見し爾後の戰鬪上之を奪取し置くの必要を看取するや敢然部下分隊を率ひて之に突入し遂に敵陣の一角を占領し部下を激勵し

つゝ之を確保し之が爲小隊爾後の突擊を容易ならしむることを得た然し斯くして奮戰中右後方より敵の背射斜射を受け無念壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏は曩に滿洲事變に各地に轉戰して功あり今次亦召されて戰陣に立つや彈雨の下勇敢に陣頭に立て分隊を率ひ掌握確實指揮的確常に遺憾なく分隊の戰力を發揮せしのみならず拒馬河右岸進出後に於ける戰機の看破機宜の獨斷は小隊戰勝の原因を爲したるものであつた。實にかくの如きは分隊長たる重責の存する所一身を君國に獻げて其職責に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。氏や參戰幾何もなくして惜くも拒馬河畔に散りしも奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は滿洲事變の勳功と共に万世不朽皇軍戰史に輝き英魂亦不滅に生きて護國の神となり尙も皇國を守護且一家の守護神ともなり老親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次て勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍鍛工軍曹勳七等功六級　片桐祐一

**高射砲隊鍛工長日夜奮鬪砲隊の任務達成に貢献し遂に保定の空爆に散華す**

氏は愛知縣北設樂郡御殿村の人にして父を勇作亡母をきくの養母をつると云ひ大正二年六月十二日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實頭腦明晰にして責任觀念强く業務に頗る熱心の人であつた。昭和三年三月粟代小學校高等科を卒業したが尋常六年及高等一、二年に成績第一位を占め優等賞及精勤第一等賞を受け尙尋常科卒業の際は郡賞を授與せられた。高等小學校卒業後は鍛工火造工となり昭和九年一月徵兵として濱松高射砲聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優良にして精勤章を受くること二回翌十年五月には上等兵に進級し同年十一月善行證書下士官適任證書を附與せられて滿期除隊し直ちに名古屋愛知時計電氣株式會社に入社し同十二年一月まで勤務して居た。

支那事變起るや氏は間もなく應召し五弓高射砲部隊に編入せられ鍛工として勇躍征途に就いた。七月下旬北支に到着するや所屬隊は天津附近の警備に任じ次て他隊と協力し太沽及北寧線上の重要施設を占領し更に唐山附近にありし約二三千人の敵をして武裝を解除せしめ九月中旬永定河畔楡垡鎭附近に於ける渡河戰に際しては其上空並に我が飛行場防空に任ずる等連日不眠不休の活動を續け此の間氏は鍛工伍長に任ぜられ日夜凡ゆる困難危險を冒して其の任を全うし次いで九月二十四日所屬隊は保定に向て前進するや途中觀測車故障の爲後方に留まりしに忽ち約三十名の敗殘兵より襲擊を受けた。此の時氏は段列長の指揮下に車輛直接の警戒に任じ沈着剛膽克く其の任を全うした。

斯くて所屬隊は九月二十五日堂々保定に入城し農學校々庭に陣地を占領して停車場並に兵站諸施設の上空掩護に任じた。同月三十日は拂曉より滿天雲低く垂れ遠望を許さず。然るに俄然遙か上空に爆音を聞きしが爆音は刻一刻保定上空に近づいて來た。所屬隊員は夫々配置に就いて射擊準備を整へて居たが敵機か味方か暗膽たる密雲は全く機影を認むるを得ず隊員は異常の緊張を以て爆音の空を見張て居た。午前六時四十分突如雲を衝いて降下せるは正しく敵機と認めた瞬間早くも停車場近く爆彈は炸裂した。砲隊は間髪を容れず砲口火を吐いて急速なる猛射を集中し敵機を西方に驅逐したが更に續く敵機の投下

せる一爆彈は砲側近く落下炸裂し此の時恰も號令傳達に砲側を疾驅中の氏は不幸頭部及臀部に爆創を受け一語も發する餘裕もなく壯烈なる戰死を遂げた。

氏は小學校より在隊間を通じ終始精勵恪勵而かも明晰なる能力を發揮して諸般の成績優秀衆の模範であつた。今次召されて戰場に臨むや砲隊鍛工長の重責を荷い高射砲其他兵器々材の機能保全に關し日夜精勵努力卓越の技能を發揮し其整備に些の遺漏もなく偶々敵機の來襲を受くるや平素氏の奮勵努力周到なる整備の結果は砲隊をして支障なく其任務を達成せしめて遺憾なかつた。氏や征戰幾何もなくして北支の華と散りしは惜しみて尙餘あるも皇軍高射砲の儼乎たる存在に貢獻したる赫々の武功は千載の下皇軍戰史に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日鍛工軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳八等功七級　谷川秀吉

### 決死の覺悟固く克く分隊長たる任務に邁進活躍し遂に馬廠戰に散る

氏は兵庫縣美方郡小代村の人にして父を豐造母をすみと云ひ大正四年十二月七日に生れ未だ獨身であつた。責性明朗活潑事を處する積極的にして責任觀念旺盛の人であつた。昭和四年三月鄕里の小學校高等科を卒業し引續き農業補習學校に入り翌五年小代村青年訓練所にも入所し同十年三月補習學校卒業と同時に青年訓練所の課程をも修了した。昭和十一年一月現役志願兵として鳥取歩兵聯隊に入營爾來熱心軍務に精勵し學術の成績優秀にして下士官候補者に採用せられ同年十二月熊本教導學校に入校せしめられた。氏は特に劍術に秀で大隊長より賞狀を附與せられた。

支那事變起るや長野部隊第三中隊に屬し第三小隊輕機第六分隊長として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。而て北支戰線に到着し九月六日には國村將校斥候に屬し敵陣地前水濠偵察の爲日沒後南孫屯を出發し先づ豫定の搜索據點に到達し更に斥候長は一名を引連れ挺身して愈々目的の偵察に着手すべく敵陣地前の水濠に飛び入るべき決死者を募るや氏は決

然として「自分が行きます」と志願した。しかし此偵察は夜間而かも地形不案内の爲殘念ながら目的たる水濠に到達するを得ず天明となり已むなく再擧を期し歸還したるも此一事を以て氏が如何に一死任務に斃れんと固く決意し居りしかを窺ふことが出來る。

九月九日所屬部隊は馬廠の前進陣地たる小王莊に對し攻擊を開始した。此の時氏の所屬第三中隊は當初大隊豫備として戰機の到るまで待機し居りしが九日夜第一線たる第一第二中隊の中間に增加を命ぜられ午後十一時行動を起した。當夜は月なく星明りの下を前進して第一線に進出し敵陣地前千米附近に簡易なる散兵壕を構築して拂曉攻擊の準備を爲した。翌十日東天漸く白む頃攻擊前進するや敵は小銃機關銃彈を熾んに浴せ來りしも我れは射擊することなく一意前進を繼續した。氏は中隊の右第一線たる小隊の火線にありて率先分隊の先頭に立ち躍進又躍進克く分隊を掌握指揮して勇敢に前進し遂に敵前四百米附近に達するや敵彈益々烈しく三方より猛射を受くるに至り殊に右前方高粱畑中の敵情は通視困難の爲全く不明であつた。此際氏は分隊を率ひ敵彈雨や霰と降り來る中を物ともせず身を挺して此不明な

る高粱畑を偵察し我に猛射を還しふしつゝある敵陣地の存在並に自動火器の位置を發見し速かに之を小隊長に報告して對應の處置を講ぜしめ又恰も其時移動しつゝある敵の自動火器を發長するや迅速機敏的確なる射擊指揮により之に猛射を浴せて見事之を撲滅し以て小隊の攻擊前進を容易ならしめ爾後一進一止停止間は有効なる射擊により敵を制壓し前進に當りては率先勇進しかくして逐次敵に近迫し敵前百米にまで達した。此頃敵火は一層激烈となりしを以て氏は分隊に各個躍進を命じ益々敵に肉薄せんとし率先前進を起さんとするや午前八時二十分頃無念左上膊左肩胛骨に貫通銃創を受けた。然し剛氣の氏は之に屈せず「俺にかまわず前進々々」と大聲に叱呼しつゝありしも重傷の爲身體意の如くならず衛生隊に收容せらるゝに至りしが其際後事を代理分隊長に託し後送せられ手厚き醫療を受けたるも遂に其甲斐なく十月一日名譽の戰傷死を遂ぐるに至つた。

氏は偶々時運に際會し其部隊は小なりと雖も待望せる一隊の長となり勇躍戰陣に臨むや素より一死盡忠の志固く其任務に積極果敢或は決死偵察を志願し或は挺身敵情を偵察し或は率先々頭に立ちて部下を率ひ或は機敏に敵の自動火器を撲滅する等其活躍は目覺しきものがあつた。殊に重傷を負ふも輕機分隊長たるの重任を忘れず後事を代理者に託せる如き氏の戰場行動は一に死を鴻毛の輕きに致し重責に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである氏や征戰幾何もなくして散りしは痛惜に禁へざるも一戰玉碎は百戰功なきに優る氏の樹てたる拔群の武功は万世不朽皇軍戰史に輝き其英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると共に一家の守護神ともなり老親の多幸を加護して已まぬことであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　竹中豐明

### 模範分隊長追恢の激戰に奮鬪し壯烈鬼神を泣かしむ（壯烈）

氏は兵庫縣城崎郡香住町の人にして父を新造母をきくと云ひ明治四十五年六月二十四日に生れ未だ獨身であつた。資性眞摯快活にして孝心深く友情に厚かつた。又事に當るや熱誠溢るゝ如く特に責任觀念强く遂げずんば息まざるの氣慨があつた。昭和二年三月香住小學校高等科を卒業し其後同七年十月まで漁業に從事し翌八年一月現役兵として鳥取歩兵聯隊に入營間もなく滿洲臨時派遣部隊に屬して渡滿し一面波十七里地葦沙河綏芬河黃王河子烏吉密等の各地に移動し討伐並に警備の重任を完うし功を以て勳八等白色桐葉章を賜はつた。氏は在隊間の成績優秀にして昭和八年十二月には上等兵に進級し同時に伍長勤務上等兵を命ぜられ尙翌九年十一月滿期除隊時には伍長に進級した。除隊後は東京目黑無線電信講習所に入所して約八ヶ月の修業を了し三等無線通信士の免狀を附與せられた。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊に屬し田卷中隊の第二小隊第六分隊長として勇躍征途に就いた。斯くて所屬部隊は津浦線に沿ひ南進し九月九日夜所屬中隊は馬廠主陣地の左翼要點たる小王莊の陣地奪取を命ぜられ午後十一時四十分姚家庄を出發し午前三時三十分を期して夜襲を敢行するに決した。氏は此際第一線の火線分隊長として勇躍攻擊部署に就いた。敵の陣地前には大水濠を設けて障碍を增强し三線配備の堅固なる陣地を李文白の指揮下に第三十八師に依りて守備せられ馬廠陣地は少くも半ヶ年は日軍を拒止するを得べしと豪語して居た。玆に中隊長以下は決死の覺悟を定め闇を衝いて行動を起した。氏は率先水濠に身を躍らして之を超え素早くも第一陣地を奪取し息つく間もなく第二陣地を攻擊したが敵の機關銃はそれと覺つてか氣たゝましい猛射を浴びせて來た。あゝ四邊は暗黑にして全く連絡が絶え中隊内でさへ中隊長

の掌握し得たる部下は僅かに小銃一分隊と輕機關銃二分隊に過ぎなかつた。大部は大水濠の線で多數の死傷者を生じ或は爾後の前進を阻止せられて居たのである。此時氏は敢然として當面の敵機關銃を撲滅し遂に第二陣地を占領し機敏に小王庄部落の頑敵を驅逐し之を占領した。此時優勢なる敵は前方及左右より逆襲し來りて氏等は敵の包圍を受くるに至つた。此重大危機に際し隣接の輕機關銃は水濠通過の際銃口より泥水入りて機能を害し發射するを得ず獨り氏の輕機關銃分隊の奮鬪に依りて群がり襲ふ敵部隊は殲滅的打擊を與へて午前四頃之を擊退し將兵一同感激の裡に東天を遙拜した。所屬部隊は續いて敵陣地帶の左翼據點たる流河鎭を攻略して鼓に馬廠激戰に於ける大勝の基礎を確立するを得た。

所屬部隊は之より津浦線上の關ケ原とも稱すべき滄縣の會戰を準備し九月二十二日より愈々壯烈極まる激戰を展開するに至つた。所屬中隊は二十三日午後六時頃まで聯隊豫備隊として控置されて居たが途中より待望の第一線部隊として人合庄東端附近を出發し夜襲の決行を命ぜられた。氏は部下分隊を率ゐて小隊長古川准尉の指揮下に行動し極めて困難なる泥濘地帶而かも嵐の如き敵彈を浴びつゝ率先敵陣地に肉薄した。部下の松本一等兵は忽ち右足に重傷をけて打倒れしを見たる氏は傍らの一兵に命じて介抱させたがその兵は可哀相な事をしたと同情の言葉を投げた。此時氏は大聲「かあいそうなは言ふ迄もない、そんな事で目的が達せられるか」と怒號し更に聲を落して兵の志氣に影響するぞ俺は涙をのんでるのだ！　と悟し尙彈雨の中に皆無事か誰々は居るかと部下を案じつゝ前進しやがて聲も高らかに「男命のすて所」の唄を唄ひつゝ部下を激勵した。所屬中隊は地形を利用して土手のかげに到着し暫く敵狀搜索中であつた。氏は敵線を一瞥したる後草株深く頭を垂れ一本の煙草に火をつけさもうまさうに吸ひ初めた。半ば程吸ひ終るや武內！　殘りだが火をかくして喫つてくれよと股肱と賴む武內上等兵に與へた。こゝは敵前五六十米、間もなく下る突擊號令！　飛鳥の如く躍り出でたる氏は不幸にして左前膊に貫通銃創を受けた。併し豪氣の氏は毫も之に屈せず尙も前進を續けたが續いて一彈下腹部を貫通し敵前十五米に於てどつと地上に倒れた。倒れても氏は尙部下を激勵して居たが次第に衰弱甚だしく武內上等兵の駈け寄るを認めおゝ武內か！　ヤラレタ殘念ダ後賴む、國の兄によろしくと述べたが早や虫の息ながら天皇陛下萬歲と奉唱し壯烈なる戰死を遂げた。瀕死の重傷者は殆んど口さへきけぬが普通なるに氏は以上の如く極めて明瞭に發言し得たるは眞に絕倫なる氣力であつて所屬中隊長さへ何とも氏の最後の莊嚴さに頭が下がつたと述懷して居る。所屬中隊は氏等の尊き犧牲に依り二十四日午前一時十分敵主陣地の第一線陣地を占領し之を確保する事を得た。

氏や夙に靈忠報國の志厚く體力氣力共に旺盛、頭腦亦明敏にして常に優秀なる成績を擧げ又長上を敬ひ後輩を慈しみ極めて情誼に敦かつた。今次聖戰に參加するや克く全智能を發揮し拔群の武功を奏し以て中隊戰勝の爲重大なる素因を與へた。寡に是れ皇軍步兵下士官の精銳にして又一般軍人の龜鑑たるものである。今や此忠誠勇武の士を喪ふ痛惜哀悼禁ずる能はずと雖も氏が赫々たる武勳は皇軍戰史に異彩を放ち芳名千古に流れ英靈亦不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　中野稔

## 優秀なる分隊長奮戰克く努め遂に刈莊の華と散る

氏は鳥取縣東伯郡上小鴨村の人にして父を清一母をさだと云ひ大正三年十二月二十三日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順にして着實義務心厚く事を爲す積極的にして進んで難局に當るの美風を有してゐた。尙ほ在隊間克己勤儉零細の給料を貯蓄し居りしが除隊に際し其丹精の五十圓を國防費として献金せる美談もある。昭和四年三月上小鴨小學校高等科を卒業し引續き農業公民學校に入り同七年三月同校本科卒業又青年訓所には同六年四月入所し其課程を修めた。昭和十年一月徵兵として松江歩兵聯隊に入營翌十一年五月支那駐屯軍に編入せられ在隊間は前記性格を發揮し屢々上官の賞詞を受け學術の成績亦優秀殊に武技に秀で多くの射撃賞及劍術賞を附與せられ昭和十二年三月善行證書を授けられ又特に拔擢せられて歩兵伍長に任官し洵に輝かしき除隊をした。

支那事變起るや昭和十二年七月應召福榮部隊第六中隊に編入第二小隊第一分隊長として同月二十七日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月二十九日所屬中隊は搜索隊となり大隊主力に先んじ午前六時三十分獨流鎭出發王口鎭を經て二堡に向ひ前進し小隊は其の尖兵となりて勇進中午前十一時五十分二堡東北三百米附近に於て敵に遭遇するや尖兵は直に交戰を開始し中隊亦展開して直に此敵を攻撃午後二時三十分敵を撃退し引續き王口鎭に向ひ前進中午後四時三十分孫家堡南方七百米の地點に於て再び敵と遭遇し中隊は大隊の左第一線となり攻撃して此敵を撃退した。次で三十一日所屬中隊は尙王に鎭道を南進中午前五時四十分王口鎭東北方約五百米に於て敵と遭遇小隊は中隊の中央小隊として此敵を攻撃し激戰の後ち午後に至り遂に敵を撃退した。以上累次の戰鬪間氏は尖兵にありては其最先頭にありて或は斥候となりて勇敢に前進し攻撃戰鬪に當りては卒先陣頭に立ちて部下を率ひ確實に之を掌握して的確なる指揮により分隊の戰力を發揮し奮戰大に努め其都度中隊の戰勝に貢献せし所甚大であつた。

九月六日所屬部隊は刈莊の敵を攻撃した。而して午前五時三十分中隊の豫備たりし第二小隊は敵の左側を包圍すべき任務を受けた。此の時氏は小隊長指揮下に激烈なる敵彈下に分隊を確實に掌握して率先々頭に立ち小隊長の意の如く勇敢に目的地點に向ひ行動し敵の側背百五十米に進出した。依つて小隊は間もなく突撃に移らんとして其準備中小隊長船越准尉壯烈なる戰死を遂ぐるや氏は此時壕外に立ち上り「小隊の指揮は中野伍長が執る」と大聲呼號して其指揮を明かにし次で部下小隊に的確に突撃部署を命令し克く小隊を掌握して間もなく突撃を敢行せんとし一應隣接部隊の狀況を見んものと上身を起すや其の瞬間無念左側腹部に盲貫銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂げた。時に午後三時三十分であつた。

氏や素と積極難に赴く氣骨の人其軍隊に入るや忽ち頭角を顯はし精神技能共に卓越し今次戰陣に臨むや果して彈雨の下率先部下を掌握確實指揮的確分隊長としては勿論小隊長代理として亦最後まで勇戰奪鬪所屬隊戰勝の素因を爲して遺憾なかつた。實にかくの如きは平戰兩時を通し終始一貫燃ゆるが如き忠誠の致せる所と云ふべきである。征戰中途にして氏の如き優秀の分隊長を喪へるは洵に痛惜に堪へざるも善戰奮鬪玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載に亘り赫々として皇軍戰史に輝き其不滅の英魂は永遠に護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　上野辰己

### 機先を制して敵を撃破し湯水鎭附近の激戰に玉碎す

氏は大分縣北海部郡津久見町の人にして亡父を福太郎母をクニと言ひ明治三十四年五月十五日に生れ妻シュウとの間に正彦俊吉宏巳美惠子の三男一女がある。資性溫厚篤實にして仕事に忠實且つ責任感念の强い人であつた。大正二年三月四浦尋常小學校を卒業爾後漁業に從事して家計を助け大正十年十二月現役兵として歩兵第七十二聯隊に入隊し熱心精勵成績優良にして翌十一年十二月には上等兵に進級し大正十二年十一月下士官適任證書竝に善行證書を附與せられて滿期除隊した。除隊後は家業に從事したが大正十三年より大分セメント株式會社出荷部に勤務し終始一貫熱心精勵して社內の信望を蒐め昭和三年セメント會社の出荷販賣を目的に株式會社碩田商會の創立せらるゝや氏は會社の推薦に依り碩田商會出荷部に轉じ大分セメント會社係りとして從事し模範店員の評を受けたが同九年七月更に選ばれて太平セメント株式會社係りを命ぜられた。然るに氏の職務に忠實にして卓越せる技倆は忽ち上役の認むる所となり暫くして同商會出荷部頭に選拔せられ益々其敏腕を發揮した。

支那事變勃發するや八月末應召河野（通）部隊大賀中隊の分隊長として勇躍征途に就き中支到着後十月七日氏は歩兵伍長に任ぜられた。而て所屬中隊は十月十日より重藤支隊長の指揮下にあつて梅丹宅附近の警備に任じた。此の時氏は第三小隊第六分隊長として折柄の豪雨に至る所膝を沒する泥濘地を前進し第一線として敵前近く陣地を構築し克く部下を指導して連日連夜至嚴の警戒を完うし續いて同月十四日よりは殆ど二週日に亘り都宅附近を守備し十一月十三日には附屬中隊は小野騎兵部隊長の指揮下に於て第一線となり劉家鎭を攻撃した。敵は頑强に抵抗し中隊は勇猛果敢に攻撃したが遂に日沒となり敵前近く夜を撤した。當時氏は雨下する敵火の下に勇敢に部下を指揮し絶へず敵情に注意して屢々小隊長に有利の報告を呈し而て所屬隊は翌十四日の拂曉と共に敵を猛攻し續いて突撃を敢行遂に劉家鎭を占領した。此の突撃に於ても氏は率先敵陣に突入し其の奮戰活躍は目覺ましきものであつた。

其の後所屬隊は陽水鎭附近に於て軍司令部の掩護警備に任じて居たが十二月十三日午前十時三十分頃約二三千名の敵は南京方向より孟塘方向に前進しつゝありとの情報に接し氏の中隊は大隊長より孟塘に急進を命せられ直に出發した。而て午前十一時二十分俄然孟塘南方甘家山の東南側に於て約四五百の敵と遭遇し中隊は直に展開し此の敵を攻撃した。氏の分隊は此の時中隊の最左翼にあつて攻撃したが敵の一部は中隊の左側背に迂回近迫しあるを目撃した氏は直に獨斷分隊をして此の敵を猛射せしめ遂に敵の企圖を挫折して中隊爾後の攻撃を容易ならしめ中隊は逐次敵を撃攘して孟塘の西北張家岡に前進該地を占領するを得た。然るに午後六時大隊長より氏の中隊は孟塘を確保すべき命を受け直ちに孟塘に向ひ前進し午後六時半頃孟塘に達せんとするや敵の一部隊は孟塘——龍渾鎭道を南進し將に孟塘に達せんとする所であつた。氏は之を目撃するや大聲以て小隊長に報告すると共に分隊をして之を射撃せしめ小隊又續いて散開して至近距離に於て敵に猛射を浴びせたる上小隊長以下全員敵中に突入し敵は算を

亂して潰走した。氏は此の時部下分隊を激勵して勇猛果敢に奮戰し潰走する敵に尾して追擊中無念胸部に貫通銃創を受け同時に敵の手榴彈創を受けて惜しくも壯烈なる戰死を遂げた。併かし小隊は氏等の奮戰と尊き犧牲に依り敵を潰亂し孟塘を確保したのであつた。

氏は幼時漸く義務教育を受けしのみなるも軍隊に入りては熱心精勵上等兵に進み下士官適任書を附與せられ郷に歸りては誠實勤勉會社員として大に將來を囑目せられて居た。而して今次聖戰に從うや勞苦を厭はず危險を冒して率先垂範部下爲に信服し指揮亦適切にして屢々優勢なる敵を擊破し殊に慧敏克く敵情戰機を看破して上官を輔佐し所屬隊戰勝の動機を作爲した。洵に是れ分隊長の模範とするに足るものである。然るに聖戰僅か半歲にして斯る勇士を喪へるは誠に痛惜の次第である。併かし氏の累次の武勳は赫々として皇軍戰史に輝き其の芳名は千古に傳うべく英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ尙皇猷を扶翼し奉り又一家殊に愛子の將來を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次いで勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　牛込隼人

### 模範的分隊長澤畔店夜襲に殊勳を樹て彰德城外に散華す

氏は群馬縣群馬郡東村の人にして父を百之輔母をジンと云ひ大正三年三月七日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順責任觀念旺盛而かも大事に臨み勇敢剛膽であつた。又部下に臨むに骨肉の情を以てし人情班長の異名ありし程にして部下爲に悅服してゐた。昭和九年三月前橋中學校卒業同十年一月徵兵として高崎歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀選ばれて下士官候補者となり同年十二月仙臺陸軍教導學校に入校翌十一年十一月同校を卒業し十二月歩兵伍長に任官した。

支那事變起るや森田部隊第三中隊に屬し第一小隊第一分隊長として昭和十二年八月十四日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十二日より十四日に亘る永定河畔辛庄附近の戰鬪に際しては渡河準備間下士哨として第一線警戒を完ふし又下士斥候長として敵情及河川の偵察に任じ有利なる報告を齎し十四日拂曉の對敵襲戰を始めに十六日には拒馬河畔東茨村附近の戰鬪に十七日は平漢東側地區南梁口附近の戰鬪に何れも第一線分隊長として敵彈雨飛の間に奮戰大に努めた。殊に十八日澤畔店附近の戰鬪に際しては午前十一時より行動を起し同十一時三十分より戰鬪を開始するや氏は猛火の下第一線分隊長として澤畔店南端に向ひ攻擊し敵前百米にまで肉薄し薄暮まで猛攻を續けしが敵は頑强にして容易に敵陣地を奪取することが出來なかつた。之が爲午後六時半隊員相集まりて水盃を交し誰一人生還を期するものなく悲壯の決意を以て夜襲することゝなつた。此の夜襲に氏は右第一線小隊の最右翼分隊長として勇躍前進し敵の監視部隊の占領せる突角前進陣地に對し率先々頭に立ちて勇敢に突入して之を奪取し引續き主陣地に對する突擊に際しては敵の重輕機關銃迫擊砲手榴彈の猛射により死傷續出するに至れるも屈せず部下を激勵鼓舞しつゝ陣頭に立ちて突入せしが陣地直前に構築しありし大戰車壕に遭遇し一時前進不能となつた。氏は直ちに部下と共に前崖に足掛りを作り巧に之を乘り越へ分隊を率ひて突擊を敢行し亂戰格鬪敵數人を殪し遂に之を奪取し更に息つく遑もなく圍壁を利用し强頑に抵抗する敵に對し輕機關銃を以て射擊せ

しめ自らは小銃手を指揮し勇猛果敢に突入して其圍壁を占領し次で部落内に入るや中隊の最右翼分隊長として各所に於て抵抗する敵を掃蕩しつゝ部落東端に進出した。其際執拗にも敵逆襲し來るや機敏に輕機を指揮して之に猛射を加へ殆んど之を殲滅し殘敵をして潰走の已むなきに至らしめた。氏は以上奮戰狀況の一端を鄉土に通信し其末尾に「また之れから大に頑張りますから御期待下さい」と今後の雄々しき覺悟を披瀝してゐた。其の後引續き九月二十一、二十二日は大冊河畔黃村附近の戰鬪。二十三、二十四日は保定附近殘敵掃蕩に。十月一日より十二日に亘りては石家莊附近十三日より二十六日に亘りては箱縣及漳河々畔の追擊戰鬪に。何れも第一線分隊長として奮戰し大に中隊の任務達成を容易ならしめた。

十月二十七日氏は斥候長として大隊が將來彰德附近に向ひ前進する爲の進路偵察並に洹河鐵道橋附近の敵情偵察を命ぜられ部下九名を率ひ午前八時勇躍出發した。而して午前十時頃彰德北方約二里にある郤街南方約五百米無名部落に達するや輕機を有する約三十名の敵と突如遭遇し忽ち其の射擊を受けた。敵は我に三倍せるも氏は任務達成上先づ之を擊退するに決し部下斥候兵を指揮し直ちに此の敵に對し攻擊前進し敵の猛射を受くるも巧に地形を利用して遂次敵に近迫し愈々敵前近く肉薄し決然陣頭に立ちて勇猛果敢敵中に突入し自ら忽ち敵兵二名を刺殺して其心膽を奪ひ一同奮戰之に殲滅的打擊を與へ擊退せしが氏は任務達成上之に追尾すべく續いて前進せんとした其の刹那無念胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し氏の一死以て偵察せる結果は中隊爾後の戰鬪を有利ならしめ戰勝の素因を爲した。

氏の分隊を指揮するや率先陣頭に立ち指揮的確部下を掌握して擧止一體たらしめ分隊の戰力を遺憾なく發揮し將兵一同の敬服賞讃措かざる所であつた。殊に任務達成の爲には優勢の敵を懼るゝことなく果敢攻擊せしが如きは所謂大勇の然からしむる所にして實にかくの如きは幹部たる重責の存する所身命を君國に獻げ死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露顯現と云ふべきである。聖戰尙前途遼遠の時氏の如き得難き分隊長を喪ひしは惜しみても尙餘あるも前後大小十數度の戰鬪に樹てたる拔群の功績は千載の下皇軍戰史に異彩を放ち共赫々の芳名は千古に謳はれ英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙皇國並に兩親遺族の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次いで勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

---

## 陸軍步兵軍曹勳七等功六級　野口英一

### 掃蕩班長として決死奮戰陽高城壁上に玉碎す

氏は埼玉縣北埼玉郡大桑村の人にして亡父を亦市母をしうと云ひ大正四年十月四日に生れ未だ獨身であつた。資性明朗活達處事積極的にして熱心勤勉不屈不撓の氣慨を有し上下の信望厚かつた。昭和三年三月大桑小學校尋常科を卒業し引續き縣立不動岡中學校に入り同八年三月同校を卒業昭和十年一月現役志願兵として麻布步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして下士官候補者に採用せられ同年十二月仙臺教導學校に入校翌十一年十一月同校卒業十二月步兵伍長に任官し直ちに滿洲に派遣齊々哈爾に駐屯し警備に任じつゝ初年兵教育に從事してゐた。此間昭和十二年三月趙尙志匪討伐の爲出動し永蹬子附近の戰鬪に參加した。

支那事變起るや小林部隊第六中隊に屬し第二小隊第一分隊長として昭和十二年七月末勇躍征途に就いた。斯くて北支戰線に到着し七月三十日より八月九日に至る間天津武淸開平附近の掃蕩に從事し八月九日より十二日に至る間は某步兵聯隊に配屬せられ第一線となり獨流鎭附近の戰鬪に參加後同地の警備に任じ其後長驅內蒙張北に轉進し八月二十日は外長城線主陣地內トーチカの晝夜に亘る攻擊に二十一日は制高地點トーチカの晝間攻擊に何れも第一線分隊長として參加し適切な

る指揮を以て勇戰奮鬪し小隊の敵陣奪取を容易ならしめた。次で八月二十二日長城線に沿ふて果敢なる追擊を實施し八月二十三日張家口に近づくや土井子附近に於て午後零時頃敵は長城線方面より兵力を增加し中隊を包圍する如き態勢をとりて出擊し來つた。此際氏は小隊長の命により分隊を指揮し左前方高地に進出し優勢なる敵其の猛烈なる敵火をも物ともせず奮然として部下を叱咤激勵しつゝ適切なる指揮を以て猛射を之に加へ敵に殲滅的打擊を與へて遂に其出擊を破碎し要點たる同地の確保を完ふした。續いて翌二十四日朱山東方高地の攻擊に當りては此日は第三小隊長の指揮に屬し小隊の右分隊として敵の左側背に進出し不意に敵に猛射を浴せ殲滅的損害を與へ驀て敵に肉薄突入して敵陣地の要點を占領して之を確保した。次で同日夜より大隊進擊に移るや其前進中南天門附近に於て再び優勢なる敵の包圍攻擊を受くるに至つた。此際大隊は南天門東方高地上を占領して激戰を交へ敵に多大の損害を與へ二十六日午前七時遂に之を擊退するに至つた。此間氏は沈着剛膽的確且機宜に適せる指揮をとり中隊の戰勝に貢獻せし所甚大であつた。

二十七日所屬隊は張家口に入城し九月六日天鎭の敵を擊滅し八日陽高城の攻擊となるや所屬中隊は大隊の左第一線となり午前十時より東門に向つて攻擊を開始し雨下する敵彈を冒して敵を制壓しつゝ勇敢に一進一止して城壁間近かに近迫した。同城は約千名の敵兵之に據り高さ約十尺厚さ三米の堅固なる棧壁を繞らせるを以て歩兵の攀登は困難であつた。依て野砲の主力を以て城壁の一部を破壞し其破壞により突入することゝなり一刻遲しと破壞口の完成を待つた。恰も午後七時一隊の突擊路は我砲彈により開設せらるゝや直ちに第五中隊の一部に引續き中隊長を最先に梯子を利用し城壁に駈け登れば小隊長東准尉に續いて氏も亦之れに遲れじと部下分隊を提げて續々登り城壁上の敵に突擊し此時まで尙頑强に抵抗しつゝありし十數名の敵を擊退して先づ城壁上の一角を占領し次で中隊は左方に向つて戰果を擴張すべく氏を長とする掃蕩班を先頭に逐次殘敵を掃蕩しつゝ東門城壁より南方へ三百米附近まで占領するに至つた。此時即ち午後八時三十分約二、三百の敵は優勢を恃みて我に逆襲し來りしが氏は第一線に於て勇猛果敢部下を激勵しつゝ部下掃蕩班を部署し的確なる指揮の下に機を失せず猛射を開始し又手榴彈を投擲せしむる等敵に多大の損害を與へ奮戰中無念頭部に盲貫銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して中隊は本戰鬪に於て戰死十四名重傷二十二名を出したるも氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより同夜半敵を擊退して陽高城を完全に占領することを得た。

氏志願して軍籍に入り偶々時運に際會して戰陣に立つや彈雨の下毎戰先頭に立ちて部下を率ひ勇敢奮戰指揮練熟分隊の運用機宜に適し小隊戰勝の因を作て遺憾なかつた。殊に陽高城壁上に於ける掃蕩班長としての決死的奮鬪は正に鬼神をも哭かしむるものがあつた。かくの如きは實に一身を君國に献げて分隊長たる重責に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。氏や征戰中途惜くも陽高城の華と散りしと雖も開戰以來小ながら一隊の長となり奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は萬世不朽皇軍戰史に輝き其英靈は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると共に老母の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次いで勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　野口小太郎

## 精悍なる戰車々長南京城外に奮戰し偉功を奏して殪る

氏は北海道上川郡比布村の人にして父を菊太郎母をかのと云ひ明治三十八年十月七日に生れ妻千代との間に綠智惠子の二愛子を擧げた。性溫良着實にして孝心深く一家の中堅として農業に精勵し又交際圓滿にして世人に愛敬せられて居た。大正九年三月比布小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて家業に從事しつゝ青年訓練所へ入所して所定の課程を終へ大正十四年一月旭川歩兵聯隊へ入營し成績優秀にして在營間伍長勤務上等兵を命ぜられ翌十五年七月下士官適任證書を附與せられ歸休除隊となり再び家業に從事して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召矢口戰車隊に屬し第二小隊第二車長として勇躍中支方面への征途に就いた。斯くて江南到着後は先づ常熟市街の揚蕩に從事し十一月二十四日東亭鎭東側の敵陣地の攻擊に方りては午後三時沈宇住基を出發し第一線部隊を超越し敵前四十米に近迫し以て敵自動火器を制壓し午後四時二十分友軍歩兵をして此陣地を占領せしめた。

同月二十六日無錫附近の戰鬪に於ては中隊長の指揮下に午前十一時頃無錫東端陣地を强行突破し無錫停車場北端に進出するや前面の道路上並に兩側家屋の空地に敵兵充滿して居たが之を猛射して潰亂せしめ更に敗走する敵を蹂躙して殲滅的の打擊を與へた。之が爲敵は豫め準備せる橋梁爆破も既設陣地に據る其暇もなく周章狼狽支離滅裂となつて姿を消した。此頃馬巷――梅園道に沿ひ數千の敵兵退却中なるを發見し所屬隊は隼の如く之に突進し猛射を加へ之を潰走せしめ更に反轉して無錫――江陰道を北進し敵の背後より附近の敵を攪亂し無錫北方約二里にある旺莊に於て品川隊と合し前面の敵を





攻擊して大打擊を與へ命に依り無錫に反轉し同地に蝟集せる敵を擾亂の上午後七時二十分集合地に歸還した。此間終始優勢なる敵中に於て戰鬪せるに拘らず氏は第二車長として沈勇豪膽なる指揮と精到なる射擊威力とに依り壓倒的の戰果を收め威風凜々眞に邊りを拂ひ全く敵の戰意を失はしむるに至つた。

所屬部隊は十二月二日より南京附近の戰鬪に入つたが四日正午稍々前氏の小隊は天王寺――句容道の道路偵察に任じ前進中氏は附近の敗殘部隊を適時射壁して偵察行動を容易にし八日淳化鎭東側の敵主陣地の攻擊には午後二時第一線歩兵の線を超越して敵陣地に肉迫し先づ掩蓋に據る敵を壓倒沈默せしめ何等の損害なく友軍歩兵をして同陣地を占領せしめた。翌九日光華門附近の戰鬪に於ては中隊長の指揮下に午前九時半七甕橋の集結地を出發して本道上を驀進し南京城西部光華門の南方約五百米に在る防空學校へ到着した。此時氏は中隊長の命に依り旅團司令部への報告及連絡の任務を受け出發し途中猛烈なる敵の彈雨を浴びつゝも毅然として任務を全うして歸還し午前十一時十分防空學校出發主力と共に光華門を距る百米に近迫し約三十分間に亘り鐵條網の破壞射擊を行ひ完全に突擊路を開設し更に城壁に據る頑敵を制壓しつゝ二回に亘る友軍工兵部隊の爆破作業を完了せしめた。而して正午稍々過ぎ防空學校に歸還したが敵兵約四五百名飛行場方面より光華門方向に移動中なる情報を得即時出動京和橋附近に差しかゝるや敵兵敗走し來りしを認め之に猛射を浴びせて大損害を與へ遂に西方に潰走せしめた。次で飛行場附近に在りし我が山砲小隊の救援を命ぜられて同方面へ出動し敵約百名を潰

滅して山砲小敵を收容し更に京和橋方向に退却する敵を猛射して之に甚大なる損害を與へ防空學校へ歸還した。其後休息の暇もなく中隊は工兵學校方面の敵情捜索を命ぜられ出動した。此時敵の一縱隊を認めたが所屬中隊は敵の砲火を浴びつゝ驀進し此縱隊に猛射を浴びせて之を潰走せしめ更に掩蓋に據る敵を猛射し所望の效果を收め偵察の任務を全うして午後四時半防空學校へ歸還した。此日晝間目ま苦しき活躍に氏は終始豪膽機敏に行動し中隊戰鬪に寄與する所至大であつた。

翌十日京和橋附近の戰鬪に方り氏は小隊長伊藤中尉の指揮下に彈藥輸送を命ぜられ午前八時所要彈藥を被牽車に積載を終り七甕橋を出發し途中京和橋附近に於て敵の射擊を受けたるも之を擊破し更に城壁より砲擊する被彈地帶を縫ひつゝ午前八時三十分防空學校に到り山砲大隊に之を交付し午前九時二十分學校を出發したが校門を出づるや再び狙擊砲彈を受け其爆煙の爲通視困難となり且京和橋上の障碍の爲行進速度遲滯せる時敵の速射砲彈は遂に後方扉を破壞し氏の左腹部に致命傷を與へ「無念」の一語を名殘とし壯烈なる戰死を遂げた。

氏や鄕に在りては溫良着實の孝子たり出でゝ軍務に服するや誠實熱心頭腦明敏にして優秀なる成績を擧げ今次聖戰に參加するや快速部隊に編入せられて江南戰線に活躍し威風堂々縱橫に快腕を發揮し向ふ處敵影潰え友軍諸兵種の犧牲を殆んど皆無ならしめて南京城に殺倒し殆んど不眠不休の奮鬪に依り攻擊準備に偉大なる貢獻を呈した。蓋に是れ皇軍戰車隊幹部の精鋭にして又一般軍人の龜鑑であつた。斯かる精悍有爲の士を喪へるは痛惜哀悼を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ江南戰史に異彩を放ち其の芳名は後世に謳はるべく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子等の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次いで勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵軍曹勳七等功六級　文垣信次郎

### 大敵を一機關銃に引受けて戰勝の端を拓き黃河北岸の華と散る（壯烈）

氏は兵庫縣城崎郡三方村の人にして亡父を太一郎母をこけと云ひ大正四年九月十二日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして孝心深く交際亦圓滿にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和五年三月鄕里の高等小學校を卒業し其後は家庭に在りて父兄を扶け家業に從事して居た。昭和十一年一月現役兵として鳥取步兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を擧げ上等兵候補者を命ぜられ翌十二年六月上等兵となり同時に第二年度下士官候補者に採用第三機關銃中隊へ編入せられ益々其手腕を發揮し其將來を囑目せられて居た。

支那事變起るや間もなく赤柴部隊に屬し坂口機關銃中隊の指揮班傳令として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來所屬部隊は津浦線に沿ひ南進し九月上旬には馬廠附近の戰鬪に參加し九月十三日より更に滄縣附近の會戰を準備した。所屬中隊は人合庄の敵陣地を攻擊する爲九月二十一日午後四時行動を起したが附近一帶の地形は泥濘膝を沒し行動甚だ困難であつた。此際氏は機敏に進路を偵察して中隊を誘導したるのみならず敵彈雨飛の下に在りて數線の水濠を超え碍碍物を突破して中隊長の命令意圖を各小隊長に傳達し以て中隊長の戰鬪指揮を容易且確實ならしむるを得た。特に二十四日拂曉所屬中隊が決死の攻擊を敢行せんとするに方り第九中隊との連絡を命ぜらるゝや氏は未明四邊尙暗黑の中而かも敵が最後の抵抗を試みて亂射亂擊の彈巢地帶をも意に介せず勇猛果敢なる行動を以て第一線に馳驅し機宜に適する連絡の目的を達したが其結果第九中隊正面に於ける所屬機關銃中隊の火力運用は極めて適切に行はるゝに至つた。其後所屬中隊は姚官屯驛の南方千米附近に進出するや約四五百名の敵は姚官屯南側方面より所屬中隊の側方に近迫し來れるを逸早く發見せる氏は

之を直に中隊長に報告して中隊の危機を免がれしめた。即ち中隊は敵前二十米に銃を据えて之に殲滅的大打撃を與へ遂に之を撃退し得たのであつた。此際氏は肉迫し來りし敵より手榴彈を投げつけられ右上膊に貫通破片創を受けたが豪氣の氏は之に屈せず尚任務を遂行して居た。之を認めし中隊長は後送を拒む氏に命令を以て入院せしめ加療の結果幸にして快復し十月十六日退院鄭家口に於て所屬中隊に追及するを得た。尚氏は十月一日附を以て伍長に任官した。

所屬部隊は十一月上旬以來黄河北岸地區の掃蕩戰に參加するに至つたが當時山東軍は德州奪回の目的を以て北上し臨邑附近に進出せりとの情報に接し速かに之を偵察せる結果敵部隊は未だ其兵力の集結を完了しあらざるを知り所屬部隊は沼田部隊の先遣隊と協定し沼田部隊は北方より敵部隊の先頭を壓迫し所屬長野部隊は十月十二日夜中に長驅大迂回を以て清涼店に進出し敵の背後より之を挾撃する事になつた。氏は退院復歸後は第六分隊長を命ぜられて居たが此夜部下は絶食と猛烈なる夜行軍の爲疲勞其極に達し動もすれば落伍せんとしたが氏は部下を助け且之を激勵し甲斐々々しくも自ら馬に水飼を與へつゝ一兵一馬の落伍も出さず東天白む頃清涼店東方約二粁の閻店に到着するを得た。此時附近の敵情地形を視察するに見渡す限りの大平野で朝靄の中に石庄の部落が浮ぶのみであつた諸情報を綜合して清涼店の北側及同村の北方約二吉米に在る石庄部落には各一部の敵が陣地を占領し又敵の乘馬隊は石庄の東方約三吉米の羊店方向に移動中なるを知り所屬部隊は直に清涼店及石庄方面の敵を攻撃するに決し所屬機關銃中隊は氏の所屬第三小隊を基準とし勇躍閻店北側地區を北方に前進した。氏はおお見よ！　支那軍め！　吾等の前進を知らずに石庄から乘馬隊があんなに右の方に前進してるではないか！　と部下を激勵し「早駈け」と令して無名部落の北端に進出して銃を据え俄然猛烈なる火蓋を切つた。軍馬も乘馬者も見る見る斃れて伏屍累々進路を塞いで仕舞つた。此有様を知つた石庄附近の敵は氏等の中隊を目かけて猛射を浴びせて來た。同時に石庄の北方部落たる黄王庄より約五六百名の敵部隊が急速な歩度で石庄に向ひ前進して來た。氏の分隊は直に石庄東側約百五十米の道路附近に躍進を命せられた。隣分隊の第五分隊も間もなく躍進し共に所命陣地に到着したが敵は之に氣附かず依然石庄に向ひ前進中であつた。「撃て」の號令一下小隊の猛烈なる斉射を受けて敵は周章狼狽蜘蛛の子の如く散つた。併し間もなく此敵も散開隊形をとつて我に向ひ應戰し石庄並に羊庄の敵も亦之に協力して三方より氏が所屬小隊に向ひ必死と集中火力を浴びせて來た。氏は之に屈せず目標を指示して誤らず奮戰中巧に射撃陣地を變換して損害を避け更に適切機敏なる射撃指揮に依り大敵を一銃に引受け意氣昂然其間所屬大隊の戰鬪の進展に著しき貢献をなしたが新目標を確認せんと伸び上りし瞬間一彈胸部を貫通して萬歳の奉唱も口の中午前十時一分遂に護國の神と神去つた。

氏や奮つて身を軍籍に投じ至誠奉公の信念鐵石の如く熱誠忠實克く軍務に精勵し常に上官を敬ひ戰友及部下に敦く而かも難局に當るや率先身命をも賭し遂げずんば息まざるの氣概があつた。果然聖戰に參加するや平素鍛錬せる全智全能を發揮して所屬部隊の戰勝獲得に重大なる素因を與へた。寔に是れ皇軍歩兵下士官の模範たるのみならず一般軍人の龜鑑たるものであつた。今や氏が颯爽たる壯容に接し得ざるは痛恨哀悼を禁じ得ざるも其の赫々たる武勳は皇軍戰史に光彩を放ち芳名永く後世に謳はれ不滅の英靈は護國の神となり神靈尚も皇軍並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵軍曹勳七等功六級　海老原作治

## 勇敢有爲の分隊長拒馬河畔に奮戰偉功を樹てゝ玉碎す

氏は栃木縣河内郡吉田村の人にして父を藤三郎母をタメと云ひ明治四十四年三月十八日生で未だ獨身であつた。資性快活にして勇敢敏捷特に劍道に長じてゐた。又友情厚く部下に對しては溫情に富み其敬愛を受けてゐた。大正十三年三月吉田尋常高等小學校を卒業引續き縣立石橋中學校に入學し昭和三年三月同校卒業昭和七年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營熱心軍務に精勵し特に銃劍術に長じ同年六月歩兵學校に分遣せられ十二月上等兵に進級翌八年六月原隊に復歸し七月滿洲に出動泰安に駐屯して同地附近の警備に任じ同年十二月伍長勤務を命ぜられ同九年五月内地歸還歩兵伍長に任官し滿期除隊した。而して滿洲事變の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり除隊後村の青年團磯部支部長並に村青年團副長に推され居村の中堅となり率先垂範村青年の教導に盡瘁し團發展の爲寄與せし所多かつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第三中隊に編入第二小隊第一分隊長として勇躍征途に就いた。而して北支戰線到着後九月十三、十四日檢埜鎭南方永定河の渡河戰鬪に際しては所屬中隊は聯隊豫備となり軍旗の護衛に任じ九月十四日夕永定河畔より敗退せる敵を急追中南公由附近に於て敵と衝突するや聯隊豫備たりし中隊は大隊に復歸し大隊本部と共に敵の退路を遮斷すべく南公由西端附近に迂回し全く敵の背後に進出した。此際氏は斥候長となり敵情地形の偵察を命ぜらるゝや勇躍任に就き間斷なき彈雨の中克く斥候兵を指揮し機敏而かも剛膽なる行動により克く所命の任務を完ふし中隊爾後の行動を有利ならしめた。

九月十五日所屬隊は揚家屯附近拒馬河の線に達し渡河攻擊を開始するや敵彈猛烈を極め第一線部隊の渡河意の如くならざりし爲中隊は各小隊の第一第五分隊を河畔に出し第一線の渡河掩護に任ぜしめた。氏は命を受くるや輕機關銃を率ひ猛烈なる彈雨を冒し渡河掩護に適當なる地點まで進出し的確なる射擊指揮に依り猛火を敵に注き我渡河を妨害する敵を制壓し以て主力の渡河を容易ならしめ次で午後九時頃大隊は渡河を終り對岸に集結し午後十一時再び前進を起すや又々敵の猛烈なる射擊を受けたるも之を冒して敵に近迫し遂に突擊して北相北端に進出するや三方より猛射を受けたるを以て中隊は之を擊滅して部隊主力の進出を容易ならしむべく前面の敵に對し夜襲を敢行するに決し攻擊前進を開始した。此際氏は小隊の先頭に在りて克く分隊を指揮掌握し部下を激勵しつゝ敵前至近の距離に近迫し從容自若突擊の機を窺ひつゝありしが愈々中隊突擊に移るや率先敵陣に躍り込み忽ち敵の數名を刺殺し奮戰以て同地を占領し更に中隊は右方に轉じて敵の背後に突擊するや此頃死傷續出せるも氏は之に屈せず益々部下の志氣を鼓舞し奮戰亂鬪群がる敵を逐次刺殺しつゝ壯烈なる白兵戰を交へつゝありし時無念胸部に貫通銃創を受け遂に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。併し中隊は氏等の勇戰奮鬪に依り夜襲に成功し主力の進出を容易ならしむるを得たのであつた。

氏は鄕に在るや率先垂範居村の中堅となり出でゝ戰線に立つや良民是良兵其軌を一にして率先部下を率ひ頗る勇敢掌握確實指揮的確常に分隊の戰力を遺憾なく發揮し殊に突擊に際しては陣頭に立ち劍道の特技を揮つて鬼神の活躍を爲し以て敵の心膽を寒からしめた。かくの如きは分隊長たる職責の存する所身命を君國に獻げ斃れて後已む盡忠至誠の發露と云ふ

べく實に下級幹部の範とすべきである。征戰中途氏の如き有爲の分隊長を喪ふは痛恨盡きざるも氏や曩に滿洲事變に功を樹て今次亦赫々の武勳を奏し興亞の礎石となつたる拔群の功績は千載の下靑史に輝き芳名は千古に謳はれ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙皇國を守護し一家の前途に加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵軍曹勳七等功六級　靑木治雄

### 外長城縣夜襲に偉功を樹て惜しくも集團地雷に玉碎す

氏は埼玉縣大里郡男沼村の人にして父を治一郎母をしげと云ひ大正三年四年二十八日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚而かも剛毅果斷の風あり責任觀念强く又親に對し孝心厚く友情に富み軍隊に於ても上下の信賴頗る厚かつた。昭和二年三月男沼小學校高等科を卒業し續いて埼玉縣立熊谷農學校に入り同七年三月同校を卒業した。小學校より農學校卒業まで學業の成績は優秀にして殊に柔道は初段であつた。農學校卒業後は家業に從事しつゝ傍ら男沼靑年團副團長として團の發展向上に盡瘁してゐた。昭和十年一月徵兵として麻布步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして下士官候補者に採用せられ同十年十二月仙臺教導學校に入校せしめられ翌十一年十一月同校卒業步兵伍長に任官し同年十二月駐滿の原隊に復歸し齊々哈爾に駐屯警備に任じてゐた。氏は特に武技に秀て射擊劍術共に優等徽章を附與せられた。

支那事變起るや駐滿小林部隊第五中隊に屬し第二小隊第一分隊長として昭和十二年七月末勇躍征途に就いた。而て北支戰線に到着後父宛書信の一節に「元氣旺盛初陣の喜びに浸潰してゐます。日頃の御教へに遵ひ本務の遂行に萬全を期して戰はん覺悟何卒御安心を乞う」とあり言簡なるも勇心躍動の樣を窺ふことが出來る。所屬中隊は八月十六日まで天津附近の殘敵を掃蕩し該地附近の警備に任じたが其間氏は不眠不休緊張精勵以て克く所命の任務を遂行した次で所屬隊は內蒙古張北に轉進し該地附近の警備に任じた。而して八月十八日氏は聯隊より選拔せられたる野口將校斥候に屬し分隊長となり長城線北方四軒の狼火溝大紅溝附近の敵情及地形の偵察に任じたが氏は積極勇敢克く活躍して斥候長を補佐し有利の資料を

提供し聯隊爾後の作戰に貢獻せし所多大であつた。次で二十日所屬部隊が外長城線に進出せる敵を擊攘し京綏線を遮斷せんとするや所屬中隊は午前八時長城線の敵に對し行動を起し逐次敵に近接し午後二時大隊展開するや中隊は大隊の右第一線となり小隊亦中隊の右第一線として長城線上(へ)のトーチカに對し攻擊を開始した。氏の分隊は最右翼分隊として攻擊前進を起すや敵は猛射を浴せ來りしも之を物ともせず克く分隊を掌握し的確なる射擊指揮を以て敵を制壓し率先勇敢躍進又躍進して逐次敵に近迫中氏の分隊は中隊の攻擊を妨害しつゝある(ニ)火點の左前方自動火器を有する敵を攻擊すべく命ぜられた。氏は適切に分隊を誘導して該敵の左側背に迫り猛射を浴せて之を擊退し次で午後七時薄暮に乘じ中隊が(へ)のトーチカに突擊を敢行するや氏の分隊は巧に敵の左側背に迫り之を包圍する如く勇敢に突入中隊の突擊奏功を容易ならしめた。然るに其南方第二線火點に據れる敵は尙ほ頑强に抵抗を續け居りしを以て中隊は更に第二第三小隊を第一線と爲し引續き此火點の攻擊に移つた。此日夕刻より沛然たる豪雨に全身づぶ濡れとなり而かも暗夜谷を越へ猛烈なる敵火を冒

し午後八時稍々過ぎ敵前三十米の稜線に到達し此處に態勢を整へ小隊長の突擊命令と共に猛然分隊を率ひて突入特有の武技を發揮し敵を刺殺すること數人遂に此陣地に據れる數十名の敵を擊退して之を占領するに至つた。實に此戰闘に於ける氏の活躍は目覺しきものがあつた。其後小隊は更に前方一軒家の敵を掃蕩すべく小隊長を先頭に前進午後九時該家屋に突入して之を占領せしが此時埋設しありたる敵の集團地雷一齊に爆發し無念小隊長以下十二名と共に遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏は鄕に在るや至孝出でゝ征旅に就くや素より忠孝一如親父平素の教訓を眷々服膺し專心君國に報ぜんとした。果せる哉其戰陣に立つや彈雨の下頗る勇敢常に陣頭に立ちて部下を率ひ掌握確實指揮亦適切新進氣鋭の手腕と特有の武技とを發揮し中小隊戰勝に寄與せし所甚大であつた。蓋しかくの如きは一身を君國に獻げ分隊長たる重責に邁進せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。然るに參戰幾何もなく外長城線の華と散りしは洵に痛惜に堪へざるも一戰玉碎して以て皇軍の威武を宣揚し開戰勞頭暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は万古不朽外長城線上に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國の前途を守護すると同時に一家の守護神ともなり老親の多幸を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵軍曹勳七等功六級　柴田一郎

### 勇敢なる分隊長膠着せんとする戰線を常に推進し全家寨の華と散る

氏は兵庫縣印南那伊保村の人にして父を龜太郎母をつねと云ひ大正四年五月十七日に生れ未だ獨身であつた。資性眞面目にして勤勉事を爲す積極的にして責任觀念强く大事に臨みては頗る勇敢であつた。昭和十年三月加古川中學校を卒業引續き神戸高等工業學校專修科に入り其修學途中昭和十一年一月徵兵として姫路步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして下士官候補者に採用せられ同年十二月熊本教導學校に入校勉學中事變勃發により昭和十二年七月歸隊し沼田部隊第六中隊に編入せられ第二小隊第二分隊長として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月には馬廠及滄州附近の戰闘並に十月上旬に亘る德州に向ふ追擊戰に何れも參加し分隊長として勇戰奮闘克く其任務を完ふした。

十月三十日より黃河北岸の掃蕩戰開始せられ十一月八日には所屬大隊は午前十時より行動を起し午前十一時頃金家寨北方部落に到着し玆に中隊は大隊の第一線となり金家寨の敵に對し攻擊を開始した。氏の小隊は中隊の左第一線となり氏は其火線分隊長として前進を起すや敵は熾んに射擊を浴びせ來りしも躍進又躍進勇敢に前進して敵前五六百米の距離に達した。此附近は遮蔽物なく暴露し加之此頃敵彈益々熾烈を極め前進愈々困難に陷り動もすれば其前進遲滯せんとするや勇敢なる氏は大聲叱咤しつゝ友軍砲兵の掩護射擊と相俟て敵火の間斷を利用し率先陣頭に立ちて逐次分隊を誘導前進せしめ敵前百米支那墓地の散在せる地點にまで到達した。第二小隊各分隊も相前後して概ね同一線上に態勢を整へしが敵の射擊は一層猛烈となり且右第一線小隊方面の前進遲滯せる爲戰線は遂に膠着狀態に陷らんとするに至つた。かくと見たる氏は勇躍身を挺して約五十米前方の凹地に躍り込み大聲に叱咤し小隊の前進を誘發し此線に於て突擊を準備すべ

く分隊の火力を最高度に發揮して敵を制壓しつゝ突擊の機熟するを待ちつゝありしが午後二時十五分頃敵彈次第に衰へ來れるを感知せし氏は斷然意を決し此機に乘じ將に白兵を揮つて突擊に移らんとし突擊の號令を下して率先敵陣に突入せんと身を起す其刹那無念敵彈胸部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。しかし中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより午後四時には完全に敵陣地を占領することを得た。

氏偶々時運に際會し待望の指揮官として其戰陣に立つや新進氣鋭意氣潑剌彈雨の下率先先頭に立ちて部下を率ひ掌握確實指揮的確每戰分隊の戰力を發揮して遺憾なかつた。殊に金家寨攻擊に於て戰線膠着せんとするや勇猛果敢戰線推進の動機を作り突擊發起の因を作爲せる如き是れ皆分隊長たる重責の存する所一死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。征戰中途にして氏の如き勇敢義烈の分隊長を喪ふ洵に痛惜に禁へざるも小ながら一隊の長となり奮戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は万世不朽皇軍戰史に輝き其英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國及一家の前途を守護して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵軍曹に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功六級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍步兵伍長勳八等功七級　飯島朝五郎

### 勇敢なる觀測手敵前至近に近迫步兵砲の射擊を有効ならしむ

氏は群馬縣佐波郡伊勢崎町の人にして亡父を字一郎母をフジと云ひ大正五年二月十一日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして事を爲す熱心積極的にして不屈不撓の氣慨を持つて居た。昭和三年三月敷島尋常小學校を卒業し同七年四月青年訓練所に入所し昭和十年一月現役志願兵として高崎步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績良好にして同年十二月上等兵に進級し同十一年十一月善行證書を附與せられて滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月森田部隊に應召第三步兵砲小隊に編入せられ觀測手として同月十四日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十二日より十四日に亘る永定河畔股家舖門村附近の戰鬪に際しては十四日午後零時二十分小隊が永定河畔に陣地進入するに先だち氏は觀測手として自ら敵陣地を偵察し其配備陣地の狀態等を報告して小隊長の射擊指揮を容易ならしめ且終始的確に射彈を觀測して步兵砲の威力を發揮せしめ又永定河渡河に際しては激流腰を沒する中を率先觀測器材を搬送し尙且火砲の分解搬送を援助する等小隊の渡河前進を容易ならしめ續いて十五日拒馬河畔東茨村附近の戰鬪に際しては午前十時五分小隊の陣地進入に當り氏は敵の目標となり危險なるにも拘はらず觀測手たる任務遂行上之を意とすることなく東茨村西端にある支那家屋の屋上に登り冷靜沈着其彈着を觀測し以て小隊の射擊を的確ならしめ又進んで拒馬河畔附近の敵陣地を偵察して射擊上有利の報告を小隊長に呈する等常に積極的に活躍し小隊の射擊をして戰機に適合し有効に發揚せしめた。

九月十六日小隊は午前十時三十分より行動を起し午前十一時頃馬辛庄に到着した。此の時南方二粁の地點に於て前方部隊が激戰中なりとの情報があり所屬隊は之に增援を命ぜられ直ちに行動を開始し大隊の左第一線たる篠原中隊に配屬を命

ぜられ午後一時五分頃射撃陣地に進入せしが此頃敵の銃砲彈は熾に陣地附近に落下し刻一刻激烈となりつゝあり然るに此附近一帶は高粱繁茂し通視頗る困難歩兵砲の射撃は意の如くならなかつた。此時氏は小隊長の命を受け猛火の下之に屈することなく匍匐前進して敵前百米にまで近迫した氏の大膽勇敢なる行動は一同の敬服措かざる所であつた、而かも氏は此地點に進出するや猛烈なる敵彈下にありて泰然自若熱心に敵情を視察し敵の配備就中重火器の位置を精密に小隊長に報告し又歩兵砲の射彈目標に落達する毎に正確に之を觀測し小隊長の彈着修正を容易ならしめかくして間もなく最も我に危害を加へつゝある掩蓋機關銃を先づ以て撲滅せしめ引續き逐次重要目標に對し一意專念觀測に從事中午後二時十分頃無念敵彈後頭部を貫通し遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏は戰陣に立つや毎戰積極勇敢歩兵砲の生命たる觀測に任じ彈雨の下或は屋上に登り或は敵前至近に迫り偵察詳細觀測的確只管任務の完遂に奮闘し皇軍歩兵砲の威力を發揮せしめて遺憾なかつた。實にかくの如きは重責の存する所身命を君國に献げて一死を鴻毛の輕きに致せる盡忠至誠の發露と云ふべきである。征戰中途あたら此良觀測手を喪ひしは痛恨に禁へないが然し其拔群の功績は皇軍戰史に輝き其赫々の芳名は武人の鑑として永遠不朽に語り傳へらるべく英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙皇國を守護し遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵伍長勳八等功七級　市山光利

### 決死敵前に鐵條網を破壞して姚官屯驛占領の端を拓く

氏は兵庫縣神崎郡寺前村の人にして父を善次郎亡母をケイと云ひ明治四十二年八月十五日に生れ妻ふくゑとの間に妙子愛子の二愛兒を擧げた。資性溫良眞摯にして責任觀念强く不屈不撓の氣慨を持つて居た。大正十三年三月高等小學校を卒業し其後は家庭に在りて家業に從事し昭和四年一月歩兵聯隊に入營其の在營間は克く軍務に精勵し品行方正諸成績亦良好にして上等兵を命ぜられ善行證書を附與せられて滿期除隊となつた。歸鄉後は再び家業に就きて勤儉產を治め又青年學校囑託として熱心鄉土青年の指導に努むる等村內の中堅人物として信望厚かつた。

支那事變起るや間もなく應召長野部隊に屬し岸田中隊の第二小隊擲彈筒分隊彈藥手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後は酷暑泥濘を冒して津浦線に沿ひ南進し九月十日馬廠附近の敵陣地攻擊に方りては聯隊豫備隊內に在りて本戰闘に參加し流河鎭への轉進に方りては尖兵の斥候となり豪膽機敏の行動を以て克く其任務を遂行し以て少兵の任務達成を容易ならしめた。

所屬部隊は馬廠陣地帶を突破後更に津浦線上敵の最後抵抗線と恃める滄州主陣地帶の一角たる姚官屯を攻略する目的を以て九月二十日午後十一時行動を起し先づ北部人合庄附近の敵を攻擊するに決し敵前四百米附近に進出し敵情地形の偵察を行つた。當時所屬小隊は中隊の左第一線であつたが敵は兵力の優勢を恃み新手を替へつゝ數次に亘つて逆襲して來た。氏は冷靜豪膽射手に協力して適時熾烈なる猛射を浴びせて敵に多大の損害を與へ之を擊退し中隊の偵察を容易ならしめた。

翌二十一日人合庄攻撃に際しては午後五時より友軍砲兵の攻撃準備射撃を開始するや所屬中隊は機を失せず敵の彈雨の間斷を利用して前進を起したが敵は我が中隊の近迫に連れ其火力は愈々猛烈となり前進困難となつた。此の時氏は敵彈雨飛の中に機敏勇敢に彈藥を補充し以て敵を制壓して中隊の前進を促進し敵前概ね百米に進出するを得た。折柄敵陣前に横はる巾四米深さ二米の水濠に決死架橋班の前進を起すや所屬分隊は機を失せず手榴彈射撃を以て敵を制壓して之に協力した。此際氏は彈藥手として自已の危險をも顧みず彈藥補給に努め以て分隊の射撃を中絶せしむる事なく決死架橋班の行動を適切に援助せしむるを得た。斯くて中隊の突撃に際しては率先敵陣地深く突入して縱横無盡に敵を突き捲くり赫々たる武勳を奏し拂曉頃南部人合庄の線に進出した。

二十三日午後三時所屬小隊は中隊の右第一線として姚官屯驛奪取の特別任務を受け攻撃前進を開始したが敵亦死物狂の猛射を浴びせ來り前進甚だ困難であつた。此時氏は分隊長宮浦上等兵を輔け戰友を激勵しつゝ匍匐前進して率先二條の水濠と二條の鐵條網を突破し驛構内に進入した。然るに驛構内には又もや鐵條網を設けありて已むなく敵前間近に停止するに至つた。併し一地に停止するは從らに損害を増すのみと氏は宮浦分隊長と共に敢然突入を決意し敵の十字火を物ともせず氏は逸早くも此鐵條網破壊に任じ見事に成功した。忽ち小隊は怒濤の巖に決する勢を以て突入した。時しもあれ宮浦分隊長は眉間に貫通銃創を受けばつたり斃れた。氏は分隊長を介抱せんと近寄るその瞬間に敵彈飛來左腋下に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。而して小隊は氏等の尊き犧牲に依り其後間もなく同驛を占領したが同驛の占領は堅壘中の堅壘たる姚官屯西側陣地の奪取に重大なる影響を與ふるに至つた。

氏や温厚にして沈勇の人。家庭に在りては一家の中堅として家政を治め良民の鑑として鄉土の敬慕を受け軍に從ひては衆兵の模範として上下の信望高かつた。今次聖戰に參加するや堅忍以て戰友を勵まし泥土飢渴の難行軍に堪え剛膽以て熾烈なる彈雨を冒して積極的に任務を遂行し常に赫々たる戰勝の礎石を成して居た。而して姚官屯驛の血戰は氏等の崇高なる犧牲的精神の發露に依て戰勝を得たるものにして其忠勇義烈眞に軍人の龜鑑たるものであつた。今や其壯容に接する能はず哀悼痛惜に堪えざるも氏の赫々たる功績は皇軍戰史に輝きて其芳名は千古に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神霊尚も皇國を守護し又一家殊に愛子等の前途に加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

## 陸軍歩兵伍長勳七等功七級　伊塚吾良

### 明朗沈勇の輕機關銃分隊長滄州激戰の華と散る

氏は兵庫縣宍粟郡富栖村の人にして父を近太郎母を芳江と云ひ大正四年二月十日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚篤實明朗にして孝心極めて深く又友情に富み諸人の愛敬を受け氏の學友等は氏の家を復習の家遊戯の家の如く心得慕ひ寄る有様にして信望極めて厚かつた。昭和五年三月鄉里の高等小學校を卒業したが神戸在住の叔母夫婦には子なく且商業上の手不足を感じありし際とて是非にと望まれて其家業を手傳ふ事になつたが氏の玲朗なる性格と勤勉なる努力とは叔母夫婦は勿論得意先の顧客も氏ならでは用が辨ぜぬと云ふ程の信用を受くるに至つた。而かも兩親並に他家に在りし妹の身を安じ常に之を慰め勵まし孝悌至らざるなかつた。昭和八年十二月現役志願兵として鳥取歩兵聯隊へ入營克く軍務に精勵し精勤章を附與せらるゝ事二回に及び又滿洲事變に關し勳功を樹て勳八等瑞寶章を賜はり尚在隊間の諸成績優秀にして伍長勤務上等兵を命ぜられ昭和十年十月滿期除隊に際しては歩兵科下士官適任證書並に善行證書を授與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長野部隊に屬し和仁中隊の第二小敵第六分隊長として勇躍征途に就いた。北支到着後所屬部隊は津浦沿線を南進し八月下旬津浦線上永定河畔の要衝たる靜海附近の諸陣地を突破し九月七日以來馬廠附近の堅固なる陣地帶に對し攻撃を準備するに至つた。所屬中隊は馬廠陣地の西北要點たりし小王莊の夜襲を命ぜられ九月九日午後八時頃より行動を起し泥濘の高粱畑と沼澤地を踏破し闇を利用して敵前三百米に接近した。氏の分隊は中隊の右第一線小隊に屬して居たが敵の斜射側射を受けて小隊の前進は甚だ困難となつた。其際氏は分隊を率ゐて敵の側方に迂回しその意表に出でゝ之に猛射を加へ以て頑敵を火制し中隊全般の攻撃前進を容易ならしめ戰勝獲得の爲貢献せる所至大であつた。

所屬中隊は更に九月十七日正午より早林庄の敵陣地を攻撃したが陣前の地形は高粱繁茂し且浸水の爲指揮連繫及行動共に甚だ困難であつた。氏の分隊は右小隊の最左翼分隊であつたが氏は敵彈雨飛の下に進んで小隊長との連絡は勿論隣接小隊との連絡に任じ中隊の戰鬪遂行に至大なる貢献をなし同日午後七時半遂に之を占領するに至つた。

所屬部隊は九月二十日より津浦線上敵が最後の抵抗線と恃める滄州附近の敵陣地帶に對し攻撃を開始した。敵は二年有半の歳月を費し最も堅固なる陣地を奥深く構築し各種銃砲火器を配置して周到なる防禦設備を完了し難攻不落を豪語して居た。所屬中隊は先づ人合庄の敵陣地を奪取すべき命令を受け九月二十一日日浚後より行動を起し所屬小隊の左第一線となつた。敵の陣前には幅約四米深約二米の大水濠があつたが之を渡過し更に陣前の鐵條網を乗り越え午後七時頃遂に敵陣地の一要點たる人合庄の陣地に突入して終夜接戰格鬪の上敵を驅逐し翌二十二日午前五時頃更に後方陣地に對し攻撃を續行すべき命令に接し朝陽東天に昇る頃前進を起したが前方約百米の堆土を利用せる敵の小銃チェッコ機關銃は豆を煎る如く猛射　矢り又敵の砲彈は氏等の身邊に集中し土砂爆煙を以て周圍を包み筆紙に盡し難き凄慘を極めた。部隊は已むなく匍匐しつゝ直前の壕内に進りつき暫し突撃の時機を待つた。午前八時四十六分當面の敵兵に退却の徴あるを認むるや忽ち突撃命令が下つた。斯かる中にも敵は死物狂ひの亂射亂撃を浴びせて來た。氏は敢然行くぞ！　續け！　射手前進！　と飛鳥の如く躍進して敵前五十米に達し敵に猛射を浴びせれば敵は浮足立ちて潰走し初めた。今や最後の突撃に移らんとする好機に氏は伏姿のまゝ動かず前進の命令も下さず部下分隊員は怪みて近寄り見れば氏は左眼下より後頭部にかけ貫通銃創を受け既に尊き犧牲となつて居た。所屬部隊は爾後日浚を待ち敵の主陣地に突入するに至つたが所屬中隊は滄州城の一番乗りとして驍名を謳はれた。鬼をも取り挫がん和仁中隊長は氏等十數名の尊き人柱の名を呼び「喜べ！　一番乗たぞ！安らかに瞑して護國の神となれ！」と號泣した。

氏や玲朗たる情義骨肉知友に洽く俊敏精勵衆兵の模範となり衆望自づから一身に蒐まり今次聖戰に參加するや輕機關銃分隊長の榮職を命課せられ分隊を打つて一丸となし戰機に投合して克く輕機關銃の威力を發揚し以て每戰中隊戰鬪の骨幹をなし赫々たる戰勝を獲得せしむるに至つた。而して滄州の激戰に此忠勇義烈の士を喪ひたるは轉だ哀悼痛惜に堪えざるも氏が滿洲事變並に今次事變梟次の勳功は皇軍戰史に牢記せられて後世永く芳名を傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵伍長に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵伍長勳八等功七級　井上秋治

**平漢線各地に勇戰し遂に拒馬河畔空爆に散る**

氏は群馬縣利根郡白澤村の人にして父を喜一郎亡母をなをと云ひ大正三年三月十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實處事熱心にして大事に臨み剛膽勇敢であつた。又兄弟に對する溫情特に濃やかであつた。大正十五年三月白澤尋常小學校を卒業し其後は銅鐵商として入營時に至つた。昭和十年一月徴兵として高崎歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして上等兵に進級し同十一年下士官適任證書を附與せられて滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月召集せられ森田部隊に編入小銃兵として同月十四日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三、十四日永定河附近の戰鬪に方りては所屬中隊は旅團豫備隊として司令部並に車輛部隊の警戒掩護に任じ又殘敵を掃蕩しつゝ勃々たる勇心を押へて第一戰に跟隨した。

九月十六日拒馬河畔望海庄附近可西務の敵陣地攻擊に方りては氏は新井准尉の指揮に屬し待望の第一線となり本戰鬪に參加することを得た。當日中隊は午後零時三十分行動を起し同二時三十分攻擊前進を開始した。敵は堅固なる既設陣地に據り頑強なる抵抗を爲し殊にトーチカ式側防機關は大に中隊の攻擊前進を困難ならしめた。之が爲中隊長は氏の屬する第三小隊に此側防トーチカの撲滅を命じ小隊は直に敵の十字火を冒しつゝ一進一止躍進して逐次此敵に向ひ近迫した。氏の所屬第五分隊は當初小隊の第二線となり擲彈筒を以て小隊の攻擊を容易ならしめつゝ第三分隊の後方近く跟隨せしが敵に近迫するや小隊長の命令に依り突擊すべく敵火を冒して前線に進出し愈々突擊命令下るや氏は分隊の中堅となり分隊長に從ひ敢然敵陣地に突入して奮戰しさしも堅固なりし該トーチカを見事奪取し其結果は延いて中隊の攻擊を容易ならしむるに至つた。而して午後五時三十分頃となるや敵兵約一ケ中隊は該トーチカを奮回すべく健氣にも小隊の正面に逆襲して來た。氏は分隊長指揮下に勇猛果敢白兵を揮つて我れより積極的に反擊し尙小隊の一部は敵の側背に迫り敵は遂に退却するに至るや機を逸せず直に之に追尾して可西務の一角にまで突入し奮戰の後該陣地を奪取し尙も敵を追擊したが其の追擊間敵機一機上空に現はれ其投下せる爆彈は氏の身邊に炸裂し無念右下腿に其爆創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の戰陣に立つや積極果敢分隊の中堅となり或はトーチカの占領に或は逆襲の擊退に或は敵陣一角の奮取に奮戰大に努め皇軍の精鋭を發揮し兵の本分を完うして遺憾なかつた。是れ一に氏が忠誠の發露と云ふべく征戰幾何もなくして北支の華と散りしは惜みても尙餘ありと云ふべきである。然し可西務附近の一戰に樹てたる拔群の功績は支那事變史に輝き新東亞建設の礎となりたる其芳名は千古に謳はれ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙皇國を守護し遺族の前途を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次て勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

# 陸軍歩兵伍長勳七等功七級　石川　愼

**模範的分隊長平漢沿線に勇戰偉功を樹て拒馬河畔に玉碎す**

氏は栃木縣芳賀郡市羽村の人にして亡父を唯一郎亡母はミチと云ひ大正五年七月一日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚而かも意志の堅固なる人であつた。昭和五年三月尋常小學校卒業引續き縣立眞岡中學校へ入學し五年間一日の缺席もなく自宅より三里半の途を自轉車通學し同十年三月同校を卒業昭和十一年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして同年十二月上等兵に進級した。

支那事變起るや坂西部隊第七中隊に屬し大橋小隊分隊長として昭和十二年八月二十九日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三十四日の永定河畔胡林南方地區附近の戰鬪に際しては十四日午前十時第一線たる中隊の分隊長として勇躍永定河を徒涉し雨注する敵彈下を物ともせず部下を激勵しつゝ勇敢に前進して敵に肉薄した。而かも氏の部下の指揮掌握は確實的確にして克く射擊威力を發揚し遂に敵を擊退するに至つた。斯くて引續き敵を急追し途中南公山に於て敵は我前進を拒止せんとして抵抗し所屬隊は翌拂曉攻擊を開始するや氏の小隊は敵の退路に迫り攻擊した。此の時氏の分隊は第一線となり猛烈なる射擊を加へ遂に敵をして敗退するに至らしめ以て中隊の任務達成を容易ならしめた。

引續き同日午後所屬部隊は揚家屯附近より拒馬河右岸北相附近一帶に堅固に陣地を占領せる敵に對し攻擊すべく敵前渡河を敢行した。此の時氏は第一線小隊の右分隊長として小隊長に續き渡河し敵岸に到着するや直に敵彈雨注の中を部下を叱咤激勵しつゝ躍進を重ね敵前至近の距離に近迫し益々火力を最高度に發揚し突入の機を窺ひ居りしが友軍砲兵の支援射擊に引續き擲彈筒の集中射擊を開始するや之に膚接肉薄し是等の射擊に依り敵第一線愈々動搖せるを看取すると同時獨斷部下分隊を提げて率先々頭に立ち勇猛果敢に敵陣地に突入し銃劍を揮つて奮戰し遂に小隊は敵の第一線陣地を占領し次で左部落方面より逆襲し來れる敵に對し機敏に射擊目標を指示し之を制壓せんと號令した其刹那頭部に貫通銃創を受け遂に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の戰陣に立つや分隊を率ふるに率先々頭に立ち頗る勇敢掌握確實指揮的確或は機敏なる戰機の看破となり或は果敢なる突入となり或は機宜に適せる射擊となり其活躍目覺しく一意戰勝に向つて邁進す。かくの如きは是れ職責の存する所身命を君國に捧げて斃れて後已む忠誠の發露と云ふべく征戰幾何もなくして氏の如き有爲勇敢の分隊長を喪ふは洵に痛恨盡きざるも其赫々の武勳は千載に輝き芳名は千古に謳はれ英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し又遺族殊に老母の前途を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵伍長に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。